富山県小杉町・大門町

小杉流通業務団地内遺跡群

第３・４次緊急発掘調査概要

1982年3月

富山県教育委員会

発刊にあたって

小杉町と大門町にまたがる金山丘陵は、かねてより、古代の製鉄炉・須恵器窯など、手工業生産を中心とした遺跡や、古墳の多い所として知られています。

昭和52年、この金山丘陵地内で、小杉流通業務団地の建設が始まりました。このことに関連し、富山県教育委員会では、過去4か年間にわたり、この団地造成区域内に所在する遺跡群の調査を実施してきました。ここにまとめた調査概要が、地域の古代史解明や、郷土の文化財理解の資料として、幅広く活用していただければ幸いです。

この調査の実施にあたり、ご協力をいただいた地元や関係機関の方々に、深くお礼を申し上げます。

昭和57年3月31日

富山県教育委員会
教育長　屋敷平州

例　言

1．本書は、小杉流通業務団地建設の造成工事に先立ち実施した小杉流通業務団地内遺跡群（射水郡小杉町・大門町所在）の第3次・第4次緊急発掘調査の概要である。

2．調査は、富山県土木部用地課、富山県土地開発公社から委託を受けて、富山県教育委員会が実施した。調査にあたっては、文化庁記念物課の指導を得た。

3．第3次調査は試掘調査と本調査に分けて実施した。調査期間・発掘面積はつぎのとおりである。

試掘調査（昭和55年4月16日～昭和55年12月1日の間に10日）

No.2 遺跡	11月26日～11月27日の間に2日	約700m²	No.18遺跡C地区　4月16日～4月21日の間に2日　約400m²
No.3 遺跡	11月28日～12月1日の間に2日	約800m²	No.20遺跡B地区　4月22日～4月23日の間に2日　約500m²
No.7 遺跡北地区	11月25日～12月1日の間に3日	約550m²	No.32遺跡　5月8日　1日　約100m²

本調査　（昭和55年4月16日～昭和55年12月25日の間に143日）

No.3 遺跡	7月10日～7月25日の間に11日	約3,000m²	No.18遺跡C地区　4月15日～6月20日の間に40日　約5,100m²
	12月2日～12月22日の間に11日	約　240m²	No.20遺跡B地区　5月23日～5月30日の間に3日　約　450m²
No.6 遺跡	8月5日～9月30日の間に19日	約2,500m²	No.32遺跡　6月4日～6月19日の間に10日　約　360m²
No.7 遺跡	6月2日～12月25日の間に109日	約5,600m²	

調査参加者はつぎのとおりである。

富山県埋蔵文化財センター上野章・狩野睦・池野正男・宮田進一・久々忠義（以上調査担当者）　岸本雅敏・神保孝造、奥村吉信・逸見譲・高橋孝（以上調査員）

事務局は、富山県埋蔵文化財センターにおき、主任川口徳・文化財保護主事山本正敏が調査事務を担当し、所長竹内俊一が総括した。

No.18遺跡C地区の航空測量は、北陸航測K.Kによった。

4．第4次調査は試掘調査と本調査に分けて実施した。調査期間・発掘面積はつぎのとおりである。

試掘調査（昭和56年10月19日～昭和56年11月26日の間に19日）

No.19遺跡	10月19日	1日　約　90m²	No.23遺跡　10月27日～11月24日の間に6日　約　400m²
No.21遺跡	10月30日～11月26日の間に9日	約3,400m²	No.24遺跡　10月19日～10月20日の間に2日　約　330m²
No.22遺跡	10月30日～11月2日の間に2日	約　150m²	No.25遺跡　11月4日～11月6日の間に3日　約　250m²
No.23遺跡	6月2日	1日　約　180m²	No.26遺跡　11月4日～11月26日の間に4日　約1,000m²

本調査　（昭和55年4月16日～昭和55年10月16日の間に113日）

No.2 遺跡	4月24日～5月1日の間に3日	約　10m²	No.6 遺跡　4月16日～8月6日の間に64日　約5,000m²
No.3 遺跡	4月20日～5月26日の間に19日	約　800m²	No.7 遺跡北地区　7月17日～10月16日の間に53日　約3,400m²
No.4 遺跡	4月27日～4月28日の間に2日	約　70m²	

調査参加者はつぎのとおりである。

富山県埋蔵文化財センター上野章・池野正男（以上調査担当者）、岸本雅敏・宮田進一・久々忠義（調査員）

事務局は、富山県埋蔵文化財センターにおき、主任荒井真一郎・文化財保護主事神保孝造が調査事務を担当し、所長吉岡英明が総括した。

遺跡の遺構写真の撮影には、文化財保護主事狩野睦が協力した。

5．考古地磁気の測定については、富山大学理学部教授広岡公夫氏にお願いし、その報告を本書に収めさせていただいた。

6．発掘調査期間中及び遺物整理期間中に奈良国立文化財研究所埋蔵文化財センター長田中琢氏はじめ、石川考古学会々長高堀勝喜・富山考古学会々長清益・富山大学人文学部教授秋山進午・岡助教授和田晴吾・金沢美術大学助教授小島俊彰・富山考古学会々員西井龍儀・藤田富士夫・伊藤隆三・高橋修宏（順不同）の諸先生方・諸氏の来訪があり、数々の指導・助言をいただくことができた。

7．本調査の全過程で一貫して文化課文化財保護主事橋本正氏の指導・助言を得た。

8．本書の作成にあたり、執筆と編集は上野章・狩野睦・池野正男・宮田進一・久々忠義が行ない、埋蔵文化財センターの他の職員の助言・協力を受けた。なお文責は文末に記した。

9．末筆ながら、この調査に数々の指導・助言あるいは便宜・協力をたまわった方々に、厚く謝意を表します。

目　次

発刊にあたって　例言

I　地形と周辺の遺跡……1
　第１図　遺跡の位置と周辺の遺跡……1
II　調査の経緯……2
　表１　本調査結果一覧……2
　第２図　小杉流団許周地内及び周辺の遺跡分布図…3
III　第３次調査の概要……4
　1　No.3 遺跡……4
　第３図　No.3 遺跡の地形と区割図……4
　第４図　No.3 遺跡遺構全体図……5
　第５図　第７号墳主体部……5
　第６図　古墳出土遺物実測図……6
　表２　No.3 遺跡古墳群一覧……6
　2　No.7 遺跡……7
　第７図　No.7 遺跡の地形と区割図……7
　第８図　No.7 遺跡古墳群全体図
　第９図　第２号墳第１・２主体部実測図……9
　第10図　第２号墳出土遺物実測図……9
　第11図　第３号墳第１・２主体部実測図……10
　第12図　第２主体部出土遺物……10
　第13図　No.7 遺跡墓群全体図……12
　第14図　第１号窯跡実測図……13
　第15図　第１号窯跡出土遺物実測図……14
　第16図　第１号窯跡出土遺物実測図……15
　第17図　第１号窯跡出土遺物実測図……16
　第18図　第２号窯跡実測図……18
　第19図　第２号窯跡出土遺物実測図……18
　第20図　第３・６号窯跡実測図……20
　第21図　第３号窯跡出土遺物実測図……21
　第22図　第４号窯跡実測図……23
　第23図　第４号窯跡出土遺物実測図……24
　第24図　第３・４号窯跡出土遺物実測図……25
　第25図　第５号窯跡実測図……26
　第26図　第５号窯跡出土遺物実測図……28
　第27図　第５号窯跡出土遺物実測図……29
　第28図　第７号窯跡実測図……30
　第29図　第１号住居跡実測図……31
　第30図　第５・６号住居跡実測図……32
　第31図　第４号住居跡実測図……33
　第32図　第７号住居跡実測図……33
　表３　No.7 遺跡住居跡一覧……34
　第33図　No.7 遺跡集落遺構全体図
　第34図　No.7 遺跡集落出土遺物実測図……37
　第35図　No.7 遺跡集落出土遺物実測図……38
　第36図　No.7 遺跡集落出土遺物実測図……39
　第37図　No.7 遺跡集落出土遺物実測図……40
　第38図　No.7 遺跡集落出土遺物実測図……41
　3　No.18遺跡Ｃ地区……42
　第39図　No.18遺跡Ｃ地区の地形と区割図……42
　第40図　No.18遺跡Ｃ地区遺構全体図
　第41図　第２号住居跡実測図……43
　第42図　遺構実測図……44
　第43図　No.18遺跡Ｃ地区出土遺物実測図……48
　第44図　No.18遺跡Ｃ地区出土遺物実測図……49
　第45図　No.18遺跡Ｃ地区出土遺物実測図……50
　第46図　No.18遺跡Ｃ地区出土遺物実測図……51
　第47図　No.18遺跡Ｃ地区出土遺物実測図……52
　4　No.20遺跡Ｂ地区……53
　第48図　No.20遺跡Ｂ地区・No.32遺跡の地形と区割図…53
　5　No.32遺跡……53
　第49図　No.32遺跡出土遺物……54
　第50図　No.32遺跡出土遺物実測図……54
　第51図　炭焼窯跡実測図
IV　第４次調査の概要……55
　1　No.2 遺跡……55
　第52図　No.2 遺跡地形図……55
　2　No.3 遺跡……55
　第53図　No.3 遺跡の地形と区割図……55
　第54図　第２・３号住居跡・出土遺物実測図……56
　第55図　Ａ地区・第９号墳出土遺物実測図……57
　第56図　第９号墳実測図……57
　3　No.4 遺跡……58
　第57図　No.4 遺跡地形図……58
　4　No.6 遺跡……58
　第58図　No.6 遺跡の地形と区割図……58
　第59図　No.6 遺跡遺構全体図
　第60図　出土遺物……59
　第61図　第１号住居跡実測図……59
　第62図　第３号住居跡実測図……60
　第63図　No.6 遺跡出土遺物実測図……62
　第64図　No.6 遺跡出土遺物実測図……63
　第65図　No.6 遺跡出土遺物実測図……64
　第66図　No.6 遺跡出土遺物実測図……65
　第67図　No.6 遺跡出土遺物実測図……66
　第68図　No.6 遺跡出土遺物実測図……67
　第69図　第１号窯跡実測図……68
　第70図　No.6 遺跡出土遺物実測図……69
　5　No.7 遺跡北地区……70
　第71図　No.7 遺跡の地形と区割図……70
　第72図　No.7 遺跡北地区遺構全体図
　第73図　第101・102号住居跡実測図……71
　第74図　遺構実測図……72
　第75図　遺物実測図……73
　第76図　遺物拓影図……74
　第77図　遺物拓影図……75
　第78図　主体部実測図……76
　第79図　古墳出土遺物実測図……77
　第80図　台地上出土遺物実測図……78
　第81図　遺構実測図……79
V　各遺跡のまとめ……80
　表４　No.7 遺跡古墳群一覧……82
　第82図　台地上の遺物出土地点……83
　第83図　窯跡床面形態……83
　第84図　No.7 遺跡窯体別の器種……84
　第85図　住居跡配置図……86
VI　結語……89
　第86図　遺跡及び地区毎の器種……92
VII　小杉流通業務団地内遺跡の考古地磁気測定……94
写真図版

表紙写真　No.7 遺跡（南東から）

I　地形と周辺の遺跡

本遺跡群は、小杉町青井谷地内と大門町水戸田地内に所在する。

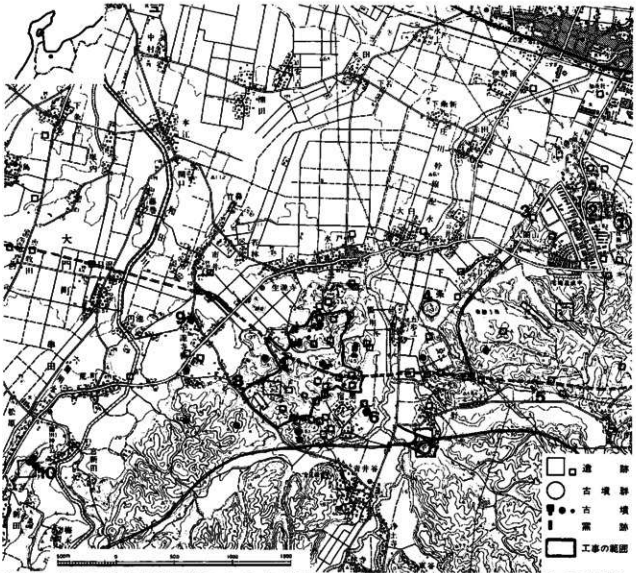
当地域は、金山丘陵の縁辺部にあたり、北側に射水平野が見える。標高は、20～35mである。北側の平野部とは、10～25mの比高差を測る。丘陵は、開析され、谷が入り組んだ樹枝状となっている。谷深くまで水田が行なわれ、斜面地は、畑地として利用されている。地層は、新第三紀のシルトからなる青井谷泥岩層を基盤として、礫・砂泥互層と火砕岩層が堆積している〔小杉町　1958〕。丘陵北側では、良質の粘土が採取され、本遺跡群の近くには、今も瓦工場の煙突がつづいている。

周辺の遺跡の分布を見ると、平野部に近い丘陵上に立地する遺跡と丘陵のやや奥深い所に立地する遺跡がある。

前者の遺跡は、弥生時代末～古墳時代にかけてのものが多い。古墳時代初頭の中山南遺跡、弥生時代後期の方形周溝墓を検出した囲山遺跡、前方後方墳を含む五歩一古墳群、径35mの円墳の大塚古墳、20基の群集墳が確認された山王宮古墳群、古墳時代初～平安時代にわたる大集落の上野遺跡がある。

後者の遺跡は、県民公園太閤山ランド内の遺跡群があげられ、奈良時代～平安時代の製鉄炉や製鉄に関連する炭焼窯の検出例が多い。

（宮田）



第1図　遺跡の位置と周辺の遺跡　1.二ッ山古墳群　2.中山南遺跡　3.囲山遺跡　4.山王宮古墳群　5.天池窯跡　6.宿屋古墳　7.上野遺跡　8.生福寺窯跡　9.大塚古墳　10.申田新遺跡

II　調査の経緯

富山県知事部局では、流通機能の向上と道路交通の円滑化を図る目的で、昭和48年北陸自動車道小杉インターチェンジの北西約1kmの地点に小杉流通業務団地を建設する計画を策定した。この建設事業は小杉町・大門町にまたがる約51haの丘陵地を造成し、路線トラックターミナル・区域トラック施設・量販店配送センター・倉庫・卸売施設等の諸施設を配置するものである。造成工事は昭和54年から昭和59年にかけて行なわれ、第Ⅰ期から第Ⅲ期工事まで地区を分割して順次進められてきた。

富山県教育委員会では、昭和50年12月に建設予定地及び周辺の遺跡分布調査を行った結果、予定地内から新たに31箇所の遺跡を発見した。そこで富山県土木部・富山県土地開発公社・富山県教育委員会の三者による事前協議を重ねて、以下の第1次から第4次調査を実施してきた。

第1次調査は、建設予定地内の代替地造成に係るNo.20遺跡の発掘調査である。調査は昭和52年11月から昭和53年12月までに遺跡全体の試掘調査と丘陵上半部の記録保存調査を行っている〔池野他　1979〕。

第2次調査は、第Ⅰ期造成工事予定区内とこれに隣接する13遺跡の試掘調査を実施した。この内幹線道路に関連するNo.9・13・17遺跡とNo.16・18遺跡A地区の一部を対象として本調査を実施した。No.17遺跡第1号墳は、組み合せ木棺を内部主体とする5世紀代に属する円墳である。またNo.16遺跡では古墳時代後期と奈良時代前半の須恵器窯跡各1基を発掘した。この内第2号窯跡は大規模な灰層が存在し、出土した須恵器には多岐な器種がみられた〔上野他　1980〕。

第3次調査は、昭和55年4月から12月26日までの間に143日を要した。調査は当初第Ⅰ期造成工事区内に係るNo.20・18遺跡C地区と第Ⅱ期造成工事区内に係るNo.6・7遺跡の本調査を予定した。しかし工事の進捗に伴い、No.32遺跡の炭焼窯跡、No.3遺跡の古墳が新たに発見され、急遽本調査を行うことになった。この調査の結果、周辺にも古墳その他の遺跡が予想されたためNo.2・3遺跡の未発掘区と共に試掘を実施して、翌年度に本調査を実施することになった。

第4次調査は、昭和56年4月から10月16日までの間に113日にわたり、第Ⅱ期造成工事区に係るNo.2・4・6遺跡とNo.3・7遺跡の北側部分を本調査の対象とした。これに引き続き10月19日～11月26日までの間に19日にわたり第Ⅲ期造成区域に含まれる8遺跡の試掘調査を行っている。　（上野）

年度	遺跡名	所在地	時代	種類	調査の遺構
一次 53	No.20	小杉町青井谷字丸山	先土器・縄文 弥生・奈良（主）	集落跡	住居跡3・段状遺構1・穴18
二次 54	No.9	大門町水戸田字石名山	縄文		溝1
	No.13	小杉町青井谷字丸山	奈良		墳状遺構1・穴13
	No.16	大門町水戸田字願尺	縄文・古墳 奈良（主）	窯跡 集落跡	須恵器窯跡2・住居跡1・段丘遺構1 穴9
	No.17	〃	縄文・古墳（主）	古墳	墳墓1・円墳1・木棺墓1・穴5
	No.18・A地区	小杉町青井谷字丸山	奈良	集落跡	住居跡1・穴5・溝5
三次 55	No.3	大門町水戸田字石名山	縄文・古墳	集落跡・古墳	住居跡1・円墳8・穴6
	No.7	〃	縄文・古墳 奈良・平安	古墳・窯跡 集落跡	円墳4・須恵器窯跡7・住居跡27 掘立柱建物7・穴・溝多数
	No.18・C地区	小杉町青井谷字丸山	縄文・奈良（主）・平安	集落跡・窯跡	住居跡2・炭焼窯跡1・穴・溝多数
	No.20・B地区	〃	縄文・古墳・奈良		穴2
	No.32	〃	先土器・平安	窯跡	炭焼窯2・穴2
四次 56	No.2	大門町水戸田字石名山			穴2
	No.3	〃	縄文・古墳	集落跡・古墳	住居跡2・円墳1・穴13
	No.6	〃	先土器・縄文・古墳・奈良・平安	集落跡	住居跡14・溝・穴多数
	No.7・北地区	〃	縄文・古墳・中世	集落跡・古墳	住居跡3・円墳4・穴多数

表1　本調査結果一覧

第２図　小杉流通業務団地計画地内及び周辺の遺跡分布図

Ⅲ第３次調査

1　No.３遺跡

(1)　調査に至る経緯

分布調査で発見されたNo.３遺跡付近を、昭和55年度土取り工事のため、ブルドーザーが表土を剝いだ。その時、発見された古墳が第１～７号墳である。同年秋、周辺の試掘調査を実施して、第８・９号墳を確認した。No.３遺跡の範囲が第１～９号墳を含むことが判明した。

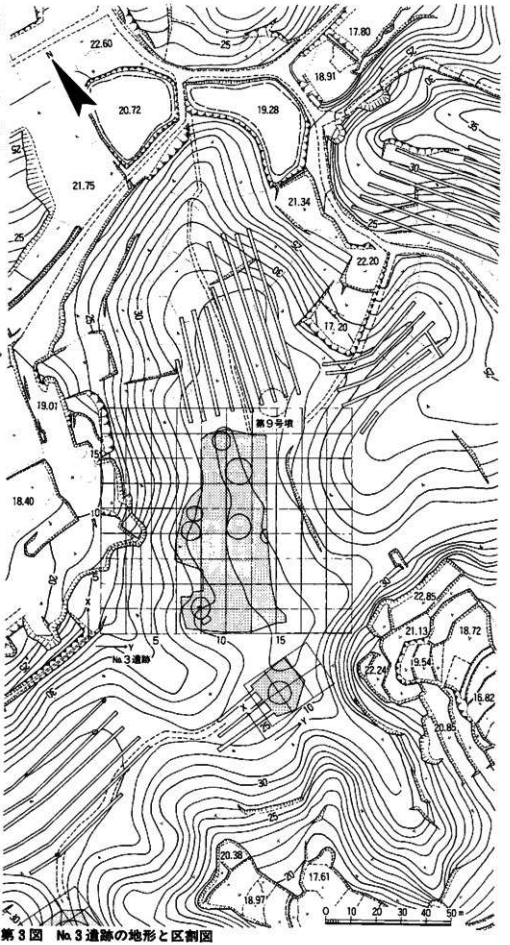
本年度の発掘調査は、第１～８号墳である。

(2)　立地（第３図）

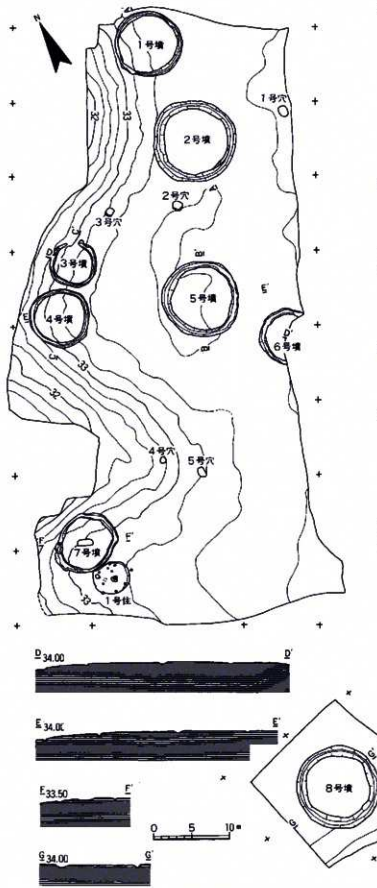
本遺跡は、南北に細長く延びる、開析された丘陵上に立地する。標高32～33mである。南東350mに、No.17遺跡の古墳が見える。西側は、平地の水田が見おろせ、14mの比高差を持つ。

(3)　縄文時代（第４図）

遺構　中期中葉の住居跡１棟を検出した。北側の隅は、第７号墳に切られているが、4.9m×4.2mのやや楕円形である。中央に60cm×50cmの穴がある。炉は、地床炉である。主柱構造は、６本主柱Ｘ型〔檜本　1976Ｂ〕となろうか。



第３図　No.３遺跡の地形と区割図



第4図　No.3遺跡遺構全体図

遺物（図版第3の4）　大部分は、住居跡から出土した。口縁端部に爪形を施す土器もあるが、多くは、隆帯の上にヘラ状工具で刻む、中期中葉の古府式の土器である。

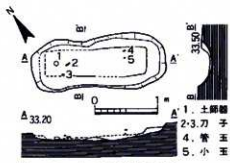
(4) 古墳時代（第4・5・6図）

遺構　古墳の立地は、丘陵の縁辺部で、張り出した尾根にあるもの（第3・4・7号墳）、丘陵中央の平坦地にあるもの（第5・6号墳）、平坦地であるが、丘陵のくびれ部にあるもの（第8号墳）がある。古墳は、現状ではすべて、盛土が認められないが、周溝の覆土の観察で、盛土があったことがわかる。墳形は、すべて円形で、第7号墳以外は主体部を確認できなかった。規模は、10.3~11.1mのもの（第2・5・8号墳）、7.4~8.7mのもの（第1・5・7号墳）、6.4mのもの（第3号墳）に分かれる。

第7号墳は、やや楕円形に近い形をとる。中央部に墓坑がある。長さは、2.14mで、幅は、73~89cmと中央部でややくぼむ長方形である。この墓坑の中に、割竹形木棺の跡が見える。棺は北西側半分では明確でないが、1.61m（推定）×0.42mの長方形で、主軸をN—59°—Wにとる。棺底は、やや北西側に傾く。棺内の中央部より南東寄りに小玉・管玉、北西寄りに土師器・刀子が見える（第5図）。

遺物（第6図）　出土遺物は、すべて古墳の棺内及び周溝内に伴うものである。

須恵器　1は、杯蓋で、口径14.5cm、器高4.2cmである。天井部は偏平で、ヘラケズリ（時

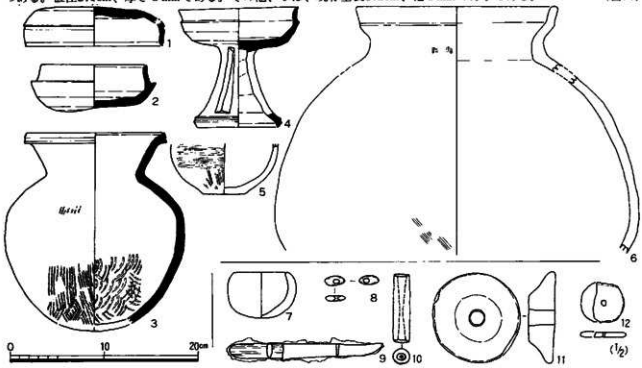


第5図　第7号墳主体部

計回り）を施す。天井部と口縁部との間に凹線を巡らす。2は、口径11.2cm、器高4.6cmの杯である。器受部は、外上方に延びる。口縁端部は、内傾へやや傾斜する。底部は、焼け歪みのため、凸凹である。ヘラケズリ（逆時計回り）を施す。外底面に「・」のヘラ記号がある。器面全体に黒い粒が吹き出ている。3は、口径14.6cm、器高21cm(推定)の壺である。体部全体にタタキ目を施した後、ヨコナデで体部上半のタタキ目を消す。4は、長脚で、1段の透しを3方に持つ無蓋の高杯である。口径12.6cm、器高12.7cm、脚底径8.5cmである。杯部は、口縁部から底部にかけて段がつく。杯底部にヘラケズリ（時計回り）が見える。脚部の端部には、段をつけて、内に屈曲する。

土師器　5は、壺の底部である。体部下半にヘラ磨き、底面近くはハケ目を施す。外底面には、「＋」のヘラ記号がある。6は、口径21cmの壺である。体部上半にわずかにヘラ磨き、丹塗りの跡が見える。7は、手づくねの鉢である。

石製品　8は、長さ1cm、厚さ3mmの蛇紋岩製小玉である。10は、碧玉製管玉で、直径8mm、長さ3.6cmである。11は、滑石製紡錘車で、直径4.7cm、厚さ1.4cmである。12は、滑石製有孔円板で、半損しているが、中央に孔が1つある。直径2.1cm、厚さ3mmである。その他、9は、現存全長8.2cm、幅8mmの刀子である。（宮田）



第6図　古墳出土遺物実測図　1～5.第2号墳、6.第6号墳、7～10.第7号墳、11.第1号墳、12.第4号墳

古墳名	墳形	規模	周溝幅	周溝深さ	封土	墓坑規模	棺形式	棺規模	出土遺物
1	円	8.7	0.3～0.9	0.1～0.3					紡錘車
2	円	11.1	0.8～1.3	0.3～0.5					須恵器・土師器
3	円	6.4	0.4～0.7	0　～0.2					
4	円	7.8	0.5～0.8	0.2～0.3					土師器・有孔円板
5	円	10.3	0.7～1.3	0.1～0.3					
6	円	7.4	0.3～0.8	0.1～0.3					土師器
7	円	8.5	0.4～0.9	0.1～0.2		2.14×0.89	割竹形	1.61×0.42	土師器・刀子・管玉・小玉
8	円	11.1	1.0～1.5	0.3～0.5					
9	円	11.9	1.8～2.4	0.2～0.5	(0.15)	2.85×1.35	割竹形	2.4×0.5	須恵器・鉄鏃

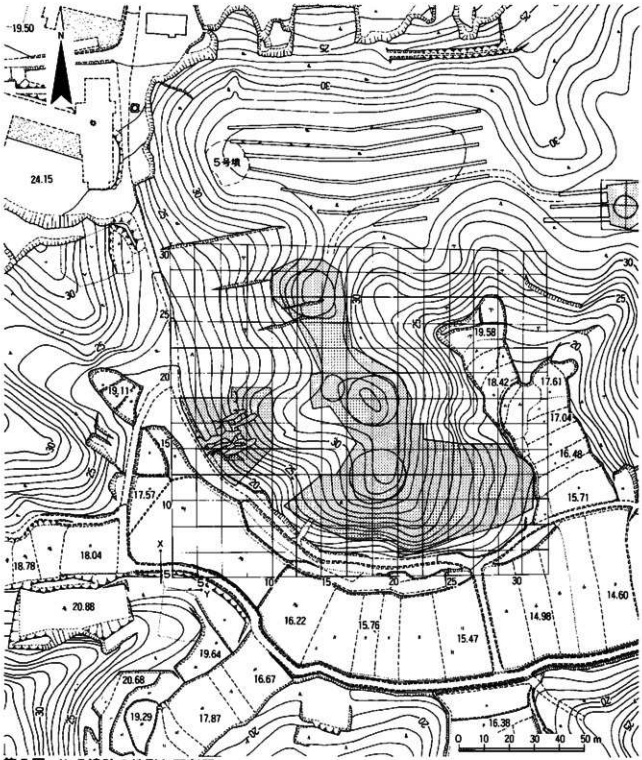
表2　No.3遺跡古墳群一覧　単位（m）

2　No.７遺跡

(1)　立地（第７図）

No.７遺跡は、標高約35ｍの平野部に面した東西にのびる丘陵が、「L」字状に折れ曲り、南々東方向の谷部へのびた小台地上に位置する。

遺構は、標高約32～34ｍの尾根上に古墳群、標高約18～27ｍの西斜面上に窯跡群、標高約17～30ｍの南、東斜面上に集落跡が存在する。以下、古墳群、窯跡群、集落跡に分割し記述する。



第７図　No.７遺跡の地形と区割図

(2) 古墳群（第8図）

概要 古墳群は平野に面した台地が樹枝状に折れ曲り、南南東方向の谷部に延びる尾根上に5基確認された。本年の調査概要は4基で、北側より第1・4・2・3号墳と呼ぶ。

第1号墳（図版第4の3、5の1～3）

第1号墳は狭小な尾根幅がわずかにふくらみをもつ地点に位置する。墳丘の現状は、封土が傾斜面にそって西側に流失した形態を示し、さらに、北、南側に削平を受け遺存状態は良くない。墳丘の標高は、34.38mを測る。

周溝は全周し、東側はやや直線的であるがほぼ正円を呈し、周溝を含めた外周径は17.5mを測る。周溝の規模は、幅1.3～1.7m、深さ5～30cmで、東側は深く、西側は浅い掘り込みである。底面は平坦で、断面形態は逆台形を示す。標高は東側で33.20m、西側で32.50mと約70cmの比高差を持ち、地形に束縛された結果と推定される。当墳は外周径17.5m、周溝底面から現墳頂部までの最大高1.8mの規模を有する円墳である。

封土は南北幅7m、東西幅5mの範囲で墳丘中央部に認められるが、厚さ10～15cmと薄く、攪乱を多く受けた単一の黄褐色地山層である。

埋葬施設は地山層まで掘り下げたが確認できず、すでに流出したものと考えられる。

周溝出土遺物（図版第5の4） 2箇所から須恵器破片が出土したが、生焼け品が多く、大型甕の部分的破片であることから、傾斜面に位置する窯跡群の遺物と推定される。従って後世の混入品であろう。

第4号墳（図版第6の9）

第4号墳は尾根中央部、第2号墳の西隣に位置し、占地状況からは第2号墳より後の構築と考えられる。

墳丘は、削平のため消失している。周溝は、西側部分には認められないが、幅40～80cm、深さ約15cmを測り、当初は全周していたものと推定される。墳形は、周溝の平面形態から円墳と推定されるが、正円ではなく、東西方向に長い卵形である。埋葬施設は、削平、攪乱が著しく確認できなかった。

第2号墳（図版第5の5・6）

第2号墳は、尾根が東西にふくらみをもつ台地中央部に位置し、墳頂部の標高は34.10mを測る。

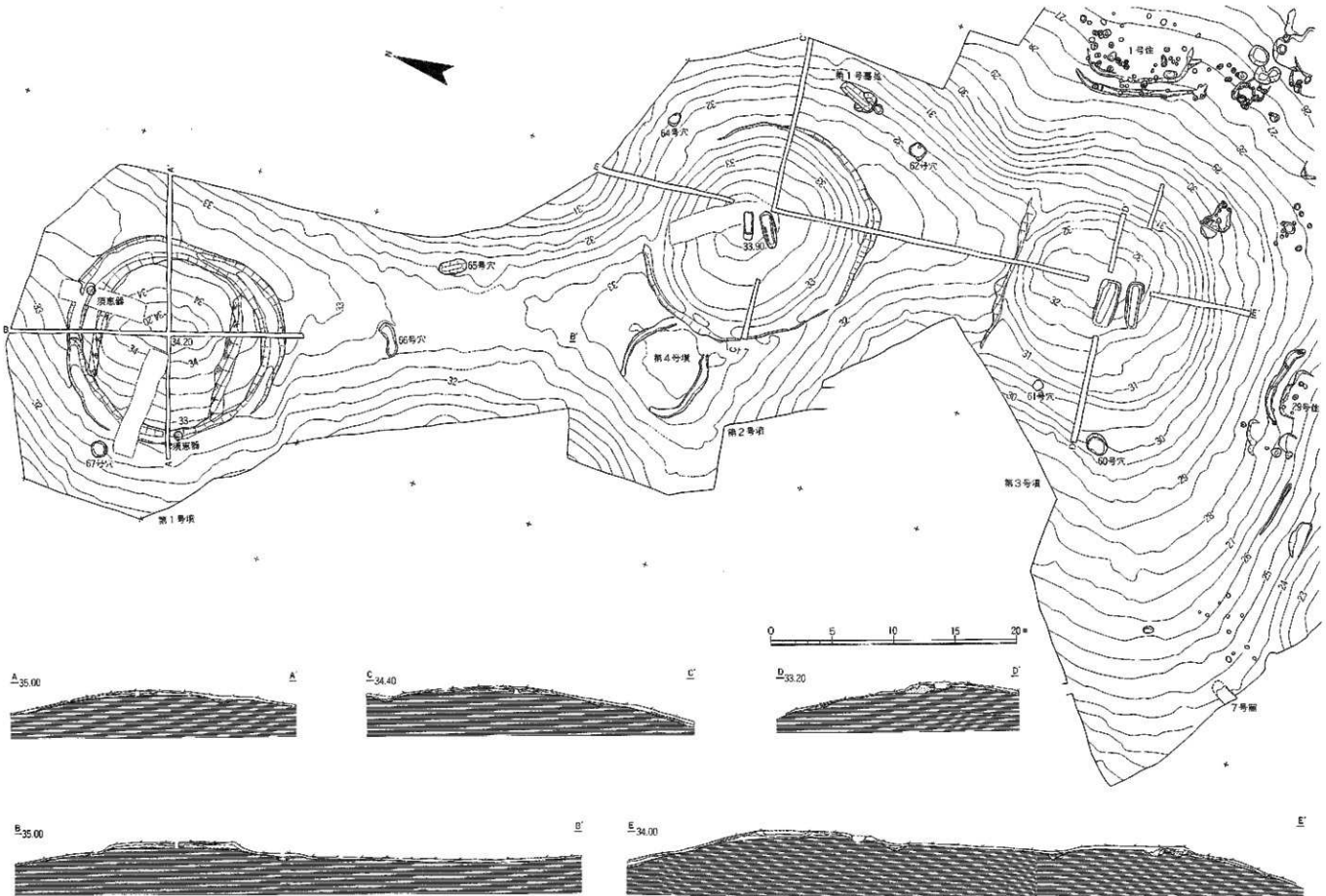
墳丘は封土が若干流出して平坦に近い。形態は円形であるが西側の基底面の掘削が少なく、東西ラインが長くなる。整形は、尾根切断を伴う南・北側が丁寧で、墳頂部への傾斜はスムーズである。また、東側は自然地形を利用して整える。封土は南北幅9.5m、東西幅7.7m、厚さ40cmの規模で認められる。構築方法は旧表土層上に直接盛るが、最初茶褐色土、黄褐色土の混りの多い土層を墳頂縁辺部に厚く、中央部に薄い傾斜をもたせ、さらに、混りの少ない黄褐色地山層を中央部に盛り埋葬施設のスペースを作る。

周溝は南、北側では墳頂部からスムーズな傾斜をもって周溝底面に至る。断面形態は逆台形を示し、外周高は約40cmを測る。東側も同様の傾斜をもって周溝底面に至る。幅は30cmを測り、外周高は地山地形の関連で5～20cmと低い。西側は墳丘部との傾斜変換点をもち、幅1.4m、外周高40cmを測る。覆土は底面から20cmの厚さで封土流出土である黄褐色土層が広がり、さらに、黒褐色土層が堆積する。黄褐色土層は掘削整形した墳丘裾部にも数cmの厚さで堆積し、墳丘構築後の早い段階で封土流出が始まることが伺える。周溝底面の標高は東側で31.10m、西側で32.40mを測り、西側から東側に、地形に束縛される形で低くなる。

第2号墳は、外周径18.3m、周溝底面から墳頂部までの最大高1.8mを測る円墳である。

埋葬施設（第9図、図版第5の7・8）

墳頂中央部に、北東一南西方向にほぼ並列して2箇所の墓壙を検出した。北側を第1、南側を第2主体部と呼ぶ。両主体部は重なり合わず、最も近接する地点で50cmの間隔をもつ。この様な状態からは埋葬順序を決定することは不可能であるが、主体部の長軸方向に見られる若干のずれは、同時埋葬ではないことをうかがわせる。



第8図　No.7遺跡古墳群全体図

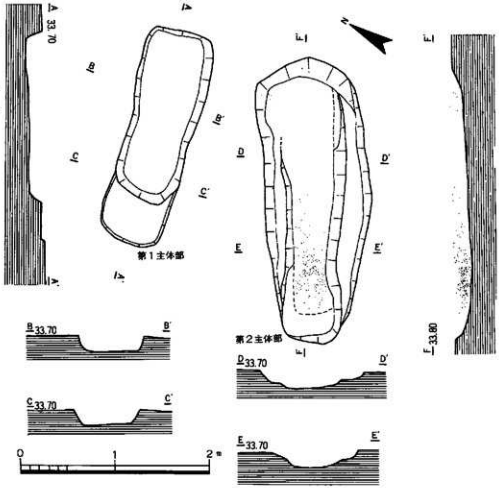
第1主体部　第1主体部は長さ2.35m、幅80cm、深さ2cmの規模で掘られた墓坑が二段掘りになり、東側に寄り、長さ1.85m、幅80cm、深さ17cmと規模を縮小する。長軸をN—75°—Eに取り、底面は封土層中にとどまる。

木棺の痕跡は確認できなかったが、覆土、墓坑の掘り方から推察すると組み合わせの箱形木棺になろう。

出土遺物（第10図1）

滑石製の臼玉2個出土した。臼状のもので径3.5mm、厚さ2.2mmを計る。

第2主体部　第2主体部の墓坑は長さ2.9m、幅1.1m、深さ18cmの規模をもつ。この中に納められた組み合わせと考えられる箱形木棺の痕跡は、両木口部など不明確な部分も多いが、遺物出土状況等を考え合わせると長さ約2.4m、幅約55cmの規模となり、長軸をN—60°—Eに取る。



第9図　第2号墳第1・2主体部実測図

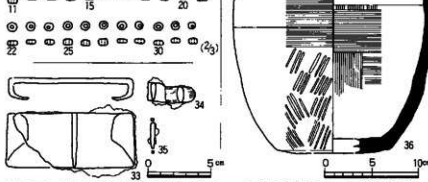
棺内出土遺物には、鉄製鍬先、刀子片、臼玉がある。鉄製鍬先は中央部、刀子は西寄り、臼玉は西側に集中し、一部は東側にも見られる。これらの遺物は、散乱した出土状態を示しており、特に臼玉の出土レベルの高低差が著しく、棺上に置かれていた可能性が強い。また、臼玉出土状況からは、被葬者は西頭位で埋葬されたものであろう。

出土遺物（図版第5の9～11）

鉄製鍬先（第10図33）　平鍬のもので、折りかえし基部から一方を欠き、刃先の幅10cm、高さ4.5cm、厚さ4mmである。折りかえしは刃先の方を斜めに切りとり、1.7cm折りまげる。

刀子（第10図34）　刃部の大部分を欠く。関近くで幅1.4cm、厚さ3mm、茎の長さ2.5cm、厚さ6mmである。

臼玉（第10図2～32）　臼玉は滑石製で、総数315個総延長64cmになる。



第10図　第2号墳出土遺物実測図

1.第1主体部，2～34.第2主体部，35.封土，36.墳丘上

玉は臼状のもの、ソロバン玉状のもの、管状のものがあり、径2.9～4.7mm、厚さ1.35～3.00mmのものが含まれる。

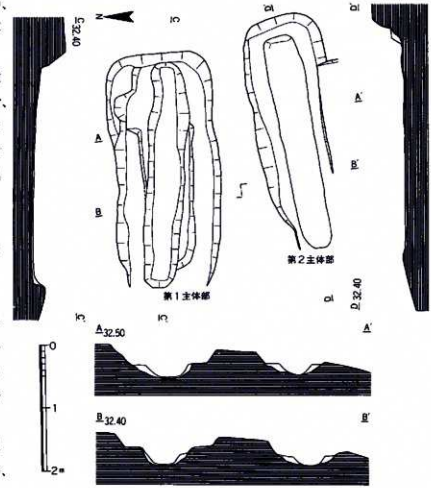
墳丘上の遺物（第10図36） 36は墳丘東斜面表土層から出土した須恵壺で、奈良時代に属する。他には6世紀末に比定される高杯脚部破片がある。封土、旧表土層中からは縄文土器が検出された。

第3号墳（図版第6の5・8）

第3号墳は丘陵尾根先端部で、第2号墳の南側約11mの距離に位置する。墳頂部の標高は32.64mを測る。

墳丘は封土が大部分流出し、開墾による攪乱で平坦に近い。封土は東側から南側部分にかけて一部残存し、最も厚い部分で20cmを測る。北、西側部分では、表土層下に地山層が現れる。

掘削は北側の尾根切断に伴なう溝及び、墳丘基底部に限られる。このため、墓坑は地山層を掘り込んで構築され、元来、自然地形を利用した封土の少ない墳丘であったと推察される。周溝は北側部分にのみ認められ、最も深い部分で50cmを測り、断面形態は「V」字状に近い。外周壁の平面形態は直線的で、溝幅は、尾根裾に向かうに従って増す。東・西・南側部分は掘削によって墳裾を整え、テラス状の緩斜面を作り墓域を画する。北側周溝底面と南側テラス部では約1.5mの比高差をもち、墳頂部までは、それぞれ1.1、2.6mを測る。



第11図　第3号墳第1・2主体部実測図

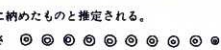
第3号墳の外周径は東西方向約21.5m、南北方向約19m、最大高2.6mの規模を有する円墳である。

埋葬施設（第11図、図版第6の6・7）

墳頂中央部に東西方向にほぼ並列する2箇所の墓坑を検出した。先に触れた様に封土が大部分削平されていたが、掘り込みが地山層に深く達していたため確認できた。北側を第1、南側を第2主体部と呼ぶ。両主体部は切り合わず、新旧関係は不明である。最も近接する東側で55cmの間隔を保つ。

第1主体部　主体部の墓坑は長さ3.8m、幅1.7mの規模をもち、底部の棺を納める部分だけさらに掘りさげた二段掘りで、棺の長さ3.6m、幅60cmの割竹形木棺である。また、東側北壁、中央から西側の南壁部分には埋めもどしが認められるが、これは木棺が墓坑内に納まらず、墓坑長軸に対して、斜めに納めたものと推定される。

第2主体部　主体部は長さ3.75m、幅1.3mの規模をもつ墓坑内に長さ3.45m、幅55cmの割竹形木棺を納める。棺の長軸はN－75°－Eにとる。



出土遺物（第12図1～10）　滑石製の臼玉10個が出土した。径2.7～3.85mm、厚さ1.6～2.7mmで、ソロバン玉状のものが多い。　（池野）

第12図　第2主体部出土遺物

(3) **窯跡群**　(第13図、図版第7の1・2)

第1号窯跡(第14図、図版第7の3～5)

立地と窯体規模　第1号窯跡は最北端に位置し、焚口付近で21.30m、煙出し底面で24.70mの標高を測り、窯体は3.3mの比高差をもつ。また、谷部との比高差は約3mで、中位レベルに構築される。窯体主軸方向はN―75°―Eで、等高線とほぼ直交する。遺存状態は良く、焚口から煙出しまで完存し、また、燃焼部の天井が一部残存する。

窯体の長さは約9m で、前庭部、煙出し上面のスリ鉢状ピットを含めた総延長は約14mを測る。

前庭部　平面形態は平行して延びた焚口側壁が外側にほぼ直角に折れまがり、床面幅を広げ、再び内側にカーブして方形状の形状を示す。規模は幅約3m、長さ約3.5mで、中央には複雑に掘り込まれたピットをもつ。灰層には若干の傾斜変換をもって連なる。覆土は黒色の炭化物層と焼土を多く含んだ赤褐色土が互層となる。また、横断図ではピット底面から上面約50cmまでの上層はレンズ状に堆積し、その上面は小ブロックで複雑な堆積状況を示し、前者の位置までは早い段階で埋められたものであろう。さらに、縦断図の堆積土は焚口は低く、灰層に接する前庭部端が高いことから、かなりの傾斜を持って灰がかき出されたものと推定される。

焚口と燃焼部　焚口から床面の傾斜変換部までの長さは約3mで、床幅は焚口が最も狭く、次第に広がり、それぞれ約1.2、1.6mを測る。この部分の天井が一部残存し、幅1.75m高さ1.15m、横断面はかまぼこ状を呈する(たちわりH―H')。床面の傾斜は3～4度でほぼ水平に近い。　床は奥の部分に厚さ約3cmの青灰色の還元層が1枚認められるが、手前は赤色酸化層が床面に現われ、焚口付近では還元・酸化粒を含んだ茶褐色土に変わる。側壁も同様で、焚口付近では還元層は薄く、酸化層が厚みを増す。

焼成部　傾斜変換部から煙出しまでの長さは約6.1mを測り、床は傾斜変換部から弓なりに反りあがりながら傾斜角を増し、中央部に達し、その後直線的に煙出しに至る。傾斜角は最も急な中央部で約35度を測る。還元した床面は、中央部より煙出しにかけては厚さ約1cmの1枚のみであるが、中央部より手前にかけては約4cmの厚さで計2枚認められる。また、厚みを増すことから窯体内でこの部分が最も高温になるものと考えられる。

床面下には、中央部側壁近くから燃焼部にかけて樹枝状の2本の溝が掘り込まれている。溝は前後関係をもち、1本は床面構築時に、他は、操業中に掘り込まれ、長さ約1.3mにわたって土器片で被い暗渠溝をなす。

側壁の貼り壁の枚数は一律ではなく、多い部分で3枚認められる。補修は傾斜変換部から中央部にかけて認められ、粘土を貼り付けた補修痕を残す(図版第7の3・5)。床面上には、甕破片・焼き台と考えられる河原石が散在する。

煙出しと排水溝　焼成部の床がせばまりながら登り、煙出しで丸くふくれ出し、床面はほぼ水平となる。床・壁面ともに還元層は認められず酸化層のみである。さらに、煙出しからは、窯体直線上の奥に長さ約1.6mのスリ鉢状のピットが掘り込まれる。壁には酸化層がみられる。

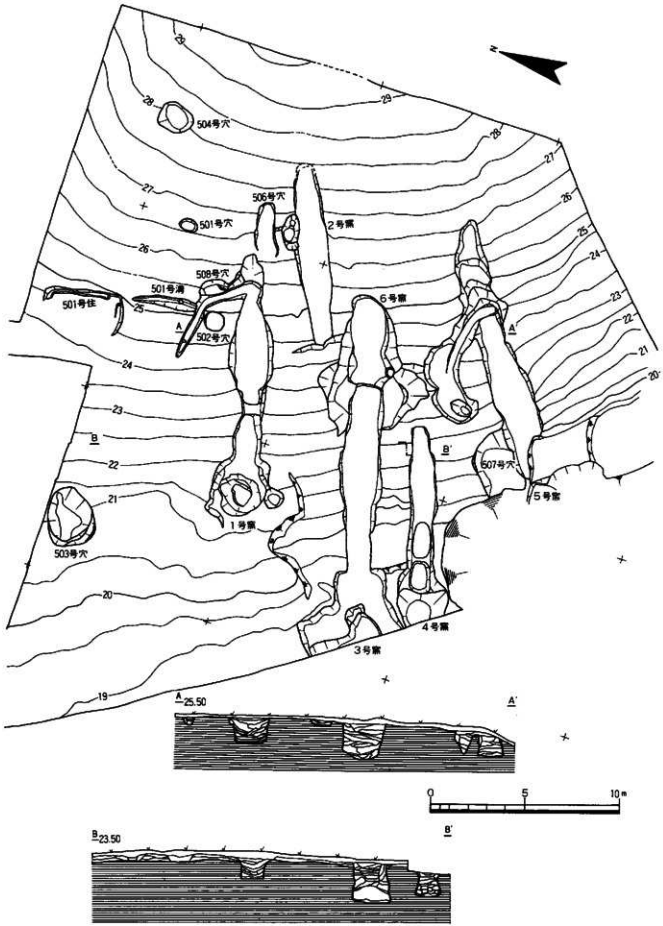
排水溝は煙出しから北側に等高線を斜めに切って、「く」の字状に約6mの長さに掘り込まれる。掘り込みの断面形態は「U」字状を呈し、幅約50cm、深さ約40cmを測る。

灰層　窯体構築の際、かき出された黄褐色地山土が窯前に幅約6m、長さ約11mの規模で旧表土層上に認められ、その上に、厚さ約10cmの灰層が下方へ扇状の広がりをもって堆積する。灰層の一部は第3号窯跡削底部覆土上に広がる。

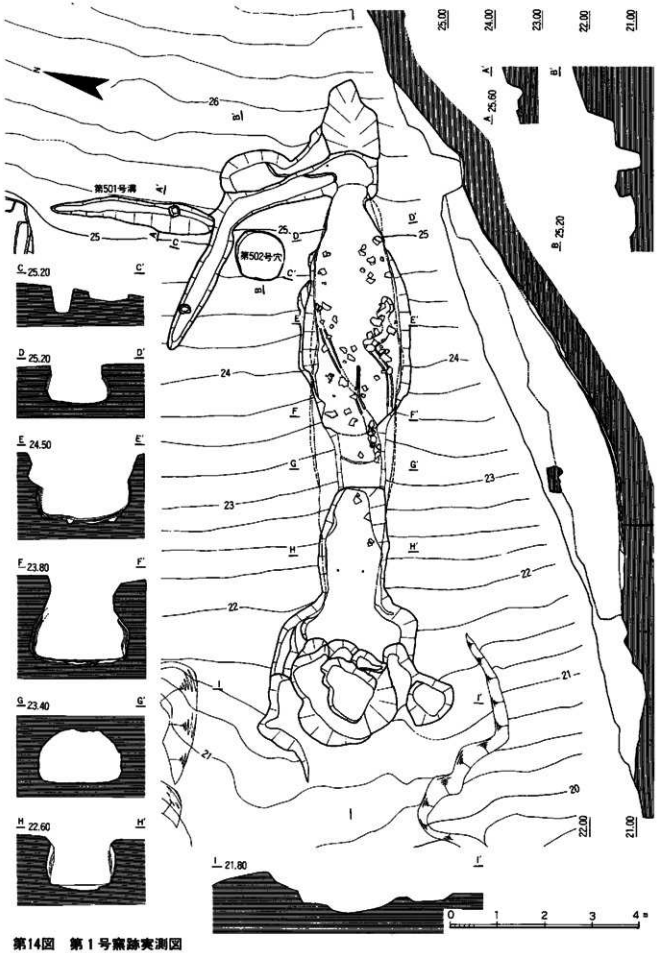
出土遺物(第15～17図、図版第9の1～11)

杯蓋(第15図1～14)　丸味のある天井部で口縁部との境がわからないもの(4～8・10～12)と、口縁部が垂下するもの(13・14)がある。口縁端部は丸く終り、天井部の一部にはヘラケズリを施すものもある。1～3は、口径10.5～11.8cmを計る小型品ながら器高が高い。

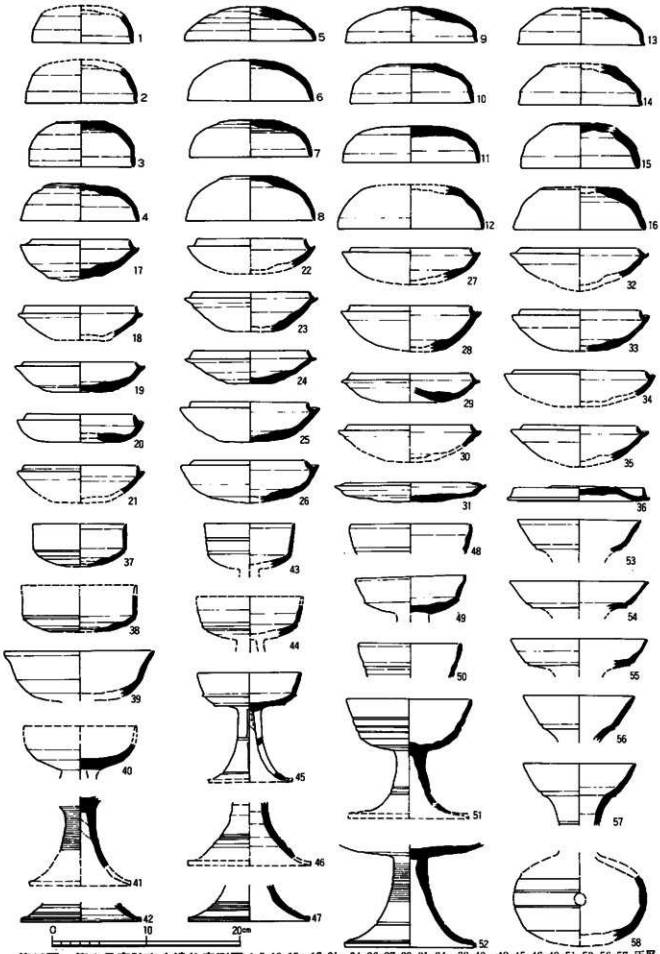
杯身(17～36)　丸味のある底部に受部は短かく上外方にのび、端部は丸い。たちあがりは低く、内傾したのち直立し、端部は丸い。底部には部分的にヘラケズリを施すものもある。



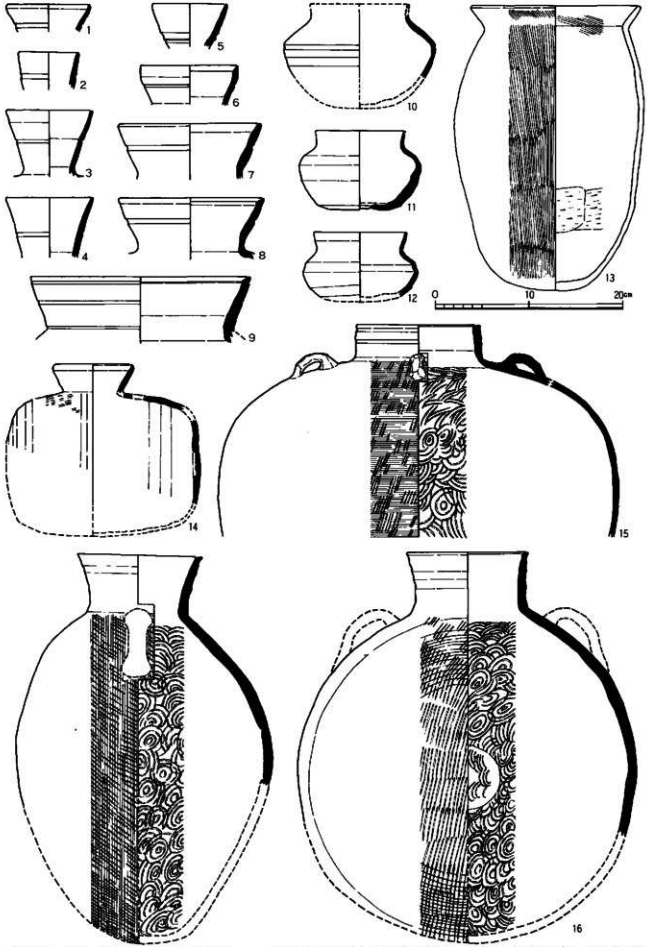
第13図　No.7遺跡窯跡群全体図



第14図　第１号窯跡実測図

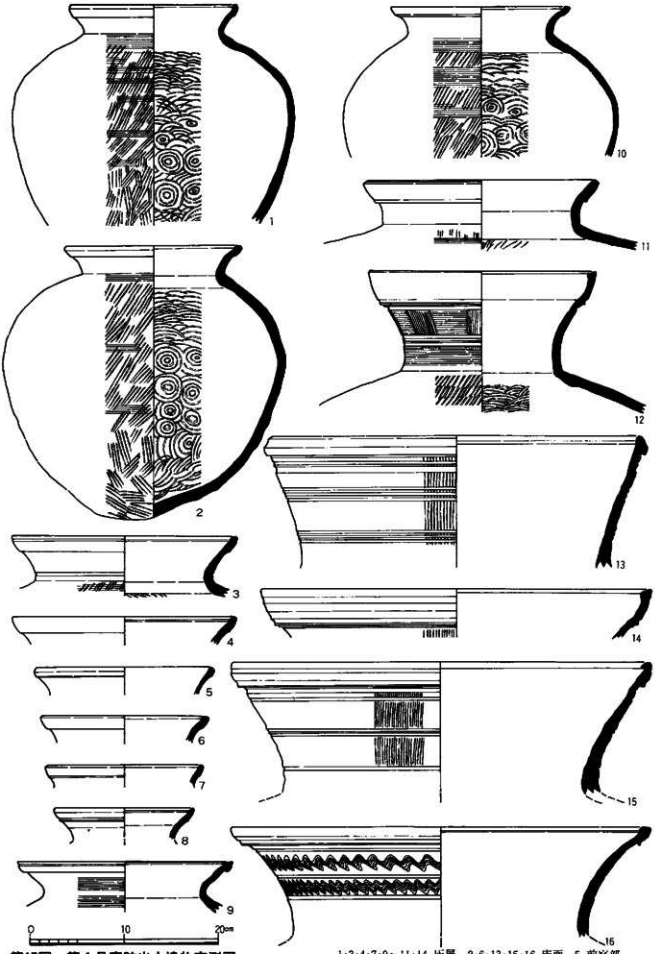


第15図　第１号竪跡出土遺物実測図　4・5・13・15～17・21～24・26・27・29・31・34～38・40～42・45・46・49・51・53・56・57.灰層　1・3・9・12・14・18・30・47・58.前庭部，2・6・20・28・32.焚口，7・11・19・33・52・54.覆土，8・25・39・43・55.床面



第16図　第１号竪跡出土遺物実測図

2·3·5·8～11.灰層，7·12·14.前庭部，4.焚口，6·15·16.覆土，13.508号穴



第17図　第1号竪跡出土遺物実測図

1·3·4·7·9～11·14.灰層　2·6·13·15·16.床面　5.前庭部
8.焚口　12.覆土

壺蓋（15・16）　15・16はほぼ同じ器形で厚作りである。

杯身（37・38）　体部は直線的に立ちあがる。底部はヘラケズリ調整し、体部と底部の境に凹線をめぐらす。

高杯（39～52）　39・40・43～45・48～51は無蓋高杯で、杯部の体部と底部は凹線（43・48・50・51）、稜（49）凸帯（45）をもって別けられる。脚部は細長くしぼり、裾部は外方に大きく広がる。脚部の中位、中位から裾部、裾部の端部近くには、凹線を数本めぐらす。45には、2段4方からの透しが穿たれるが、無いものが多い。

鉢（53～58）　細い口頸部は、外反し、口縁部との境に凹線がめぐる。58は、最大径をはさんで上下に2本の凹線を施し、凹線の間に円孔を穿つ。

提瓶・平瓶・横瓶（第16図1～6・14・16）　2は提瓶。3は平瓶の可能性が強いが他は不明。14は、外反した頸部に口縁端部が内傾し、丸くおさめられる。体部は、タタキの後、ヨコナデ・カキ目を施す。16の口頸部はやや外反し、口縁端部は平坦で内傾する。体部のふくらみは少なく、タタキの後、カキ目を施す。

短頸壺（10～12）　短かく外反した口頸部で、底部にはヘラケズリを施す。10の体部肩には凹線をめぐらす。

甕（15、第17図1～16）　頸の短かい概して小型のものと大型のものに大別される。前者はゆるやかに外反した口頸部が、口縁近くで段をなして端部に至る。端部形態には内傾・平坦・内上方がある。後者の口縁部はバラエティーにとみ、口頸部の文様には、波状文・斜線文がある。第16図15は牙付襞で直立した口頸部に肩のはった体部がつく。

第2号窯跡（第18図、図版第7の6）

立地と窯体規模　標高は焚口付近で約24.30m、焼成部奥付近で約27.80mを測り、約3.50mの比高差をもつ。窯体は半地下式の構築方法をとり、前庭部・煙出しは流出して遺存しない。長さ約9.8m で、最大幅及び地山層からの最大深度は、燃焼部と焼成部との傾斜変換部付近に位置し、それぞれ1.6・1.1mを測る。主軸方向はN－65°－Eにとる。

焚口と燃焼部　焚口・燃焼部の残存長は約3.2mで、床面の平面形態は、焚口手前では約1mの幅をもち、広がりをもちながら燃焼部に入り、そして、扇状に角度を変えて幅を増し、焼成部へと連なる。傾斜変換部での床面幅は約1.6mを測る。

床面は、約5度の傾斜をもって燃焼部に登り、その後、約2度の傾斜をもって、焼成部との傾斜変換部へくだる。

床面の枚数は、燃焼部奥で還元層1枚が認められるほかは酸化層のみである。また、傾斜変換部付近の床面上には、河原石、須恵器甕破片が集中するが、これは、焼成部中央から手前に置かれていたものが流れ落ちたものである。

壁の断面は焚口付近（たちわりE－E'）、燃焼部（たちわりD－D'）ともに上広がりで直線的に立ちあがるが、傾斜変換部を過ぎると弧をえがく。還元層は1枚認められフラットな面を残し、構築時の側壁と考えられる。

焼成部　傾斜変換部から奥に長さ約6.2m残存する。床は、傾斜変換部より約33度の傾斜ももって中央に至り、その後、約28度と傾斜を緩めながら奥に登る。還元した床面は、中央近くから奥にかけて2枚認められる。床面上には、直径約20cm、深さ約5cmの小ピットが掘り込まれるが、ピット壁面及び底面には還元層はみられず、河原石を固定するためのものであろう。

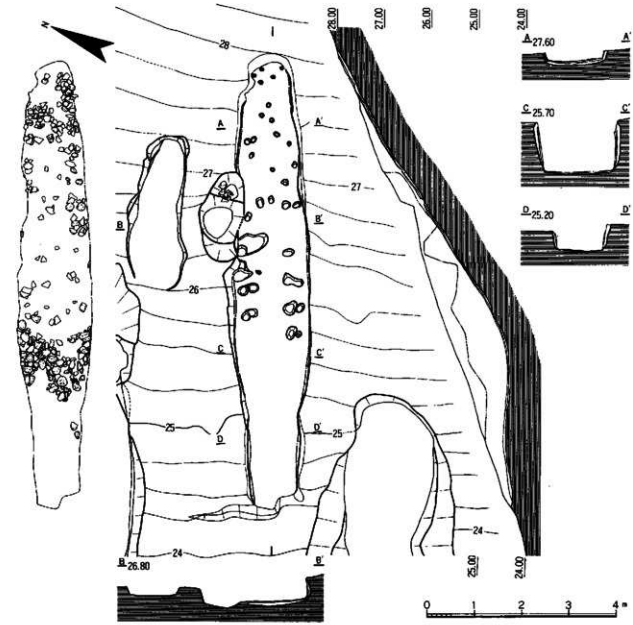
壁の補修は、床面と同様に中央から奥にかけて1回認められる。

出土遺物　（第19図、図版第9の13・14）

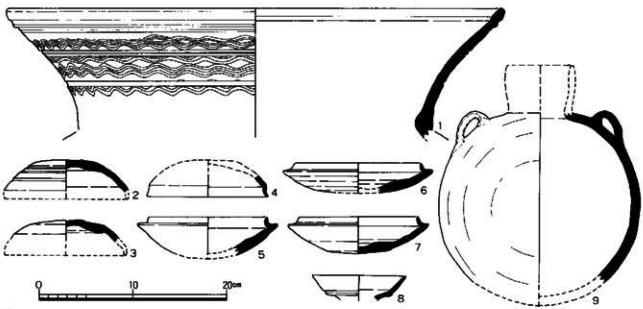
杯蓋（2～4）　丸味のある天井部と口縁部との境が明瞭で、口縁部はやや内湾気味に下外方に開き、中位で外反して端部に至る。2の天井部には3本の凹線がめぐる。

杯身（5～7）　口径12.8～13.1cmを計り、底部は浅く扁平で、内湾気味にのびた体部から上外方に厚味のある受部が付く。たちあがりは内傾したのち、丸味をもってのび端部は尖る。

鉢（8）　口径10cmの小型の口縁部をもち、頸部との境に凹線を施す。



第18図　第２号窯跡実測図



第19図　第２号窯跡出土遺物実測図

1・2・5・6～8．床面　3．灰層　4．前庭部　9．6号窯

第３号窯跡（第20図、図版第８の１・２・４）

立地と窯体規模　斜面裾部に位置し、第４号窯跡の北側約1.9ｍに並列して構築される。標高は焚口付近で20.50ｍ、煙出し付近で25ｍを測り、4.50ｍの比高差をもつ。窯体の全長は約10ｍ、最大幅1.95ｍを測る。煙出しは第６号窯跡の構築時に破壊され、約10cmの立ちあがりを残すのみである。

覆土最上層には約30cmの厚さでレンズ状に堆積した黄褐色土層が認められるが（第13図セクション）、第２号窯跡または、第６号窯跡構築時に排出されたものであろう。窯体の主軸方向はＮ－76°－Ｅにとる。

前庭部　前庭部奥は焚口側壁が直角に折れまがり幅を増す。平面形態は長方形を呈し、規模は幅2.7ｍ、長さ約1.7ｍを測る。掘り込みの深さは約40cmで、床面は平坦である。前庭部手前の南側掘り込みは扇状に広がる。北側は、長さ約２ｍの規模で一旦扇状に広がりながら、その後、幅を狭める方向に角度を変える。中央には浅い不整形のピットが掘り込まれる。

焚口と燃焼部　焚口から焼成部との傾斜変換部までの長さは約2.9ｍを測り、床面の幅は焚口が1.1ｍと最も狭く、焼成部に向って数値を増す。焚口から燃焼部にかけての床面は、傾斜が認められず、ほぼ水平である。床面の還元層は、燃焼部の一部にみられ、焚口では黒色土を床面とする。床面下には、焼成部手前の北側壁際から焚口中心部に連なる長さ約4.8ｍ、幅約20cmの排水溝が構築される。排水溝は須恵器破片によって被覆される。

焼成部の窯体断面形はカマボコ状を呈するが、焚口近くのたちわりＦ－Ｆ′では、北側壁が一旦弧を描いたものが角度を変え、垂直に立ちあがる。さらに、たちわりＦ－Ｆ′より奥に約40cmの位置で、北側壁還元層が約40cmの幅で上下に直線的に切れる部分がみられた（たちわりＡ－Ａ′）。南側壁は上部撹乱で不詳であるが、このことは、天井部に長さ約1.1ｍの張り出しを構築し、焚口、燃焼部で高かった天井部を低くしたものと推定される。

焼成部　傾斜変換部から煙出しまでの長さは約6.5ｍで、床は傾斜変換部から弓なりに反りあがりながら傾斜角を増し、最大傾斜34度を測る。床面の還元層は、焼成部近くに認められる他は、黒色化した酸化層である。床面上には褐破片、河原石、壁塊が焼き台として利用されている。

煙出し　焼成部からの床面が傾斜を変え、テラス状となる部分が煙出しと推定され、傾斜角10度を測る。

出土遺物（第21図、図版第９の12・15～21、10の１～５）

杯蓋（１～14）　口縁部が内傾して垂下するもの（１～３・７・８・12・13）、天井部と口縁部との境がわからないもの（４～６・９～11）がある。14の天井部には焼成前の穿孔がみられる。

杯身（16～30）　丸味のある底部に受部は上外方にのび、端部は丸く内側にまき込む。１～３・19～21は最終床面上より杯蓋セットで出土。17の底部には焼成前の穿孔がみられる。

高杯（31～34）　31は無蓋高杯で、体部と底部の境及び、底部の中位に凸帯がめぐる。

𤭯（35～38）　38の口頸部は外湾気味に外上方にのび、口縁部に至る。頸部中位に、２本の凹線を施す。

短頸壺（39～42・45）　39・41の口縁部は短かく外反して立ちあがったのち、内湾して端部に至る。41の体部にはカキ目を施す。42には、短かく外反した小さな口縁部が付き、体部はあまり張り出さない。45は大型品で底部にはヘラケズリを施す。

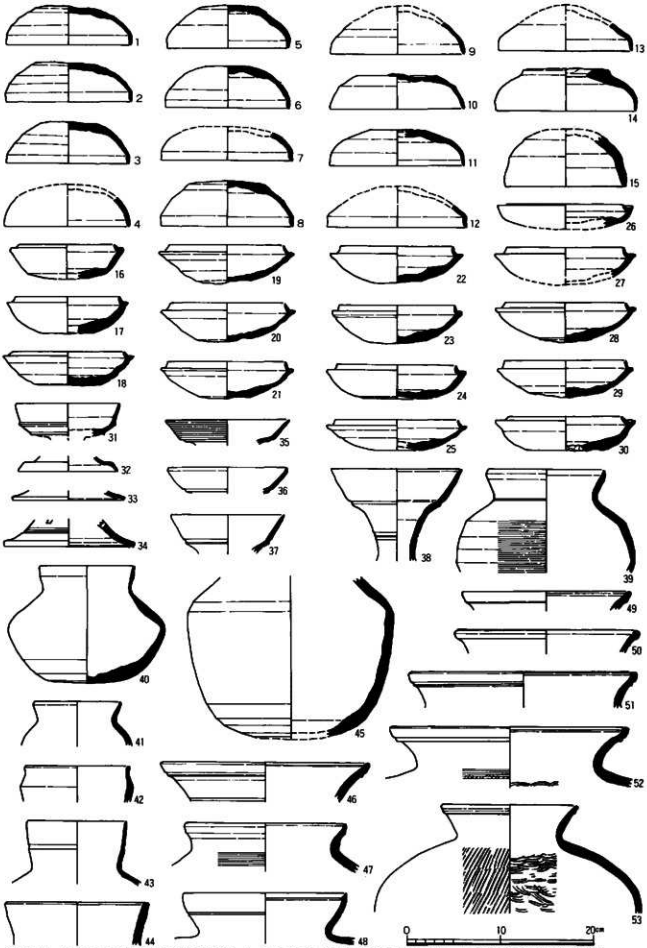
第６号窯跡（第20図）

第３号窯跡の上位に位置し、前庭部は第３号窯跡煙出し及び、焼成部の一部を破壊して構築される。構築部分は、前庭部、焚口、燃焼部であり、構築途中に放棄された窯である。

前庭部　直径約5.3ｍの規模で、円形状に掘り込まれたピットである。

焚口と燃焼部　床面幅は焚口で約1.5ｍを測り、奥に向かって幅を広げる。傾斜はなだらかに登り、燃焼部では、天井部が落ちずに残っており、構築方法は掘り抜きと推定される。（池野）

第20図　第3・6号竪跡実測図



第21図　第３号竪跡出土遺物実測図　1～3･5･13･19～22･28･29･37･45･48.床面　4･9･12･16･18･23～27･32･33･36･38･39･41～44･46･47･49～52.前庭部　14･17･30･40.覆土　15.灰層　31.焚口

第４号窯跡（第22図、図版第８の５）

立地・規模　第４号窯跡は、丘陵斜面の裾部に構築される。

焚口・前庭部は第３号窯跡とほぼ同レベルの標高約18ｍを測り、現谷底との比高差は約0.4ｍである。

窯体の遺存状態は、煙出しから焚口まで完存し、その全長は約7.6ｍある。焼成部における現地山面から床面までの最大の深さは1.7ｍを測る。また、床幅は約1.2ｍと一定している。

窯体焼成部の主軸方向はＮ－72°－Ｅで、焼成部から前庭部にかけては、主軸方向が北側に４度とわずかに屈折する。

この窯跡は他の窯跡に比べると全長、床幅などが小規模である。また焼成部の幅は中ふくらみとならず、床面の平面形・規模に相違がみられる。

前庭部　地山面を掘り込み凹地を作る。その規模は幅約３ｍ、長さは発掘部で約３ｍを有し、中に２つの穴を設ける。焚口に接する穴は、平面形が小判形で浅く、底面が平坦である。幅は約1.2ｍ、長さは約1.7ｍの大きさをもつ。

また、下方の穴は断面すり鉢状の凹みとなる。この前庭部の穴上には、暗黄褐色土と共に窯壁の細塊と生焼け須恵器を多量に混入する覆土が10～30cmの厚さで堆積していた。

これは、焼成部中央で側壁・天井部の落下物・床面遺物が余り遺存しない事から、窯体外の前庭部に掻き出し排除されたものと思われる。

焚口　床幅約1.2ｍで開口部の壁は酸化し、垂直に立ち上がる。

燃焼部　傾斜変換部は舟底状ピットの上端にあり、焚口までの長さは約2.7ｍを測る。

ピット内には、多量の炭化物と還元した須恵器片を少し含む黒褐色土が充満する。たちわりでは、貼り壁の天井部が土圧で変形した状態で一部残存していた。

このたちわりＤ－Ｄ′では還元した掘りぬきの右側壁の上に３枚のスサ入り青灰色還元の貼り壁が認められ、天井部まで達していた。なお、左側壁は掘りぬきのままであった。

焼成部　奥壁までの長さは約4.9ｍを測る。床面は１枚で、勾配は中央で約30度を有し、奥壁寄りで約20度と少し緩くなる。奥壁及び左右の側壁には、窯体構築に際し、地山を上方から下方に向って掻削した工具痕跡が還元して残る（図版第８の５）。

煙出し　奥壁はほぼ垂直に立ち上がる。表土の排土段階で、直径数十cm程の貼り壁による煙出し穴の一部が残存した。たちわりＡ－Ａ′では、下部が掘りぬきの側壁で上方部に貼り壁をする。

灰層　灰層は道路敷下に薄くひろがり、大部分未調査に終った。その遺物を採集したにとどまった。

第４号窯跡遺物（第23図、図版第10の６～12）

遺物は焚口・前庭部から出土し、整理箱約３箱を数える。須恵器は杯身・杯蓋を主体とする。

杯蓋（１～15）　口径は11.6～15.2cm、器高は3.2～4.6cmと変動幅が大きい。

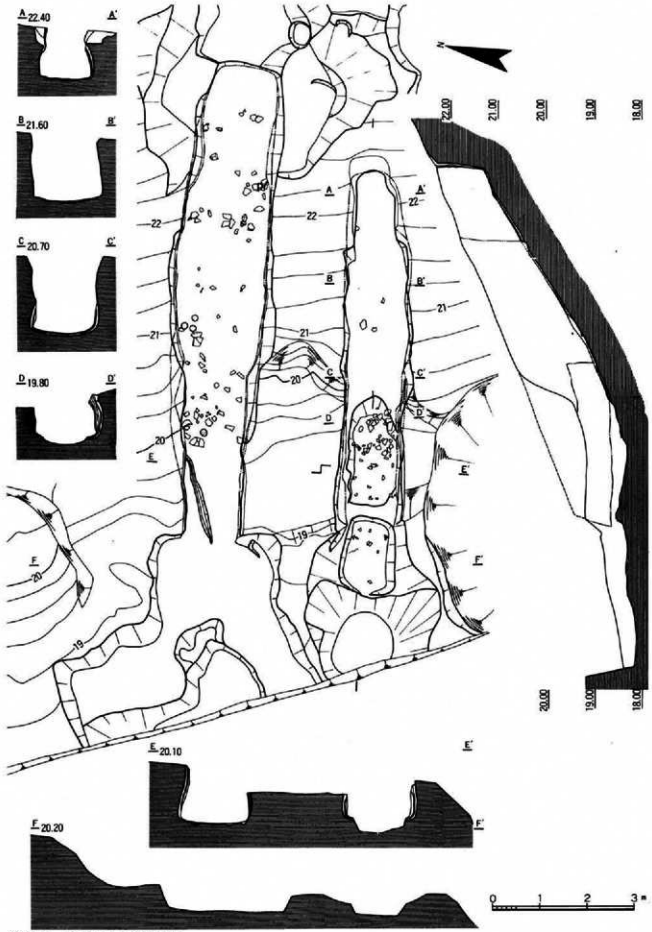
天井部が平坦で器高の低いもの（１・３・11・12）と、丸く器高の高いものがある。天井部外面はヘラキリ痕を残し未調整である。２は１面のヘラケズリを加える。口縁端部は、内湾ぎみにおさめるものと外方に開くものがある。

７・９・10は天井部から口縁部への屈曲部に１条の凹線をめぐらし、８は３条の凹線がみられる。天井部内面の中央部に仕上げナデを行う。

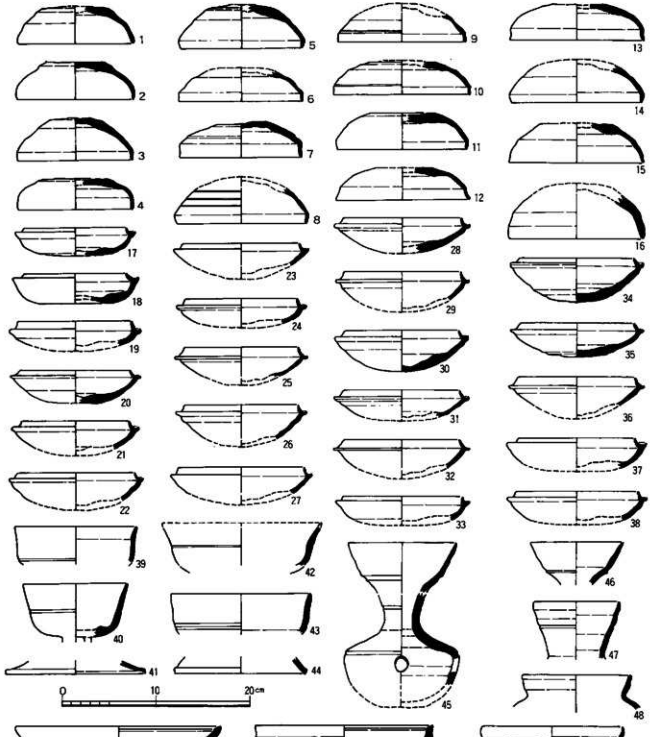
杯身（17～39）　口径は10.9～13.6cm、器高3.0～4.5cmを計る。たちあがりは低く内傾する。受部は少し上向きに外方へのびる。底部はヘラキリ痕を留め、18・31・37の底面は平坦であり、30・34は底面が丸く深い形態をなす。

39はほぼ直立する口縁端部が先細りする。体部に１条の凹線をもつ。

高杯（40～44）　いずれも無蓋の高杯であり、40は杯身に似た杯部の形態で、口縁部はしだいに細くなる。体部外面に一条の凹線をめぐらし、内外面をヨコナデ調整する。42・43は杯部の口径が約15cmと大きく、42は口縁部が外

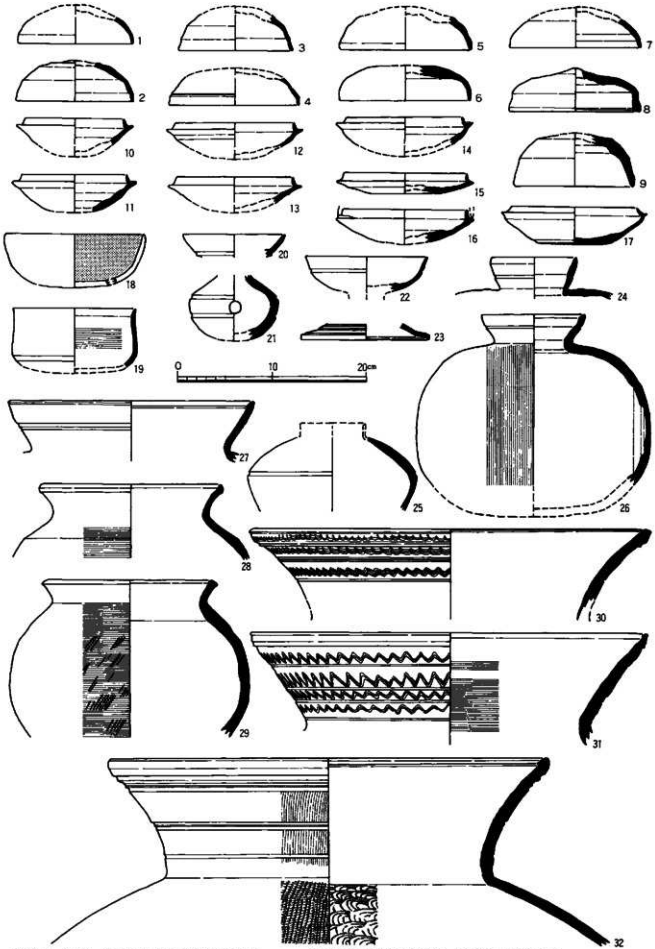


第22図　第４号竪跡実測図

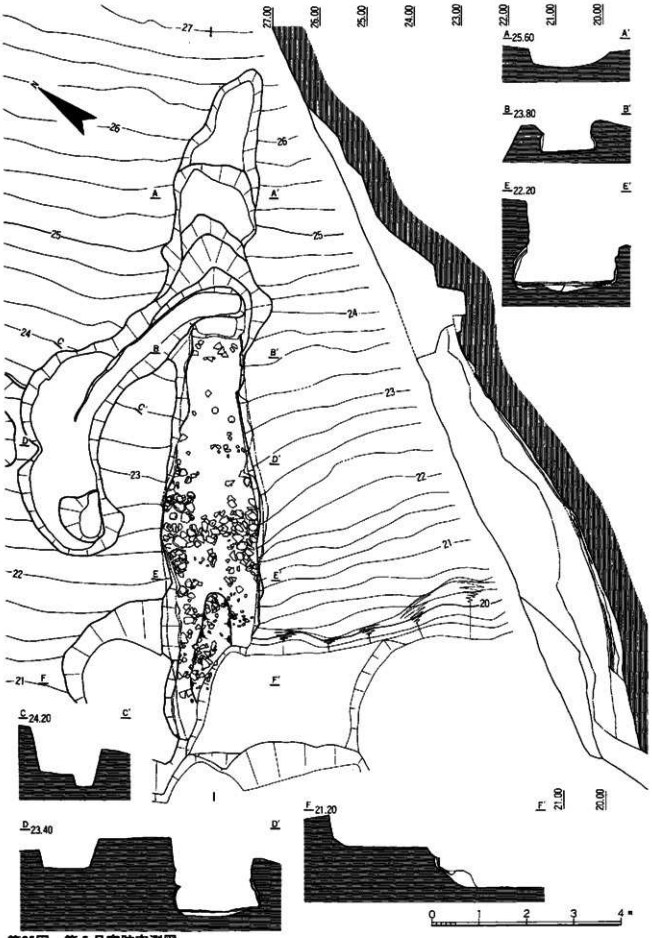


第23図　第４号竪跡出土遺物実測図

3・12・21・24・26・27・36・44．床面　11・18・45．覆土　20・48．焚口
1・2・4～10・13～17・19・22・23・25・28・30～35・37～43・46・47・59．前庭部



第24図　第３・４号窯跡出土遺物実測図　26・30．第３号窯床面と灰層，29．第３・４号窯床面



第25図　第５号窯跡実測図

反する。41は脚部の端面が鋭く尖る。

鉢（45・46）　口縁部は大きく外反し、頸部と口縁部の境いに段を設ける。頸部と体部の肩部に各1条の凹線を加える。体部と頸部接合部の内面には、しぼり目がみられる。体部はやや扁平な形をもち、体部最大径と口径はほぼ一致する。生焼け品である。

提瓶（47）　外反した口頸部をもつ。平瓶の口頸部とも考えられる。

壺蓋（16）　口径14.5cmの厚い作りで、天井部は丸くもりあがる。

壺（48・49）　48は短い口縁部が外傾し、体部が大きく張る。49は口縁部が内湾し、体部の張り出しが少ない。

甕（50～59）　甕は2種類の形態がみられる。54は口縁部が直立ぎみとなり、口縁端面は内傾し、口縁下に凹線を引く。他は、口縁部が「く」の字状に大きく外反する。少し肥厚させた口縁部の端面は内傾させる。

第3・4号窯跡灰層の遺物（第24図）

遺物は窯跡ごとの帰属が困難であり、18の黒色土師器杯1点を含む。

杯蓋（1～7）　天井部は丸く整形したものと平坦なものがある。

杯身（10～17・19）底面はヘラキリ痕を残す。たちあがりはいずれも短く内傾し、口径は10.2～13.2cmと幅がみられる。また19は口径13.0cmを計り、体部は内傾ぎみに底面からたちあがり、口縁部は先細りする。体部の調整は内面にヨコナデ・カキ目を加え、底部との境に凹線を施し、外底面にヘラケズリを行う。

鉢（20・21）　21は短い口縁部が外反し、頸部との境に稜をもつ。21は体部に2条の凹線をめぐらせる。

高杯（22・23）　杯部は浅くまるみをもつもので、内外面はヨコナデを行う。23は脚部の端面や裾部に凹線を細かく施している。

横瓶（24・26）　24は短く外傾した口頸部を付け、端部をまるくおさめる。26は体部の約半分が残り、体部の一側面に閉塞用円板を当てる。体部の内面はヨコナデ、外面はカキ目調整を全体に行う。口頸部は内湾ぎみとなり、端面が内傾する。口縁下に1条の凹線をめぐらせる。

壺蓋（8・9）　2形態がある。8は平坦な天井部の頂部に内面から穿孔がみられる。口縁端部は肥厚させる。9は厚い作りで、端部をまるくおさめる。

壺（25・28・29）　25は図上復元であり、まるく張り出した体部をもつ。28・29は外面したに口縁部と大きく張った体部をもち、29はタタキ調整後内面にヨコナデを加え、外面にカキ目調整を加える。

甕（30～32）　長いに頸部をもち、口頸部外面に凹線・櫛描き波状文を施し、口縁端部を肥厚させる。

第5号窯跡（第25図、図版第8の3・6）

立地・規模　第5号窯跡は6基の窯跡中、最も南端に位置する。

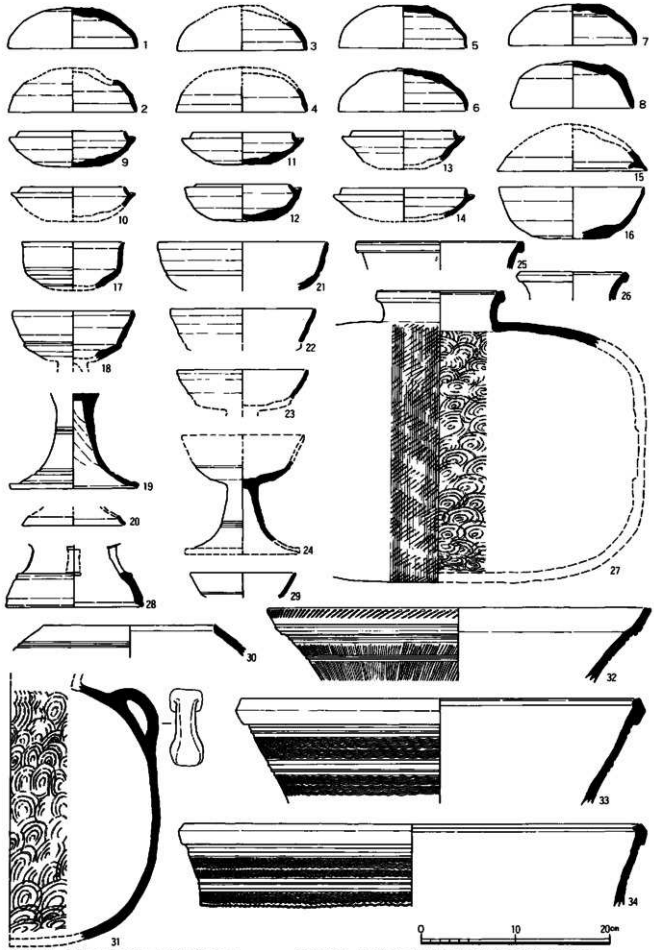
窯体は焚焼部から煙出しにかけて残存し、焚口を丘陵裾近くに設ける。燃焼部の標高は約19.8mで、谷底の水田面との比高差は約2mを有する。また奥壁近くの床面の標高は約23.2mあり、窯体は残存長さが約9.7m、床面の最大幅が約1.2m、現地山面から床面までの最大の深さが約1.8mある。

窯体の主軸方向は、N－54°－Eを測り、ほぼ等高線に直行する。

燃焼部　傾斜変換部までの残存長さは約2.3m、床幅1.8mを有する。燃焼部中程には舟底状のピットを掘り込む。その大きさは残存長さが約2.5m、幅が約0.7m、深さが0.35mの規模をもつ。覆土は多くの炭化物を含む黒褐色土である。

側壁は焚口寄りの左側に、スサ入りの貼り壁を一部認める。他は掘りぬきのままで、壁面には構築時の工具痕跡を留める。

焼成部　煙り出しまでの長さは、約7.4mを測る。床面の勾配は中央部で35度と最も強く、煙り出し近くでは16度と傾斜が少しゆるくなる。たちわりE－E'付近では、青灰色に還元した床2枚を数える。



第26図　第５号竪跡出土遺物実測図

1·3·4·7·9～11·13·15·18·20·22·24·25·27·29·30～34．床面
14·17·23·28．覆土　2·5·6·12·19．上部溝　16．排水溝底面　8·26．灰層

他の部分は1枚である。

床幅は中程で約2.2mと最も広く、煙出し近くで、1.1mと狭くなる。

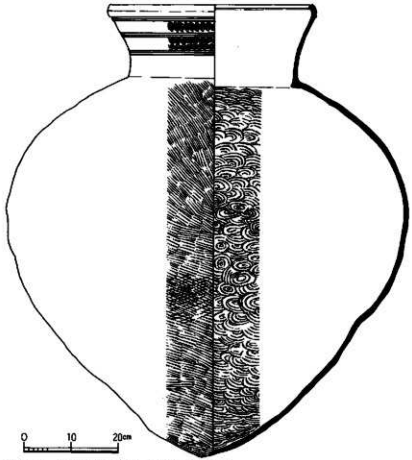
また床面上には大甕等の破片（第27図）・人頭大の大きさの河原石があり、特に傾斜変換部付近に流れ落ちた状態で多く検出された。

煙出し・排水溝　煙出し付近の床面、側面は赤く酸化する。

煙出しからは2本の溝を窯体外に設ける。1本は窯体主軸の延長上約4.7mの長さまで続く浅い「U」字状の溝である。もう1本は窯体主軸に対し斜方向に伸びる。

後者は窯体床面より約0.3m深く掘り凹め、溝底面の砂質土からは、若干の湧水を伴っていた。

溝底面の下降勾配は5度前後と緩く、溝の機能は排水を目的として作られたものと思われる。



第27図　第5号窯跡出土遺物実測図

第5号窯跡遺物（第26図、図版第10の13・14・16～23）

須恵器は床面から主に出土し、整理箱4箱を数える。甕が多くを占める。

杯蓋　1～7は口径12.9～13.7cm、器高3.3～4.8cmを計る。形態は天井部に丸みをもち、口縁部はやや外方に下り、端部は丸みをもつ。天井部はいずれもヘラキリ痕を残し、内面中央部に仕上げナデを行う。15は窯跡床面から検出され、約1/4を残す破片であり、形態から内面かえりの蓋とした。この蓋は口径16.0cmをもち、器内外面はヨコナデ調整を施しており、窯跡群中唯一の例である。

杯身　9～14は口径10.0～14.1cmと法量にばらつきがあり、底面はヘラキリ痕を留める。17は直立した口縁部端部が先細りし、外底面はヘラケズリを行い、体部に1条の凹線を引く。16は窯体外の斜方向に伸びる排水溝の底面から出土した。器面の風化が著しい生焼け品であり、先の内面かえりの蓋と組合さると考えられる。口径は15.4cmである。

高杯　杯部の形態には、体部と底面の境に稜を有する18と、稜をもたない2種類がある。脚部には透しがなく、裾部は大きくひらく。9の内面には、螺旋状のしぼり目がみられる。

壺蓋　8は器肉が厚く、天井部から口縁部にかけての屈曲は強く折れる。口径は12.9cmの大きさをもつ。

鉢　29は口縁部が外傾し、内外面はヨコナデされる。

壺　30は破片を図上復元したもので、口縁端部は尖り気味となる。外面は凹線2条をめぐらせる。

横瓶　27は口頸が短く、口縁端部は肥厚し角ばる断面形をする。31は全形を復元できないが、体部は横方向に短く、肩部には、環状の把手を付けており、体部側面は同心円のカキ目を施している。

甕　第27図は窯体床面に焼き台として転用されていた甕を復元したものである。器高は96cm、体部最大径が約86cmを計る大型品で、体部肩部に自然釉がかかる。32～34は長い口頸部をもち、外面は櫛状施文具による波状文・刺突文及び凹線を施し、口縁部を肥厚させ、端面は中凹みとなる。

第７号窯跡（第28図、図版第８の７）

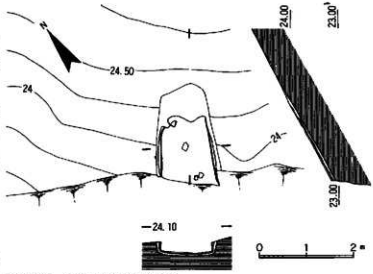
窯の存在する丘陵斜面は削りとられ、窯体は大部分を失う。わずかに焼成部上方約1.3mが残存する。

窯体の主軸方向はＮ－32°－Ｅで、床面の勾配は29度を測る。床面中程には、一部スサ入りの貼り床がみられる。床面からは須恵器の胴体部破片数点と円礫２点を検出した。

時期は不明である。

第501号住居跡（図版第８の９）

住居跡は第１号窯跡の北約７ｍの斜面に位置し、山側半分が残る。



第28図　第７号窯跡実測図

平面形態は長方形をなし、完存する東壁の長さは4.2ｍで、この壁際には、浅い周壁溝を配する。主柱穴・焼土はみられない。遺物は覆土中より杯蓋片が出土し、第１号窯跡床層の破片と接合した。

第502号穴　直径約１ｍの大きさの穴で、周壁は熱により赤褐色に酸化する。覆土中に多くの炭化物を含む。

第503号穴　現地山面からの深さ1.7ｍの不整形な穴で、底面は灰白色粘質土に達する。採土用の穴と考えられる。

第505号穴　覆土に第２号窯跡の窯壁塊・床面遺物を含む。窯廃棄後に穴が掘り込まれる。

第507号穴　第５号窯跡に重複して掘り込まれる。覆土上面には、第２号窯跡の灰層が被覆していた。

第508号穴　溝埋没後掘り込まれる。覆土中には多くの焼土と共に土師器甕（第16図13）が検出された。（上野）

(4)　集落区域の遺構（第29～33図、図版第11～14）

地形と層序（第７図）

集落区域は、Ｘ８～15　Ｙ15～31の範囲で、丘陵の東・南斜面に立地する。標高17～30ｍである。

標準的な土層は、Ⅴ層黄褐色粘質土面（黄白色砂質土部分が一部あり、そこから地下水が湧く。）まで、４層を数える。Ⅰ層表土（20cm）、Ⅱ層黒褐色土（10cm）、Ⅲ層茶褐色土（20cm）、Ⅳ層黒褐色土（30cm）である。Ⅳ層は、区域内に刻まれた小さな谷部にたまった自然堆積土で、遺構は、Ⅳ・Ⅴ層の上面で確認される。傾斜の強い上部では、Ⅰ層の下がすぐⅤ層になり、場所によって上記の層の厚さが一定せず、また欠ける場合もある。その他、それぞれの層の間に、漸移的な土層もある。Ⅱ・Ⅲ層が遺物包含層で、遺構内の覆土からみて、Ⅲ層を古墳時代、Ⅱ層を奈良時代に対応させることができるようである。

遺構（第33図、図版第11～14）

竪穴住居・掘立柱建物・穴がある。時代的には、古墳・奈良・平安の３時代のものが混在する。

竪穴住居は、山側に面する部分だけに壁面・床面・周溝を残すが、本来谷側にもあったものと考えられるが、流出・崩壊している。それは、掘立柱建物についてもいえ、床面・柱穴など消えてしまったものが多いとみられる。また、遺構が重複していることや、床面の流出によって、遺構に伴う遺物は少なく、明確に時期を決することができないものがある。竪穴住居・掘立柱建物については、建物として一連的に扱い、柱間数・周溝のあり方、出土遺物などからＡ～Ｇの７類にわけた。以下では、時代ごとに説明していく。

穴については、建物にまとめきれない柱穴と同様、数多いが特徴的なものについてだけ説明しておく。

古墳時代

建物A類（第１・２・５・９・10・15A・29号住）（第29・30図）

方形あるいは隅円方形の掘り方をもち、柱間１間×１間の４本主柱の竪穴住居である。中央には地床炉があり、外周には幅約40cmの溝がめぐる。A類はさらに、柱間寸法が４ｍ前後で、推定床面積が約60m^{2}の大型のもの（第１・９号住）と、柱間寸法約2.5m前後で、床面積約25m^{2}の小型のもの（第２・５・15A・29号住）に分けられる。

第１・５・29号住は、ほぼ中央部に地床炉を残すが他は欠失している。これらの住居跡から、土製支柱が出土している。第29号住では、ちょうど炉辺に立っていたかのような出土状況を示し（図版14の１）、第５号住では、炉の周囲に白色砂質土をかためた方形の土塊（火熱を受けている）があり（図版14の２）、方形土塊のくずれた土に混じって発見され、第１号住では、焼土塊・炭と甑の壊れた中に混じって発見されている。このことは、土製支柱が、地床炉で用いられたことを証明するものである。また第５号住で検出された火熱を受けた方形の土塊は、カマドを構成していた一部である可能性が強い。

柱穴の掘り方は、床面からの深さ60～80cm、上面での径60～70cmと総じて大きくしかも深い。

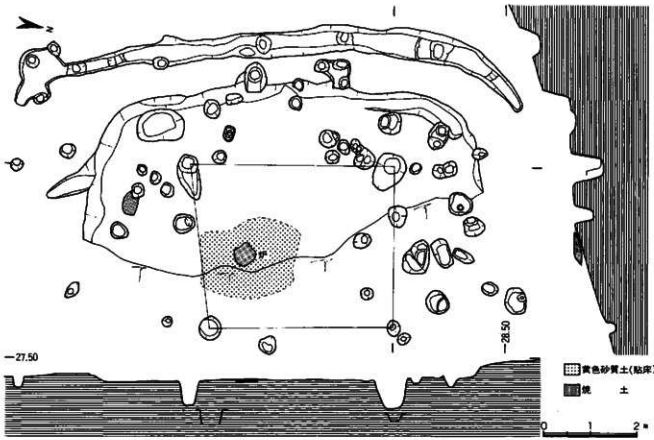
A類は、互いに切り合い関係もなく、一定の間隔をおいて配置され、同時存在を窺わせる。

建物B類（第４・12号住）（第31図）

柱間１間×１間の方形の掘り方をもつ竪穴住居である。柱穴の形状も含めてA類ときわめてよくにているが、外側に周溝をもたないため、区別した。第４号住と第２号住の周溝が切り合っており、両者に時期的な差を考慮しなければならないが、その新旧は、不明確である。

B類にも、A類と同様大型のもの（第12号住）と小型のもの（第４号住）がある。

建物C類（第11・16・18号住）



第29図　第１号住居跡実測図

柱穴をもたないか、あっても浅く小さいもので、上屋構造が簡単で、全体に規模の小さいものである。外周に幅約30cmの浅く小さな溝がめぐる。

建物D類（第3・13・15B・20号住）

柱間が桁行、梁行とも2間以上の掘立柱建物である。この建物の柱穴から時期のわかる遺物は出土していない。柱間寸法に統一性がなく、第13号住では、桁行2.0+1.8+1.4+1.2+2.0m、梁行1.8+1.6+1.4mである。最低1.2m最高2.2mまであり、20cm間隔の寸法が目につく。柱並びは不揃いである。

D類の柱穴の掘り方は、上面で60cm、深さ70cmと深く大きなもので、A・B類に共通した特徴を示す。

第15B号住は、第15A号住の竪穴住居の壁面に接し、軸も共通するため同時存在のものか、相前後して建てかえられたものと考えられる。

第7・8・9・14・30・31号穴

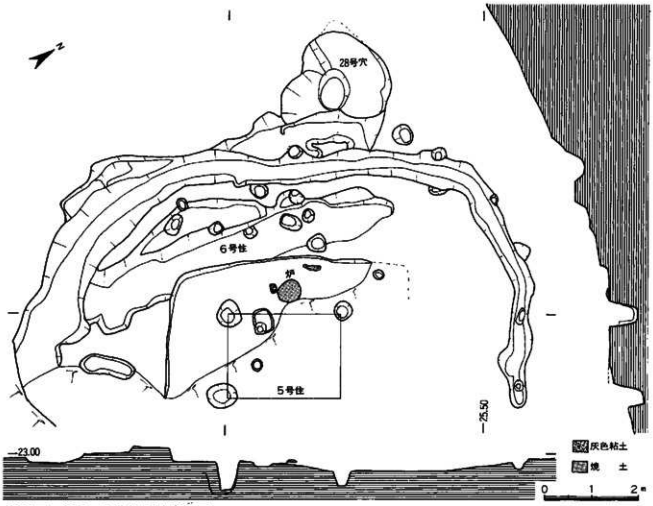
直径1.8～2.5mのほぼ円形で、深さ約1m、底部がフラスコ状に広がる形のものである。土層の堆積は、薄い層状のものが何層にも重なっている。第7～9・30・31号穴は、互いに連続し、第9→8→7→30・31号穴と下から上へ掘り上がっている。底部の殺もえぐれた部分は、白色砂質土層で、この土を採掘するための採土穴であろう。

第14号穴からは、土製支柱、製塩土器が出土している。

第48・49・51・54・57号穴

X9～10　Y20～21あたりは、丘陵が南東へ張り出す部分だが、この標高27mあたりに、やや平坦な所がある。

この平坦部の北端と西端に、縦約1m横80cm、深さ15～60cmの隅円方形の穴が5箇所あり、そのうち第48・51号穴



第30図　第5・6号住居跡実測図

は、壁面が赤く焼けている。壁面が赤く焼けた穴は、標高27m付近の丘陵斜面の他の部分でも発見されている。

第54号穴付近で、内面にかえりをもつ杯蓋2個と杯身1個（第35図10～12・26）がみつかっている（図版第14の5）。また、南斜面で、短頸壺（第35図32）・平瓶（36）を採集している。

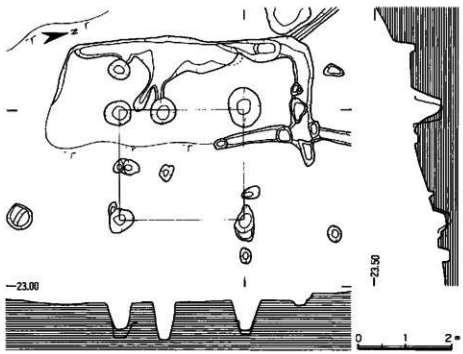
平坦部と穴とこの一括遺物が、相互に関係があるのかどうかは不明だが、この平坦部で何らかの作業が行われたことは明らかである。

奈良時代

奈良時代の遺構は、集落区域の下方、標高23mより下に集中し、同時代の中でも切り合い関係をもつ。また、丘陵部でも単独に穴がみつかっている。

建物E類（第7・14・19号住）（第32図）

2間×2間の掘立柱建物で、柱穴の外側に沿って浅い溝がはしる。山側では、壁面状の立ちあがりを認めるが、平坦面（床面）を作り出すための削平であろう。柱穴の掘り方は径40～60cmと、古墳時代の柱穴に比べやや小さいが深さが80～100cmで深い。

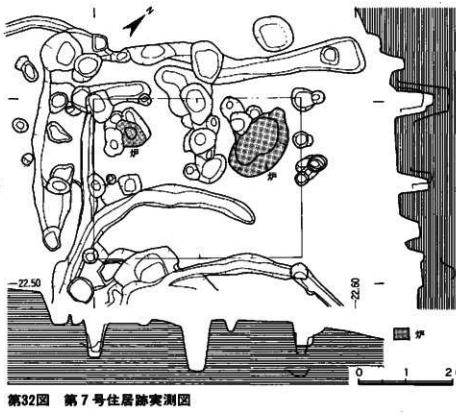


第31図　第4号住居跡実測図

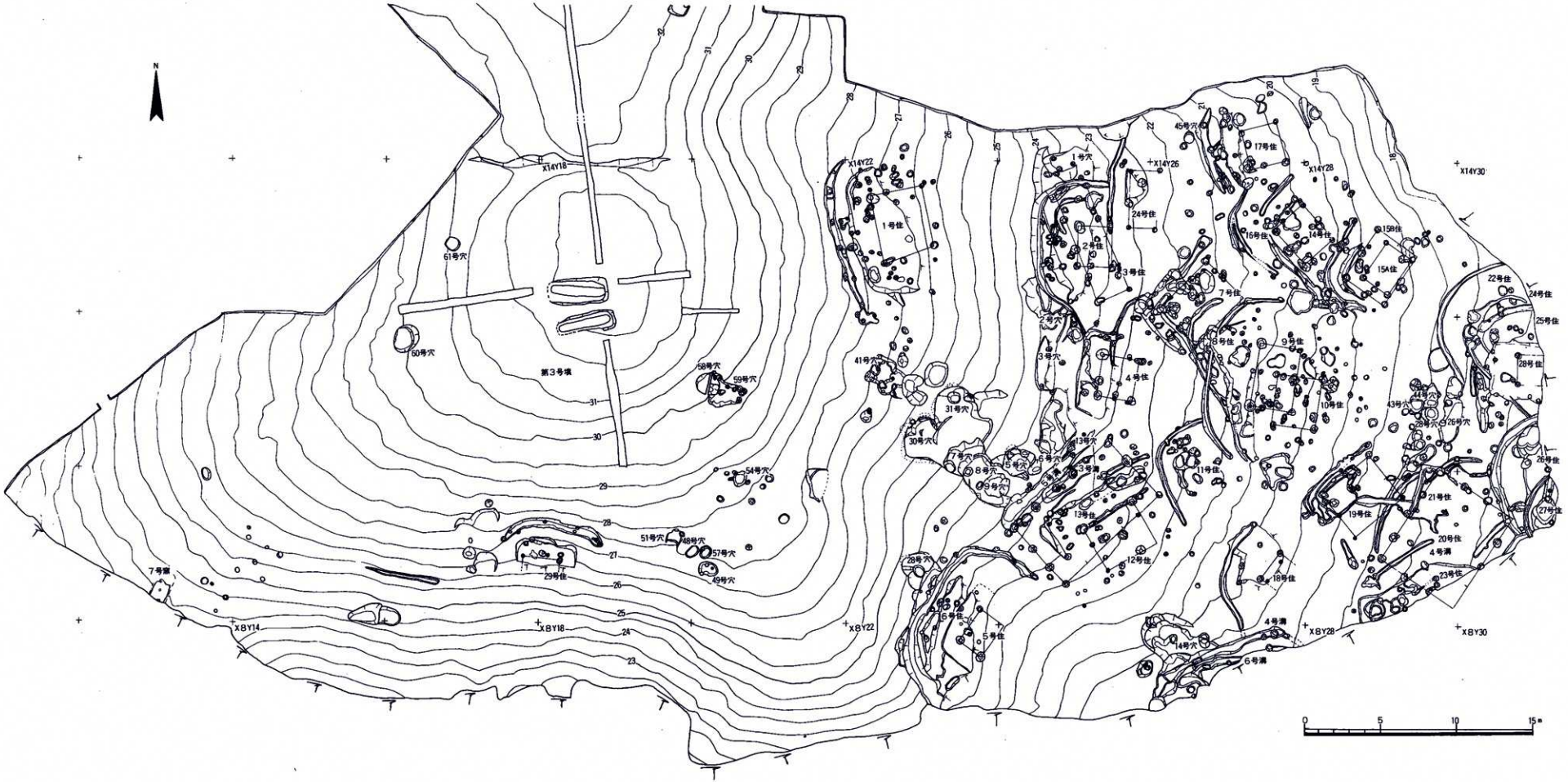
第7号住は、穴（炉か）が2箇所ある。砥石の出土と関連づければ、小鍛冶の工房跡とみることができる。第14号住は、柱穴が複数あって、数度の建て替えまたは修復を想定できる。第19号住は、2間×2間とみているが、南側に溝があり、この建物に伴うものとすれば、さらに南へ1間のびる可能性がある。その場合の柱間寸法はやや短くなる。

建物F類（第6・8・17・22・23・26・27・28号住）

弧状の周溝を外側にめぐらすもので、明確な柱穴を認めないものである。第8号住をその典



第32図　第7号住居跡実測図



第33図　No. 7 遺跡集落遺構全体図

型とする。第8号住は、第7号住と出土遺物では時期差をみることができないが、切り合い関係にある。第17号住は、1間×1間の柱穴をみとめるが、古墳時代の遺構が重複していたりで明確でない。第22・23・26・28号住は、周溝を認めるが後世に谷側が切りとられていることもあって全体は不明確である。第4号住は、第5号住の上に築かれた平坦面である。第28号住は縦3.5m以上、横3.5m、壁面の立ちあがり40cmの長方形の竪穴遺構で、2つの柱穴状の穴

住居番号	平面形 規模	柱間 規模	方位	周溝	地床炉 貼り床	出土遺物	時代
1号住	隅円方形 8.4×6.8か	1×1 4.0×3.3	N－35°－E	外周 幅60cm	地床炉 貼り床	須恵器・土師器 土製支柱	古墳
2号住	隅円方形 6.0×5.4か	1×1 2.6×2.2	N－2°－E	外周		須恵器・土師器	古墳
3号住		4×2か 7.6×4.8 (1.8+2.0+2.0+1.8)×(2.2+2.6)	N－25°－W	なし		須恵器・土師器	
4号住	方形 5.2×5.0か	1×1 2.6×2.2	N－9°－E	内壁沿		須恵器・土師器 土製支柱	古墳
5号住	方形 5.0か×5.0か	1×1 2.4×1.8	N－30°－E	外周	地床炉	須恵器・土師器 砥石	古墳
6号住	方形か		N－13°－E			須恵器・土師器	奈良
7号住	方形 7.2か×5.6か	2×2 4.6×3.4 (2.2+2.4)×(1.8+1.6)	N－55°－E	内壁沿	地床炉	須恵器・土師器	奈良
8号住	方形 3.2か×3.2か		N－28°－W	外周			奈良
9号住	隅円方形か	1×1 4.2×4.2	N－10°－E	外周		須恵器・土師器 土製支柱	古墳
10号住		1×1 3.2×2.8	N－6°－E	外周			
11号住	方形 3.6×3.6		N－27°－W	外周		須恵器・土師器	古墳
12号住	方形 2.4×7.2	1×1 3.8×3.2	N－60°－E	外周		須恵器・土師器 土製支柱	古墳
13号住		5×3 8.4×4.8 (2.0+1.8+1.4+1.2+2.0)×(1.8+1.6+1.4)	N－48°－E				
14号住	方形か	2×1 3.2×2.4 (1.6+1.8)	N－40°－W	内壁沿		須恵器・土師器	奈良
15号住A	方形 5.2か×5.0か	1×1 2.8×2.0	N－35°－E	外周		須恵器・土師器	古墳
15号住B		2×2 3.8×3.2 (1.8+2.0)×(1.6+1.6)	〃				
16号住			N－45°－W	外周		須恵器・土師器	古墳
17号住	方形か	1×1 2.6×2.4	N－15°－W	外周		須恵器・土師器	奈良
18号住		1×1 2.2×2.2	N－37°－E	外周			古墳
19号住	方形か	2×2 3.4×4.0 (1.6+1.8)×(2.0+2.0)	N－39°－W	内壁沿		土師器	奈良
20号住		4×3 7.0×4.0 (1.5+1.8+1.8+1.8)×(2.2+1.8)	N－35°－E				
21号住	方形 3.6×3.6か		N－15°－E	内壁沿			
22号住			N－30°－W	外周			奈良
23号住		1×1か 2.6×？	N－54°－E			須恵器・土師器	奈良
24号住		1×1 3.6×1.7	N－55°－E	外周		須恵器・土師器	
25号住			N－40°－W	外周			
26号住	方形か		N－25°－W	外周			奈良
27号住	方形か		N－45°－W	外周		須恵器・土師器 鉄製鎌	奈良
28号住	方形 ？×3.7		N－88°－W			須恵器・土師器	奈良
29号住	隅円方形 4.0×？	1×1 2.4×？	N－83°－W	外周	地床炉	須恵器・土師器 土製支柱	古墳

表3　No.7遺跡住居跡一覧

があるが、小さくて浅い。

第45号穴　第17号穴に隣接して径70cm、深さ45cmの円形の穴があり、小型の甕（第37図34）が出土している。

第60号穴　径1.7×1.3m、深さ30cmの長方形の穴で、周囲の壁が焼けている。甕（第37図35）が出土している。

平安時代

第58・59号穴　平安時代に属するものはこの２つだけである。第58号穴は、径1.5mの不整円形の穴で深さ80cm。第59号穴は、1.5×2 m、深さ21cmの不整形な方形で、底部は凹凸が激しい。２つは一部重なる。

土師器杯の完形品３個（第37図40～42）が出土している。

集落区域の遺物（第34～第38図、図版第14～16）

縄文時代

Ｘ７～17Ｙ17～22の丘陵尾根部（第３号墳あたり）を中心に出土している。縄文土器は、深鉢形の破片が約10点あり、中期中葉、後期末葉の時期のものがある。石器には、打製石斧・磨製石斧・擦石がある。

古墳時代

土師器（第36図）

杯（１・２）

いずれも口径13cm、器高５cmで、１は、体部が内湾ぎみに立ちあがり、外面にヨコナデを施す。乳白色を呈する。２は、ラッパ状に開口するもので、外面黄褐色、内面を黒色にしている。

椀（３～５）

３・４は、口径約10cm、器高約７cmで、外面はハケ目とナデを施し、乳白色を呈する。５は、口径約6.5cmの小型で、口縁端部が外方へ小さくはねる。

高杯（６・７）

いずれも脚部を欠くが、高杯と考える。６は、杯部が椀形となろう。内面ヨコナデ、外面はハケ目を施す赤褐色のもので薄手である。７は、杯部が口径約20cmの鉢形で、強く外反する口縁部と体部の境が強く屈曲し、そこに２条の浅い凹線がめぐる。外面は黄褐色、内面黒色で、杯２と雰囲気が似ている。

把手付鉢（８）

口径約16cm、高さ約９cmで、底部が大きく平坦な鉢で、２個の把手が相対して付く。外面はハケ目のあとナデを施す。外面は乳白色を呈し、内面黒色を呈する。

壺（９）

口径８cm、高さ12cmで、中程よりやや下位にくる体部最大径が12cmである。口縁部は、内傾しながら立ちあがり、現状の把手が２個相対してつく。底部は、ややあげ底ぎみになる。外面はナデで調整されるが、でこぼこした仕上がりとなっている。また二次的な加熱を受けている。灰色を呈し、胎土もきめ細かく、須恵器の生焼け品とみる考えもある。

甕（14～25）

口縁部は「く」の字に外反し、体部の最大径は、ほぼ中位にあり、口縁部の径と同じか、やや大きく、全体的に長胴形で、底部は、平底に近い丸底となるものが多い。いずれも、内外面ハケ目とナデで整形される。口径が、約12cmの小型のものから約30cmの大型のものまである。

色調では、乳白色のものと黄褐色のものがある。後者に属する22などは、前者に属する25と比べて体部の張りが強く、古い様相を示している。

甕（26）

口径約25cmで、体部下半を欠く。口縁部はゆるく外反し、体部中位に棒状の把手が2個相対して付く。内外面をハケ目とナデで調整し、口縁部の形態とともに、甕の特徴に共通したつくりである。

製塩土器（10～13）

完形品はない。ラッパ状に開く口縁部（10～12）、粘土接合痕をとどめる（11）、筒状の体部（12・13）、薄い器壁、二次的な加熱を受けている（12・13）などの特徴をもち、能登式製塩土器〔近藤　1962〕と呼ばれるものである。口径が10～15cmの小型で、棒状尖底の底部となる城ケ崎タイプに属する。12・13は、ハケ目とナデで調整され、赤灰色を呈する。10は製塩土器ではないかもしれない。

土製支柱（第38図2～7）

合計7点があり、5点が住居跡から出土している。完形に近いものは4のみである。4は高さ約13cm、直径4cmで、断面円形、両端の径はやや大きくなる。一方の面がやや凹むようである。3は、径6cmとやや太く、その他のタイプとは異なり、2種のタイプにわけられる。

ハケ目を残すもの（7）や、ヘラケズリの痕跡をとどめるものがある。色調は赤褐色、乳白色、黄灰色などを呈する。

須恵器（第35図）

杯蓋（1～13）

口径14cm前後、器高3～4cmで、つまみをもたず、断面がかまぼこ状を呈し、口縁部は内湾ぎみに開くもの（1～9）と、口径10cm前後、器高3cm前後で、宝珠状のつまみをもち、口縁内側に小さなかえりがつくもの（10～13）の2種類がある。前者をA類、後者をB類とする。A類はさらに、天井部が山形のまるみをもち、口縁部が外反ぎみのもの（1～6）と天井部がやや平坦で口縁部が内湾ぎみのもの（7～9）に区分できる。

A類はヘラケズリとナデによって調整されるが、1の天井部はヘラケズリのままである。色調は、青（黒）色のものと灰白色のものがあり、後者のいわゆる生焼け品が多い。

杯身（14～28）

口径11～13cm、器高3～5cmで、舟底状の丸味のある体部に、内傾する短いたちあがりがつくもの（14～23）と、口径9～13cm、器高4～6cmで、丸味のある体部と、外反する口縁部をもつもの（24～28）の2類がある。前者をA類、後者をB類とする。A類には、大ぶりでたちあがりの細くするどいもの（14・18）と、小型で浅く、たちあがりの短いもの（15～17・19～23）がある。B類には、底部の丸味の強いもの（24・25）とやや平坦なもの（26～28）がある。

B類26・27は、体部に浅い凹線がめぐる。25は、口縁部内側が幅約1cmにわたって摩滅しており、杯蓋とのスレにより生じた可能性がある。色調は、青（黒）色のものと灰白色のものがあり、生焼け品が多い。

高杯（29～31）

29・30は、脚部を欠くが、高杯の杯部と考える。29は、丸みのある体部に、強く外反する口頸部がつくもので、その境はゆるい段となる。30は、口径12.5cm、器高8cmで、口縁部が内傾する楕形の体部となる。最大径となる体部中央に2条の凹線がめぐり、体部下半はヘラケズリ痕をとどめる。31は、杯身B類に高台をつけたもの。体部と脚部の中央にそれぞれ、2条づつの凹線がめぐる。29・30は青色、31は乳白色を呈する生焼け品である。

短頸壺（32）

口径9cm、器高11.5cmで、肩部が直線的なため、体部中央で「く」の字状に屈曲する。口縁（頸）部は、やや開きぎみに立つ。体部下半を丁寧にヘラケズリする。青灰色である。

長頸壺（33・35）

35は、口径8cm、高さ19cmで、肩部が丸みのあるやや扁平な体部に、外反ぎみに開く口頸部がつく。肩部と頸部

に２条単位の凹線がめぐる。底部近くにヘラケズリ痕を残す。青灰色を呈する。33は、短頸壺32の体部に近い形態で、頸部へつながる部分の径が小さく、長頸壺と考える。体部屈曲部に１条の凹線がめぐる。黄灰色の生焼け品である。

平瓶（36）

やや丸みのある肩部をもつ扁平な体部に、一方に偏してラッパ状に開く口頸部がつく。底部にヘラケズリ痕を残す。青灰色を呈する。

小型壺（34）

口径６cm、器高６cmで、やや肩の張った球形の体部に、口縁端部が丸くふくらむ口縁部がつく。体部屈曲部に２条の細い凹線がめぐる。体部中央部より下は、うろこ状のヘラケズリを行っている。青色を呈し、砂粒を含む胎土の特徴は、本遺跡出土の奈良時代の杯によく似ており、あるいは古墳時代の所産でないかもしれない。

鉢（37）

口径22cm、口縁部は内湾しながら立ち、口縁端部が外側へわずかにつきでる。下位に２条の凹線がめぐる。灰色。

提瓶（38・39）

いずれも口径15cm前後の口頸部だけである。直立的な口辺部に１～２条の凹線がめぐる。38は口縁部が内そぎになる。青灰色である。39は褐色を呈する。

甑（40）

口径18cmの口縁部だけである。青灰色を呈する薄手のものである。

壺（41）

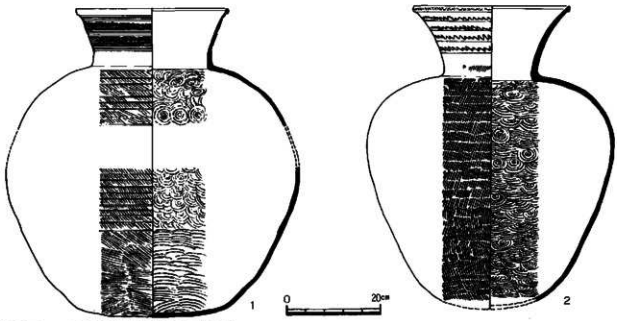
高さ７cmの低い脚部だけである。４箇所に透しがある。青色を呈する。

甕（42・43、第34図１・２）

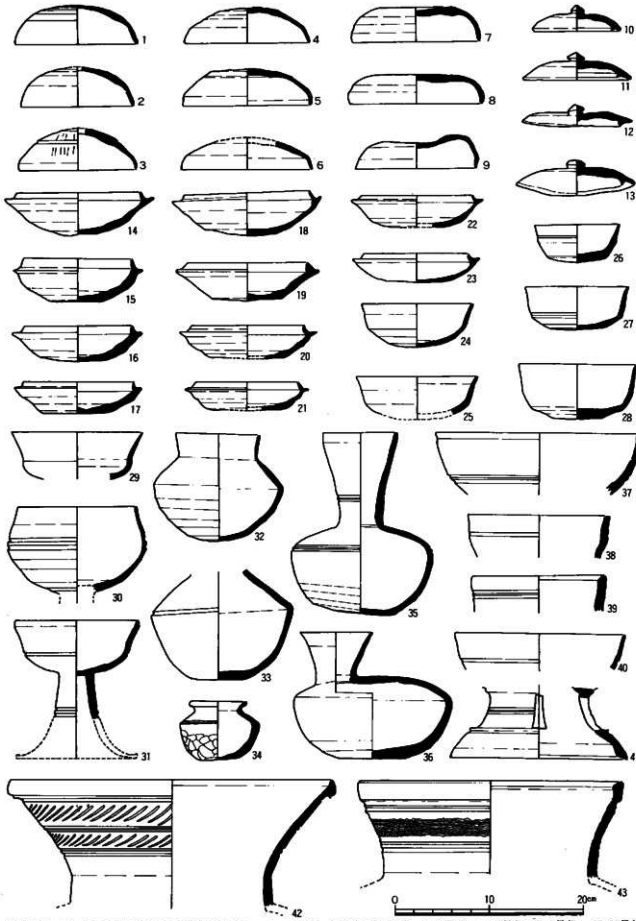
口径30～75cmのものが多い。口縁部の形態が、断面三角形で口唇部が尖がるもの（42・２）と、断面が四角形で、口唇部が水平かやや内そぎになるもの（43・１）がある。前者は後者に比べ、頸部の外傾度が大きい。青色のものと黄灰色の色調のものがある。

その他

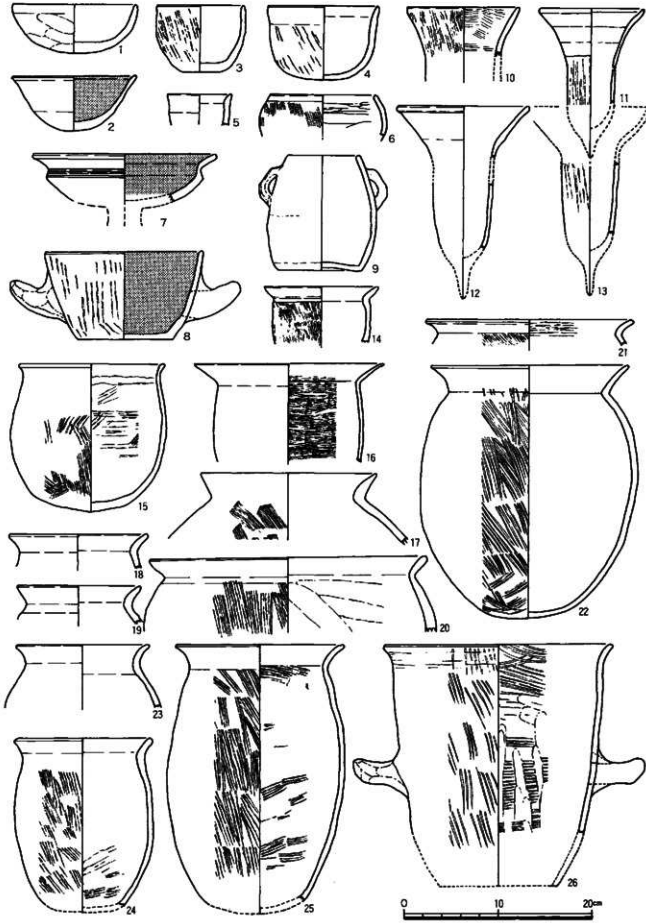
砥石（第38図８・９）と**鉄鏃**（第７図１）がある。奈良時代に属すると思われる。（久々）



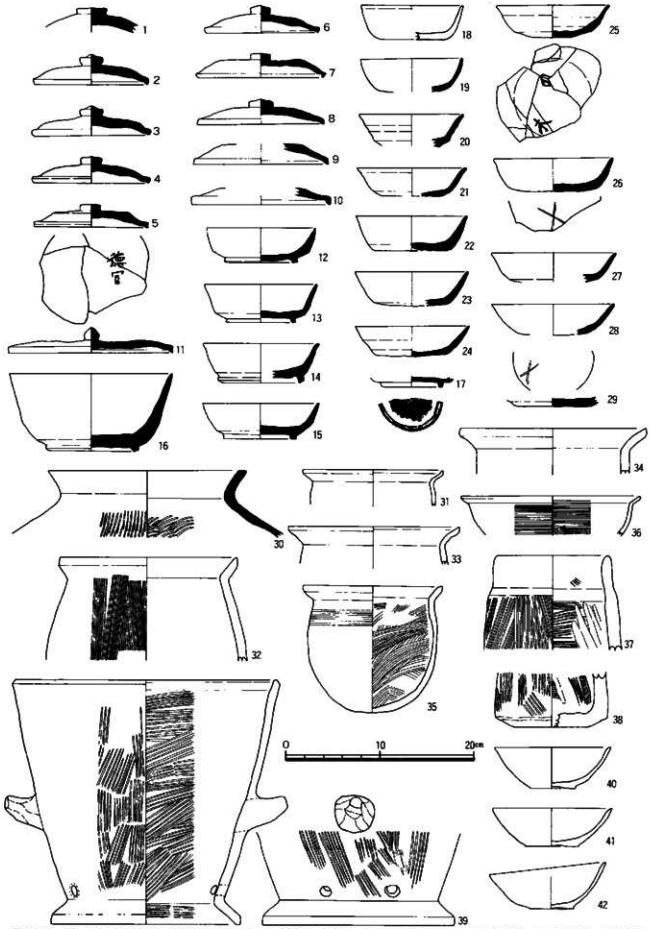
第34図　No.７遺跡集落出土遺物実測図



第35図　No.7 遺跡集落出土遺物実測図　1・27・31, 2号住　2.5号溝　4.26号住　5.12号住　17.9号住　18.15号住　20.4号住　10～12・26, X10・Y21一括　33.29号住　35.13号穴



第36図　No.7 遺跡集落出土遺物実測図　3·8·14, 29号住　4, 12号住　6·16, 6号穴　18, 3号住　23, 15号住
15·24, 13号住　25·26, 1号住　21, 2号住　11·12, 14号穴　9, 5号住



第37図　No.7 遺跡集落出土遺物実測図

1・29号穴，2・3・9～11・16，7号住，4・6・23・39，26号住，5・36，8号住，7・5号住，8，28号穴，19，55号穴，31・38，19号住，32，17号住，34，60号穴，35，45号穴，40～42，59号穴

奈良時代（第37図、図版第16の30～37）

須恵器・杯蓋（1～11）　口径は、11.6～12cmのもの（2～6）、13.6cmのもの（7・8）、14.4～14.6cmのもの（9・10）、16.4cmのもの（11）がある。口縁端部は、やや内傾するもの（2～4・6・7）、直下するもの（10・11）やや外反するもの（5・9）がある。

杯身（12～16・19～29）　高台の付くものA種（12～16）とつかないものB種（19～29）がある。

A種は、口径が、11.4～12.0cmのもの（12～15）と16.4cmのもの（16）がある。高台は外にのびるもの（12・14・16）と真直なもの（13・15）がある。体部は、外傾して立ち上るもの（12・13・15・16）と口縁端部がやや外反するもの（14）がある。B種は、口径が10.8～11cmのもの（19・20）、11.6～12cmのもの（21～25）、12.8～13cmのもの（26～28）がある。体部は、やや内傾するもの（19）、外傾するもの（22～24・26～28）、外傾して、口縁端部で外反するもの（21・25）がある。底部外面は、ヘラキリ痕を残すものが多い。

甕（30）　口径21cmで、体部が丸くなる。

土師器・杯身（18）　口径は、10.8cmで、体部は、ほぼ直立する。

甕（32～35）　口径は、14.6～14.7cmのもの（31・35）と18～18.8cmのもの（32～34）がある。口縁部は、外反するもの（32・34・35）、外反して口縁端部で少し折れまがるもの（31・33）がある。32は、端部がやや丸くなる。

鍋（36）　口径18.8cmの小型で、外面カキ目、内面ハケ目調整を施す。

土管（37）　口径11.7cmの差込み口を持つ。外面ハケ目で、内面ハケ目の上からヘラケズリを見られる所がある。類例は、No.16遺跡にある〔上野　1980〕。器種不明の38は、胎土・焼成・調整手法の点で、37と類似する。

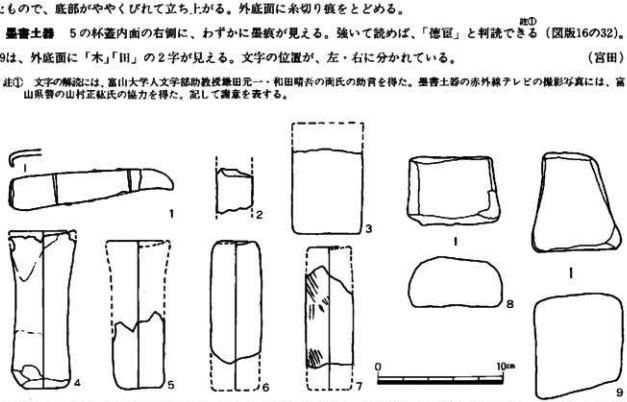
鍔形土器（39）　内外面に荒いハケ目を施す。2個一対の穿孔が2箇所ある。把手は、ソケット状に差し込む。39が出土した第26号住居跡の覆土より、カマド形土器の破片も出土している。

平安時代（第37図、図版第16の38～40）

須恵器・杯（17）は、高台付きで、外底面に糸切り痕がある。**土師器・杯**（40～42）は、第59号穴より一括出土したもので、底部がややくびれて立ち上がる。外底面に糸切り痕をとどめる。

墨書土器　5の杯蓋内面の右側に、わずかに墨痕が見える。強いて読めば、「徳冠」と判読できる[注①]（図版16の32）。29は、外底面に「木」「田」の2字が見える。文字の位置が、左・右に分かれている。（宮田）

注① 文字の解読には、富山大学人文学部助教授鎌田元一・和田晴吾の両氏の助言を得た。墨書土器の赤外線テレビの撮影写真には、富山県警の山村正紘氏の協力を得た。記して謝意を表する。



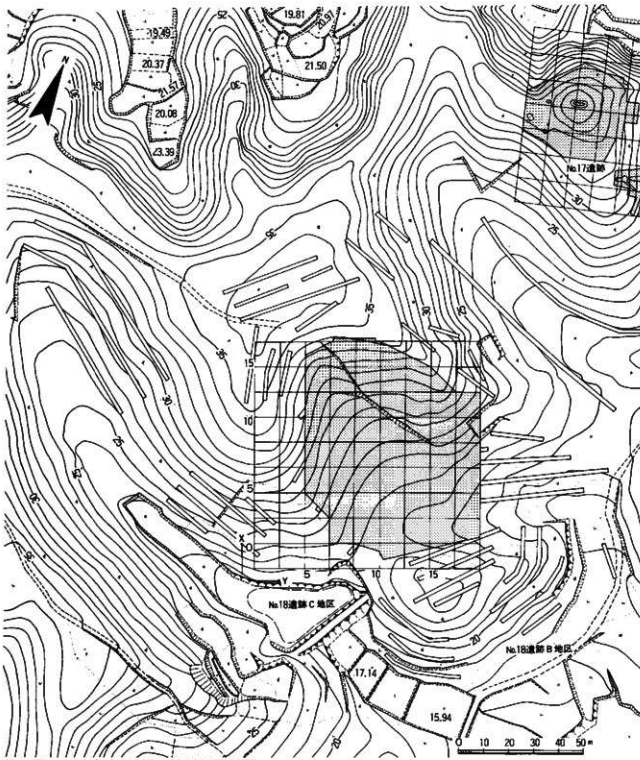
第38図　No.7遺跡集落出土遺物実測図　1.27号住　2.14号穴　3.12号住　4.29号住　5.1号住　6.9号住　7.5号住

3　No.18遺跡C地区

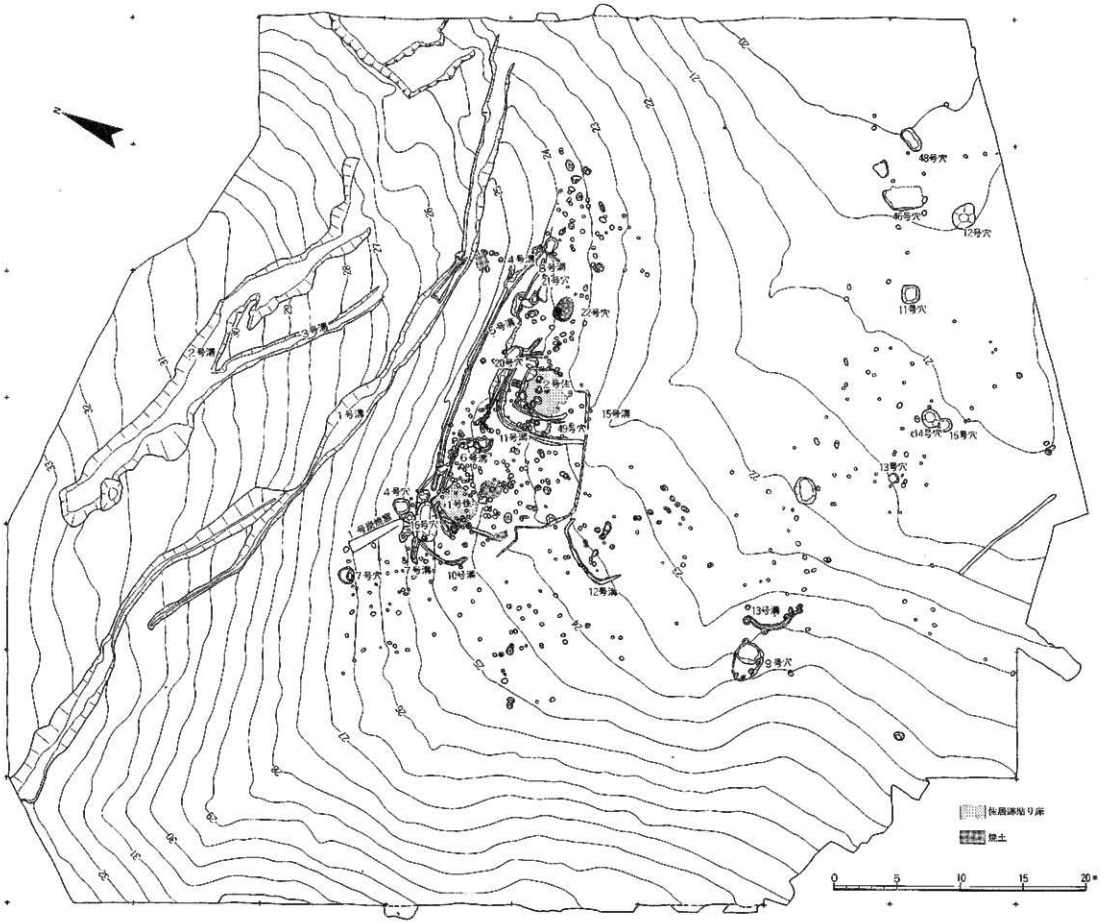
(1) 調査の経緯と層序

調査は、昭和54年度の試掘調査で、丘陵部斜面から北東の谷部へひろがる、斜面と平坦部に遺構ならびに遺物包含層を確認した。

本調査は約6,000m²を対象面積とし、竪穴住居跡2棟、溝15箇所、炭焼窯跡1基、穴多数を検出した。これらの遺構は、急斜面が緩斜面へと移行する付近に集中する。また、遺物包含層もこの一帯に存し、数ヶ所で遺物が集中出土した。



第39図　No.18遺跡C地区の地形と区割図



第40図　No.18遺跡C地区遺構全体図

なお、丘陵上と周辺部については、雑木林等で予備調査が不充分であったため、約400m²の補足調査を実施したが、遺構及び遺物包含層の確認はできなかった。総発掘面積は約5,500m²である。

遺跡の層序は、丘陵上及び斜面で上層から表土（茶褐色土　約20cm）、地山層（黄褐色土）、谷部で両層間に黒色土層の堆積が見られた。

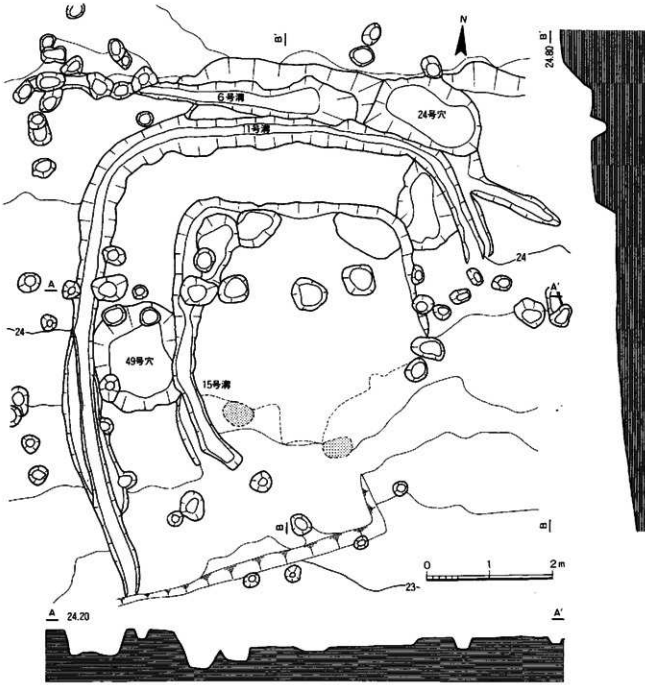
(2) 立地（第39・40図）

遺跡は、北東に二股に延びる、丘陵尾根に挟まれた斜面から、谷部の間に位置する。標高は20～34mを測る。

(3) 遺構（第40・41・42図）

第2号住居跡（第41図、図版第18の1）

第2号住居跡は、遺構集中地点のほぼ中央に位置する。規模は、現存部で南北7.4m、東西6.8mを測り、北・西側



第41図　第2号住居跡実測図

にL字状の第11号溝及び、テラス状遺構（東側にも一部）に囲まれている。もとは周囲に溝とテラス状遺構を巡らしていたと思われる。

壁面は、南・東側立ち上りについて、検出できなかったが、南北にやや長い隅円方形状のプランと推定される。

床面は、南側半分ほど、黒色土層中に貼り床が施され、ゆるく傾斜しているが、ほぼ平坦である。なお、床面南側には、2ヶ所の焼土があった。主軸はN－5°－Wである。

出土遺物には、須恵器杯（第43図6・7・35・40・60・68・74・79、第44図3・24・25）、土師器（第46図7・27、第47図3・11）鉄鎌（第47図22）がある。

第1号住居跡（図版第18の2）

第1号住居跡は、第2号住居跡の北西6mに位置する。壁面は、北面及び北東側のみ検出できた。規模は、現存部で3.5m四方を測り、部分的に黒色土層中に貼り床を施す。プランは明瞭ではないが、北西コーナーの形状より、方形と推定される。

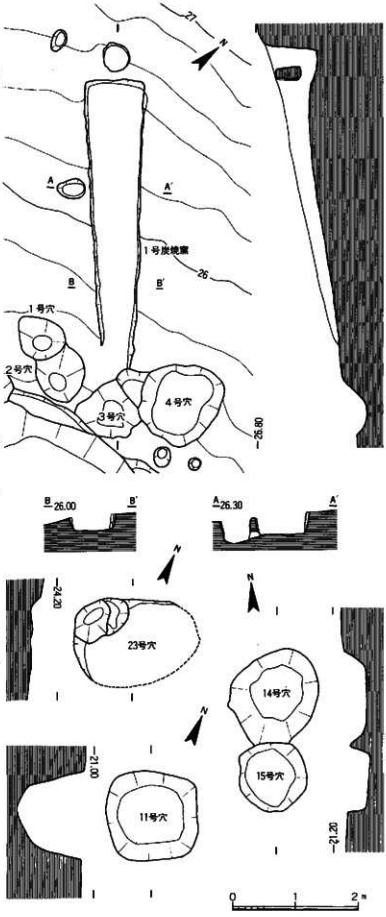
出土遺物には、須恵器（第43図15・24・26・46・50・59）、土師器（第47図5）、鉄鎌（第47図21）がある。

その他に、第12号溝は、「C」の字状の溝で住居跡周溝の一部分とも考えられるが、黒色土層中に貼り床等が見られず、住居跡と断定できない。

第1号炭焼窯跡（第42図）

第1号炭焼窯跡は、遺構集中地点の北西隅にあり、焚口の床面で標高25.5mを測り、窯体主軸の方向はN－50°－Wを示す。床面の比高差は約40cmと比較的ゆるい傾斜（角度8.5度）の半地下式の炭焼窯跡である。灰層及び前庭部は失われていた。

窯体の長さは5.3m、焚口の床幅は50cmで奥へ次第にひろがっており、奥壁近くで90cmと小規模な炭焼窯跡である。窯壁の立ち上りは



第42図　遺構実測図

現存部で焚口５cm、奥壁95cmとほぼ垂直になる。煙出しは、奥及び、竈体に向って左側の２ヶ所にあり、床面が煙出しで若干低く、凹みとなる。竈壁は鋭利な金属器により作出されその痕跡をとどめる。

床面の酸化度は、焚口で赤褐色に酸化し、奥壁までの所々に青灰色還元層が認められ、床の焼成度が高かったと推定される。出土遺物は少なく、須恵器杯身（第43図60）がある。

穴は多数検出した。第11号穴は1.4m四方の隅円方形で、断面L字状になる。深さは1.1mと他の穴と比較すると深い。遺物は須恵器（第43図39）、土師器（第46図11）が出土した。第23号穴は２×1.4mのタマゴ形で、北西隅に２段のピットを持つ。ピット以外の底面は、強い加熱を受けており赤褐色の焼締状態を示す焼土穴である。

溝は15ヶ所で検出した。遺跡北側の第１～３号溝は、他より幅１～９mと広く、急斜面を丘陵上近くから、遺跡を東西に横切る。出土遺物はなく判断できないが、斜面を伝わる降雨及び湧水を、居住地への流入を防ぐ施設と推定したい。なお、住居跡に接する第４・５号溝も同様のものと考えたい。

焼土は、住居跡及び穴以外で、第１号住居跡に接して２ヶ所検出した。面的には第１号住居跡に近いレベルで、焼土穴とは異なり、黒色土に焼土ブロックが混じる。（狩野）

(4) 遺物（第43～47図、図版第18の10～17、第19、20）

出土遺物には少量の縄文時代のものと、遺跡の主体を占める多量の奈良時代のものがある。

縄文土器は口縁部に縦条痕を施し、口唇部に凹凸を加えた晩期と思われるものと、半截竹管文を施文する中期中葉の２時期がある。石器には打製石斧・磨製石斧・撥石がある。

奈良時代の遺物には、須恵器・土師器・丹塗土師器・黒色土師器・砥石・鉄器・フイゴ羽口・紡錘車・内面当て具などがある。その大部分は須恵器と土師器が占めており、その割合はおよそ１対１である。これらの遺物は遺構の集中する丘陵裾部から谷部に包含する。出土した須恵器では別個体が溶着したものや変形の著しいもの或いは生焼け品が含まれる。また同一個体の須恵器が広範囲に散在する事例が幾例もある。

以下、出土遺物は、形態（A・B……）、法量（I・II……）毎に便宜的に分け概述する。

須恵器

杯蓋（第43図） AI（１～31；口径13.2～17.0cm）は天井部がまるく笠形をなし縁部が屈曲しない５・26の形態と、平らな天井部と屈曲する縁部からなる12・16の２者がある。また器厚は、１～４が全体に薄く成形される。つまみは扁平な宝珠形が多い。一方口縁端部は鋭く尖るもの、幅広く角ばるもの、幅広く丸くおさめるものなど変化が多い。

天井部の調整では、７・19・25～27・30・31の天井部外面にヘラケズリを加える。

AII（32～39；口径18.6～22.0cm）の33・38は天井部外面にヘラケズリを施し、39には凹線をめぐらせる。

杯身（第43図） AI（51～53；口径11.0～15.0cm、器高2.2～2.9cm）は皿と呼べるかもしれない。51は外底面にヘラケズリを加える。AII（40～48；口径11.6～14.4cm、器高3.1～4.2cm）は無高台杯で底部はヘラキリ痕をとどめる。B（49・50；口径9.0～11.2cm）は無高台杯で、口縁部が強く外反する。２例を数える。CI（55～69；口径10.4～15.2cm、器高3.4～4.8cm）は底部に高台のつくものである。底部の切り離しはいずれもヘラキリであり、67の外底面には「×」のヘラ書き記号がみられる。また57・61・63・64は杯の内面から端部にかけて著しく摩滅する。

CII（70～72；口径15.2～17.2cm、器高８cm前後） 71は体部にヘラ描き沈線を引き、70の体部下半はヘラケズリを行う。D（73）は杯Bに高台をつけたもので、体部に鋸歯状のヘラ描き沈線をめぐらせる。E（74）は体部に稜を有する杯であり、稜の下半はヘラケズリを行う。

皿　(第43図) A (54) は無高台の皿である。外底面はヘラケズリを施している。B (76・80) は高台付きの皿で高台は低く端面が角ばる。C (77～79) は高台が高く端部を丸くおさめる。

高杯　(第44図11)　低く太い柱状部をもつ脚部である。灰白色の生焼け品である。

壺蓋　(第44図1～6)　蓋は短頸壺に被るもので、1・3・6は平らな天井部にヘラケズリを行い、扁平な宝珠形のつまみを付ける。天井部から口縁部にかけての屈曲はなで肩でゆるく折れる。

壺　(第44図)　A (12・13) は小型の短頸壺である。12の底部はロクロを用いずヘラで削っている。B (15～18) は底部の切り離しがヘラによる15～17と、丸く成形される18の2つの形態がある。C (9) は細く短い口頸部である。D (7・10) は長頸壺である。10は体部の肩が大きく張り出し、体部下半にヘラケズリを加える。底部の高台は外方に強くふんばり、端面が内側に折れる形となる。E (28) は大きく朝顔形に開く口縁部をもち、肩部が強く張る。口縁部と肩部には2本一組の波状文を施文する。また29は口縁端部を断面三角状に隆起させ受け口状口縁とする。F (31) は肩部が張らず、なで肩をした形態の壺で、口頸の立ちあがりは短く、ほぼ直立する。また体部外面にはタタキ調整後カキ目を施し、下半に縦方向のヘラケズリを加える。内面には同心円文が残る。この土器は体部上半が焼き歪みにより大きく変形する。また32は壺の下半部を残存する土器で、その形態は31に似る。体部外面はヨコナデを行った後下半部にヘラケズリを施し、内面はハケ目状の痕跡を残している。

横瓶　(第44図20～27)　土器は十数体あり、その存在が顕著である。口径は10.2～11.6cmを計り、口頸部の法量差が少ない。口縁部の端部はやや張り出し、端面は少し中くぼみとなって角ばる。体部はロクロでひいたあとタタキ調整を行い、外面はカキ目を施す。内面には同心円文が残る。体部の一側面には閉塞用の粘土円板がみられる。

鍋　(第44図33)　出土数は1点であり、細片のため図上復元を行った。体部外面の調整はタタキ後上半にカキ目を加え、下半から底部にかけてヘラケズリを行う。口縁部内面には、ヨコナデ及びカキ目調整が施される。

鉢　(第45図1～4)　A (1) は口径36cm、推定器高26cmと大型である。体部はほぼ直線状に外傾し立ち上がる。口縁端部は若干肥厚し、やや内傾する。体部外面の調整は、タタキを行った後ヨコナデ、カキ目を施している。体部内面はカキ目及びハケ目状の痕跡を留める。B (2・3) は鉄鉢形土器である。2は口縁部が内傾し、体部内外面にカキ目調整を行い、外面の下半にはヘラケズリ調整を加える。底部は尖らず丸い形態になると思われる。3は底部が平底となり、外底面はヘラケズリを行い、内底面はナデを施す。C (4) はすり鉢形土器で、器厚の厚い底部には棒状工具による刺突が一面に施される。

甕　(第45図9～11)　A (9・10) は短く外反する口縁部と肩の張り出しが少ない体部をもつ。体部上半には相対する2方に把手を付ける。B (11) は大きく外反する口頸部と強く張る体部からなる。口縁部端面は肥厚し外傾する。口縁部外面には波状文を施文する。

円面硯　(第45図6・7)　出土点数は2例である。6は青灰色の色調で、焼成は堅緻である。硯面は同一器面上に突帯をめぐらし、陸と海に区分する。7は器面全体に厚く自然釉がかかり、硯部に気泡のふくらみがみられるなど使用に適さない。この硯部は2条の溝状の凹みを設けて陸と海に分ける。また6・7の台部は横・縦方向のヘラ描き沈線を引き、更に長方形の透し孔を4個あけて加飾している。

その他、5・12～14は器種及び用途が不明なものである。5は生焼け品と思われ、端面が両方に大きく張り出す。また12は、赤灰褐色の色調で、焼成が堅緻な土器である。外面にはヘラ描き沈線による文様を施す。文様は図左側の開口部をめぐる1条の沈線をとり囲むようにほぼ左右対象に配される。内面はヨコナデ調整を行う。

13は水鳥の足を模したもので、土器は3本の指に相当する突帯と水かきにあたる低い面が表現される。上端面の剥離痕、傾きから右足に該当すると思われる。

14は全面に指頭痕がみられる。断面は円筒状になり、約半分の半截品が残存する。

また第46図1・2は淡茶褐色の色調をした土器で、土師器かまたは須恵器の生焼け品か、類例がなく不明確である。この土器の頂部には螺旋状の順回りの回転痕がみられる。口縁端部は内側に折れる形となる。

丹塗土師器（第46図3～15・20～23）

器面の外面および内面に丹を塗り赤彩した土師器である。器種には杯・杯蓋・高杯などがみられる。土器はいずれも細片で約70点を数える。

杯蓋（9～11）　A（9・11）は、扁平な宝珠形つまみを付ける。口縁端部は尖る。B（10）は直径4.2cmの環状につまみを付ける。外面は全体にヨコナデを施しており、また内面の調整は器面が荒れていて不明である。赤彩は両面にその痕跡がある。

杯身　AI（4～6；口径11.0～14.2cm、器高約3.0cm程）は無高台の杯である。4・5の体部内外面はヨコナデ調整を行い、6の外底面はヘラケズリが行われる。B（3・12）は無高台の杯である。底面からの体部の立ちあがりは内湾ぎみとなる。法量差によりI（口径11.0cm）とII（口径17.6cm）に分かれる。体部内面は横方向のヘラミガキを行う。C（20）は高台付きの杯で、体部内外面はヘラミガキされる。D（15）は高台付きの杯で、体部の中程に稜を有し、体部の内外面はヨコナデを行う。また14・15・20の体部外面には、1条の凹線を引く。21～23はC・Dの底部であり、外底面にも赤彩がみられる。

高杯（7；口径16.2cm、高さ5.6cm）は完形品であり、器高の低い杯部を付ける。杯部底面はヘラケズリを施し、他の器面はヨコナデ調整を行う。

黒色土師器（第46図14・16～19）

土器は内面のみ黒色を呈する黒色土器A類〔小笠原　1971〕にあたる。いずれも杯で体部・底部外面は赤彩される。杯身A（16～19、口径約19cm）は丹塗土師器杯身BIIと同形態であり、土器の内面は横方向に細かくヘラミガキが行われる。口縁端部は丸くおさめ、外面の端部近くは中くぼみの稜がめぐる。杯身B（14）は形態的に丹塗土師器杯身Dと同様である。

土師器（第46・47図）

器種には椀・鍋・甕があり、この内煮沸形態の甕が量的に主体を占める。

椀（第46図24）　口縁部がほぼまっ直に立ち、体部内外面はヨコナデが行われる。

鍋（第46図31～33；口径30～33cm）短く外反する口縁部は先細りに尖る。体部の調整は外面上半にカキ目を施し下半から底部にかけてヘラケズリ及びタタキを行う。

甕（第46・47図）　AI（口径11.4～13.6cm、器高8.4～14.6cm）の体部内外面は大部分の土器がヨコナデ調整が行われる。AII（口径16.0～19.0cm）、AIII（口径22.0cm）がある。B（第46図34）は体部上半の相対する2面に突起を付けるもので体部上半にカキ目、下半部にヘラケズリを行い、AII・AIIIの体部外面の調整方法と共通する。

第46図29・30は口縁直下に幅広い隆帯をめぐらせる。類例は磐波市増山遺跡No.5地区と同市高沢島II遺跡出土の土師器〔神保他　1978〕が県内にある。また石川県輪島市洲衛1号窯跡出土の須恵器で「鉢」として分類されたもの〔吉岡　1974〕にあたるがいずれも全形を知り得ない。

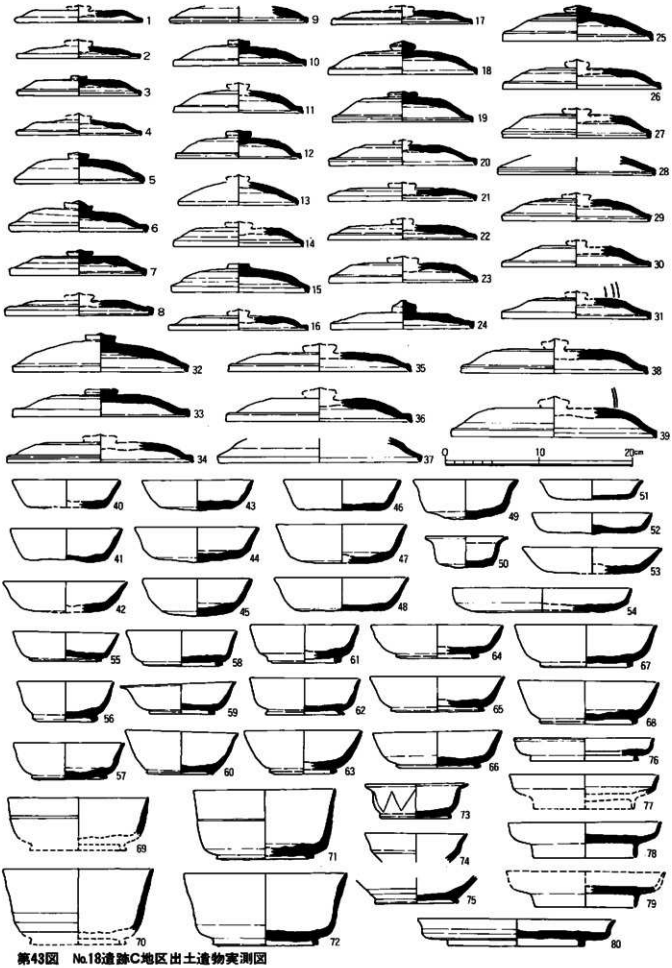
紡錘車（第47図15）　土師質のものであり、側面は多面体とする。

フイゴ羽口（第47図18～20）　先端部は熱により表面が溶けた状態となる。

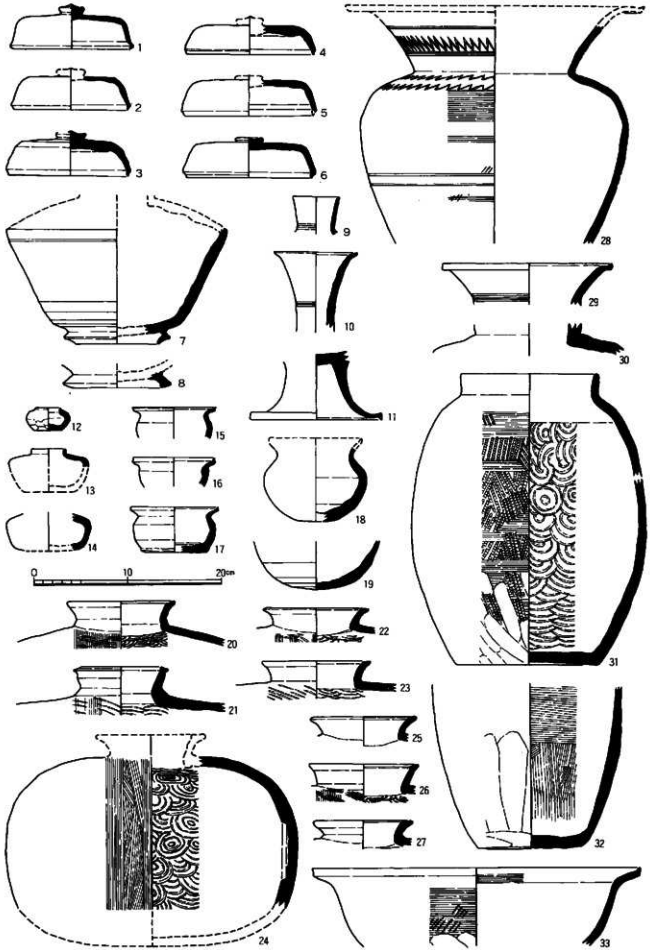
砥石（第47図16）　粘板岩質の石材を用い、4面が利用されている。

鉄器には、鏃（第47図21・22）と釘（第47図23）がある。

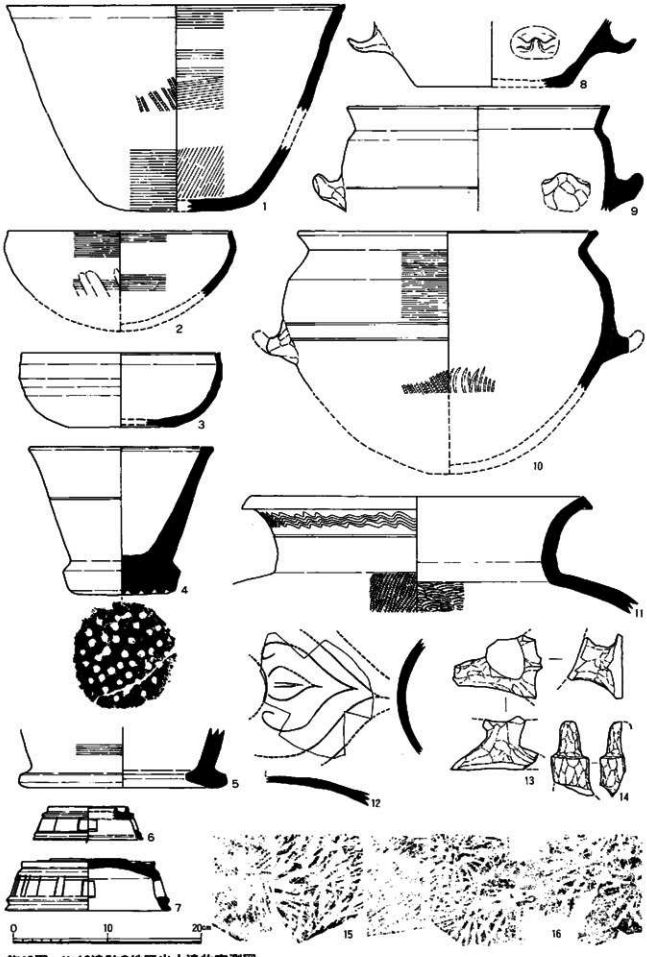
内面当て具（第47図17）は直径8.2cmの土師質のもので、断面形は少し凸面形となる。土器成形時のタタキ調整を行う際の当て具と思われ、凸面には同心円にめぐる凹凸部がある。　（上野）



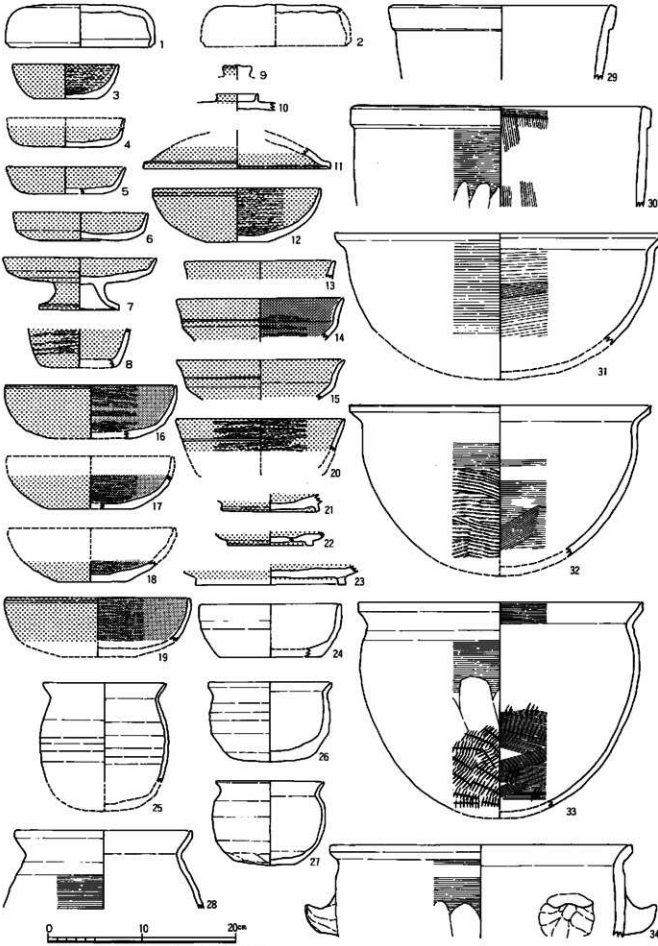
第43図　No.18遺跡C地区出土遺物実測図



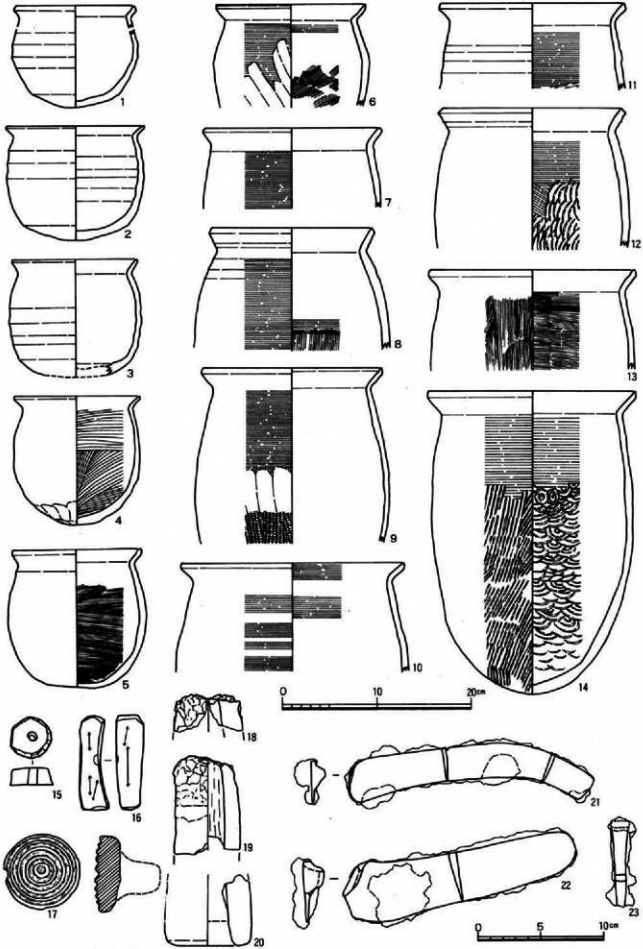
第44図　No.18遺跡C地区出土遺物実測図



第45図　No.18遺跡C地区出土遺物実測図



第46図　No.18遺跡C地区出土遺物実測図



第47図　No.18遺跡C地区出土遺物実測図

4　No.20遺跡B地区

(1) 調査の経緯

試掘調査の結果、丘陵尾根部で穴２箇所と、谷部で土師器片が発見された（図版第22）。穴については、それぞれを完掘し、谷部については面的に広げ、記録保存の調査を実施した。

その結果、遺構は検出されなかったが、土師器のほか、縄文時代の石器、須恵器、中世の珠洲を採集した。

(2) 地形と層序（第48図）

樹枝状丘陵の、つけねにあたる部分である。丘陵尾根部は、表土下約20cmで褐色粘土層があらわれ、谷部では、約１ｍの深さがある。谷部の層序は１層表土（50cm）、２層黒色土（10cm）、３層茶黒色土（40cm）で、２層から土師器が出土し、遺物包含層となる。調査区は、果樹園と畑地で、耕作による攪乱が激しい。

(3) 穴（図版第22の７・８）

やゝ平坦な丘陵尾根部から、やゝ下った斜面地にある。

第１号穴は、1.2m×1.3mのほゞ円形で、深さ20cm、底面が平坦なもの。同じく山側の壁が赤く焼けている。

第２号穴は、80cm×80cmのやゝ方形に近く、深さ10cm、底面が平坦なもの、同じく山側の壁が赤く焼けている。

いずれも、覆土に焼土塊、炭化物を含むが、出土遺物はなく、所属時期は不明である。

(4) 出土遺物（図版第22の９）

すべて谷部から出土した。

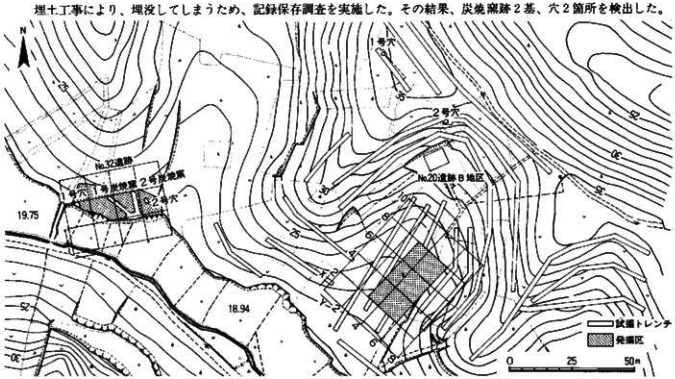
縄文時代の磨製石斧・打製石斧・擦石、古墳時代の土師器高杯、奈良時代の須恵器高台付杯・壺、中世の珠洲の破片がある。いずれも散発的な出土状況を示す。

5　No.32遺跡

(1) 調査経過

谷部埋土工事により、丘陵裾部が掘削されたため発見された、新発見の遺跡である。

埋土工事により、埋没してしまうため、記録保存調査を実施した。その結果、炭焼窯跡２基、穴２箇所を検出した。



第48図　No.20遺跡B地区・No.32遺跡の地形と区割図

出土遺物には、先土器時代のナイフ形石器、平安時代の土師器・須恵器がある。

(2) 地形と層序（第48図）

台地の先端縁部にあたり、表土（約20cm）下は、褐色粘土層である。

(3) 炭焼窯跡（第51図）

第1号炭焼窯跡は、長さ約14m、幅約1mの短冊形、壁面が垂直に立ち、断面形が「凵」形となる。半地下式構造で残存壁高約1mである。先端と左・右両側に1個づつ、径約50cmの煙出し穴が付設されている。先端から右壁に沿い、幅約10cm、深さ約10cmの排水溝が設けられ、排水溝は焚口部で、左へ方向を転ずる。底面の傾斜角は5度以内で、先端部にいくにつれ平坦になる。

第2号炭焼窯跡は、長さ約11m、幅は先端部が約1.4m、焚口部では約80cmの撥形で、断面形が「凵」形となる。半地下式構造で残存壁高約80cmである。先端と右側に径約50cmの煙出し穴が設けられている。先端から左壁に沿い、幅約10cm、深さ約10cmの排水溝が設けられている。排水溝は、焚口部から外では、やゝ左へカーブする。また、右側の煙出し穴からも排水溝がのび、かぎの手状に曲って、左排水溝に接続している。底面の傾斜角は8度以内で、先端部でやゝ平坦になる。

窯体内の覆土は、第1・2号窯跡ともにほぼ同様な堆積状況を示す。1層黒色土　2層黄白色粘土　3層窯壁及び焼土　4層炭化物（木炭粒）である。4層は、木炭取り出しの後の残り滓、3層は、壁面の剥落、2層は、天井部を形成していた粘土の落下、1層は、天井部崩壊土後の流入土と考えられる。

以上から、窯体は、地山土を掘りあげ、その土で天井部を構築する半地下式の構造で、木炭焼成・取り出し後、自然に崩壊していったものとみられる。2層に混りが少ないことから、木炭取り出しにあたって、天井部を崩さず、焚口部から搬出したとみられる。覆土から、何回の焼成を行ったかは不明である。壁面は、底から半分くらいまでは、表面が黒色で、上半分は赤く焼けていて硬い。底面は、ほとんど変化を識別できない。

(4) 穴

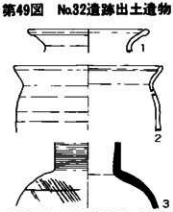
第1号穴は、1.4m×2.1mのやや方形に近い、深さ15cmの底面の平坦なもの。山側の壁が赤く焼けている。第2号穴は、1.6m×2.4mの長円形で、深さ25cmの底の平坦なものである。いずれも出土遺物はなく、時期は不明である。第2号穴の覆土は、炭焼窯跡の覆土1層である。

他に、第2号穴の南側には、柱穴状の穴があり、覆土には木炭状炭化物が多く含まれ建物に復原できないが、木炭集積などの作業場を想定することができる。

(5) 出土遺物（第49・50図、図版第22の3・4）

表土層から、硬質頁岩製のナイフ形石器が出土している。単独出土である。打面側を基部とし、基部側辺に、二次調整剝離を施す。県内では、福光町鉄砲谷遺跡B地区〔西井他　1973〕大沢野町野沢遺跡C・D区〔斉藤他　1979〕に類例があり、富山県第Ⅲ期a〔橋本　1976A〕に比定できる。

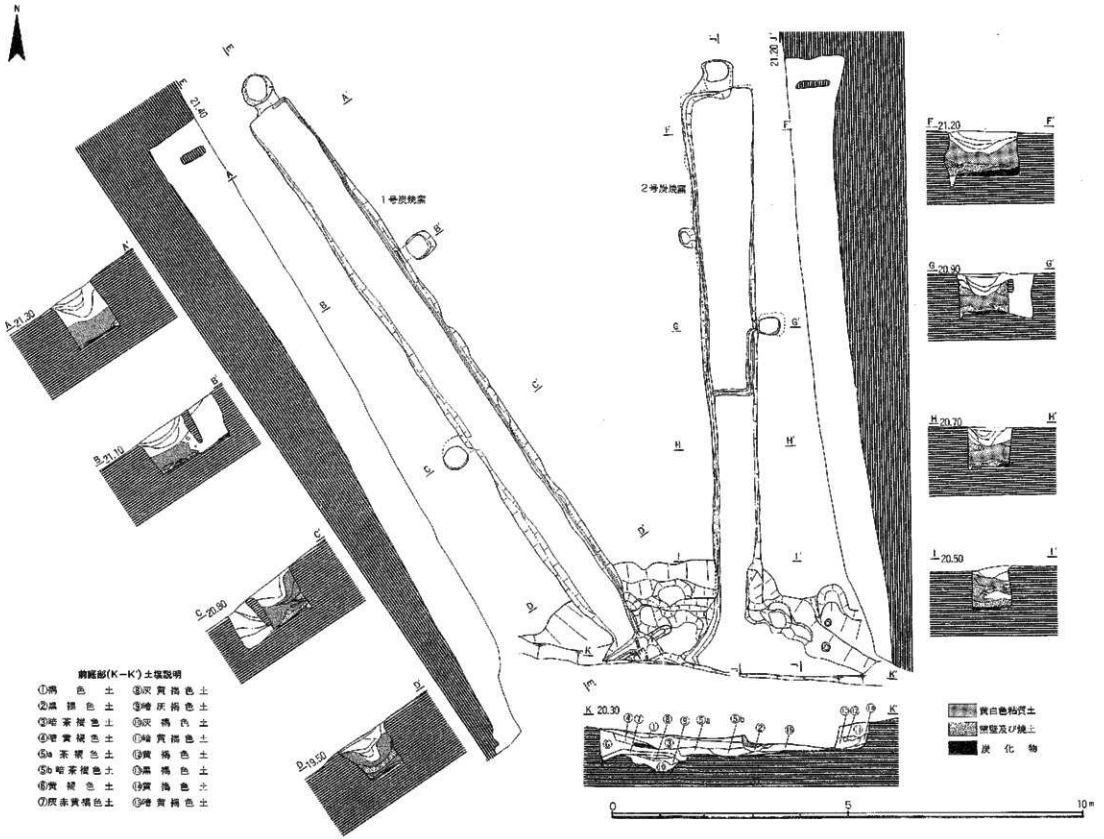
第49図　No.32遺跡出土遺物



第50図　No.32遺跡出土遺物実測図(3/4)

炭焼窯前庭部覆土から、土師器小型甕の破片が出土した。器壁は荒れているが、まるくふくらむ口縁部の特徴は、魚津市佐伯遺跡〔山本他　1979〕、入善町じょうべのま遺跡〔橋本・岸本　1975〕に似たものがあり、平安時代9世紀前葉に位置づけることができよう。須恵器3は、まるみのある体部に、細長い頸部がつく瓶である。第1号窯1層から出土した。伴うものと考える。

以上から、第1・2号炭焼窯跡の年代を9世紀前葉におくが、前庭部覆土の切り合いから、第1号窯が古い。これらは製鉄用木炭の焼成窯と考えられる。（久々）



第51図　炭焼窯跡実測図

Ⅳ　第４次調査

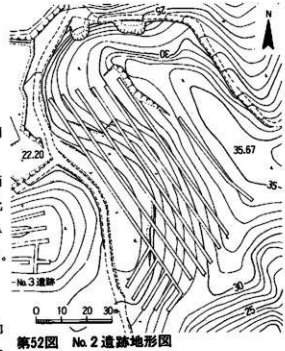
1　No.２遺跡（52図）

当遺跡は、No.３遺跡の西方約100mに位置する。

分布調査では、西側斜面に須恵器の散布が若干認められた。

試掘調査の結果、丘陵上近くの斜面から穴２個を確認し、今回その発掘調査を実施した。

穴の規模は、1.3m×1.0mと0.9m×1.0mの大きさを有し、平面形態が隅円方形である。この覆土には黒褐色土と共に多くの炭化物が入り、穴の周壁が熱により赤く酸化している。穴の掘り込みは表面直下からである。出土遺物はなく、所属時代が不明である。



第52図　No.２遺跡地形図

2　No.３遺跡（第53図）

遺跡は平野部に接する丘陵上に立地する。この丘陵は北東方向に長く伸びている。今回の調査区は丘陵北側部分にあたる。なお、東側谷部をＡ地区と仮称しておく。

調査では、縄文時代中期前葉の住居跡２棟・円墳１基・時代不明の穴13個を発掘した。

(1)　縄文時代

第２号住居跡（第54図の２、図版第23の２）

平面形態は楕円形をなし、その規模は2.9×4.1mを測る。

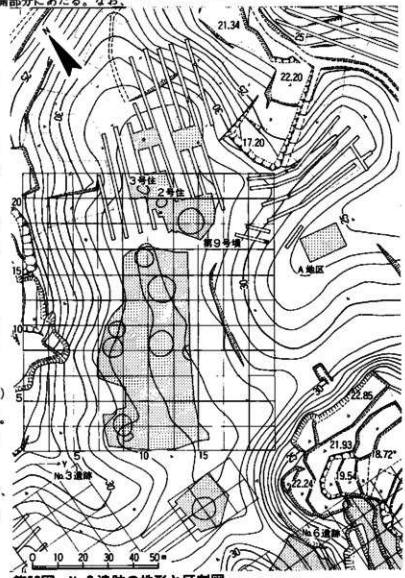
主軸方向はＮ－83°－Ｗである。主柱穴はP₁～P₅と思われ、５本主柱ＸＹ型〔橋本1976Ｂ〕の配列をとる。

炉は単設式地床炉〔橋本　1976Ｂ〕で、焼くしまった焼土が床面から盛り上がった状態で検出された。炉は、住居跡中央よりやや西にずれる。

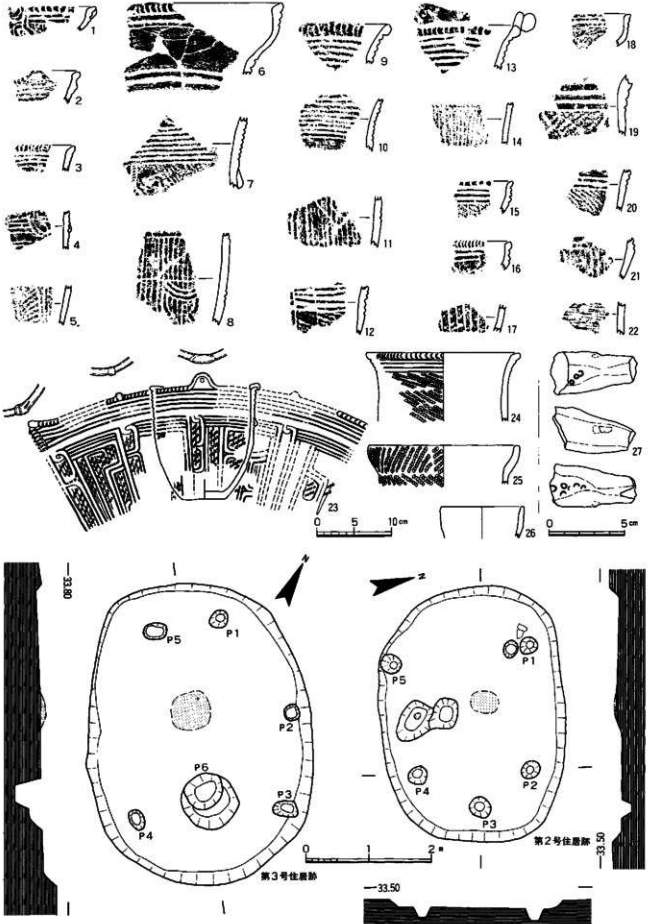
第３号住居跡（第54図の１、図版第23の３）

第２号住居跡とは約４mの隔たりをもつ。主軸方向はＮ－42°－Ｗであり、その規模は楕円形である。

柱穴は床面から約15cm前後の掘り込みで、主柱穴は遺存状態が悪く不明確である。炉は単設式地床炉で床面から盛り上がる。



第53図　No.３遺跡の地形と区割図



第54図　第2・3号住居跡・出土遺物実測図(拓影図¼)　1～5．第2号住居跡　6・8・10～14・18・19・23～26．第3号住居跡　7・9・15～17・20～22・27．包含層

Psは断面漏斗状を呈する穴である。

出土遺物（第54図1～27）

遺物には、土器・石器・土製品がある。土器は深鉢形土器片で、復元例は23のみである。

23は、円筒形の胴部をもつ。口縁部側は横位の文様区画を、胴部には縦位の文様を施している。口唇部には4個の突起を配する。

深鉢形土器の器形には、頸部がゆるく外反し、口縁部が内湾ぎみに立つ1・6・25と、頸部がゆるく外反する24と、円筒形の3種がみられる。

27は、土偶の手と思われ、相対する2面に円形の刺突を行う。

石器には、蛇紋岩製の磨製石斧2、打製石斧・擦石・敲石各1点がある。

(上野)

(2) 古墳時代

No.3遺跡A地区

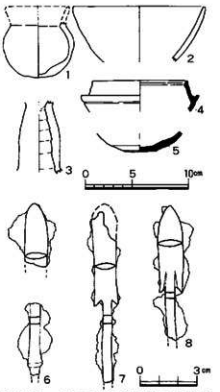
No.3遺跡の丘陵東斜面谷部をA地区と呼ぶ（第53図）。A地区には明確な遺構は検出されなかった。しかし、小規模な遺物包含層は認められた。

出土遺物（第55図1～3）図示した1は、手捏の小型壺、3は高杯脚部破片である。出土遺物の時期は、おおむね5世紀代と推定される。

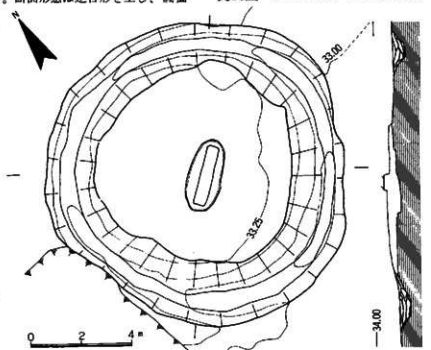
第9号墳（第56図、図版第23の4）

第9号墳は古墳群の北端に位置する円墳である。墳丘は認められなかったが、墳丘中央部の表土層下には厚さ約15cmの撹乱を多く受けた封土が残存していた。封土は旧表土層上に直接盛られ、盛土状況からは、元来、墳丘の高くない古墳であったと推定される。

周溝は全周し、幅は1.8～2.4mを測る。断面形態は逆台形を呈し、底面は東側と西側では55cmの比高差をもつ。外周高は20～50cm、周溝を含めた外周径は11.9 mを測る。



第55図　A地区・第9号墳出土遺物



実測図　1～3. A地区　4～8. 第9号墳

埋葬施設（図版第23の5）

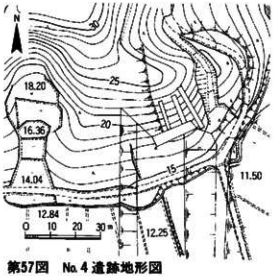
墳丘中央部に長さ2.85m、幅1.35mの楕円形の墓坑が地山層中に掘り込まれる。主体部はほぼ中央部に位置し、長さ2.4m、幅50cmを測る。棺底は「U」字状を呈し、割竹形木棺である。

出土遺物（第55図4～8）　杯身4は周溝出土で口径10.2cmを計る。たちあがりは内傾し、端部で垂直になり、内側に段をもつ。5は、墳丘表土層から出土し、底部外面にヘラケズリを施す。6～8の鉄鏃は周溝から出土し、有抉の長頸柳葉式に属し、鏃身の断面はレンズ状になる。　(池野)

第56図　第9号墳実測図

3　No.4遺跡（第57図）

遺跡は丘陵斜面部に立地する。今回の調査箇所はその中程にあたるが、遺構・遺物は検出されなかった。この結果、当遺跡の本体は、過去に実施した分布・試掘調査によれば、試掘調査時すでに工事で一部削平・盛土されていた丘陵裾部緩斜面に位置するものと推測された。なお、当遺跡からは、分布調査の際、条痕文を施す縄文土器、5世紀代の土師器、時代不明の須恵・土師器が表採されている。



第57図　No.4遺跡地形図

4　No.6遺跡（第58図、図版第24の1・2）

遺跡はNo.7遺跡の谷を挟む東側丘陵上に位置する。丘陵は南側の谷部に向かって突出し、標高が16～31mを測る。また、尾根上と谷底との比高差は15m前後である。丘陵の西側は全体に勾配が強い。東から南にかけての尾根上から標高約21m程は急斜面で、それ以下は緩斜面である。

(1)　調査の経緯

昭和54年度の試掘調査で、丘陵全域に遺跡の広がりが認められたため、55年度に一部表土排土を先行し、56年度本調査を実施した。検出した遺構としては、古墳時代後期の住居跡14棟、構築途中で放棄された窯跡1基、穴多数、奈良～平安時代の炭焼窯跡1基がある。その他、時代は不明の穴（第11～14・16号）で、周壁が焼け覆土に厚い炭化物層をもつものもある。

(2)　先土器・縄文時代の遺物（第60図）

先土器時代の遺物は、第60図の削器1点のみであり、石質は頁岩製である。また、縄文時代の遺物のうち土器は、約25点を数え、中期後半と晩期のものが含まれる。石器としては短冊・撥形の打製石斧計5点、蛇紋岩製の磨製石斧1点がある。

(3)　古墳時代

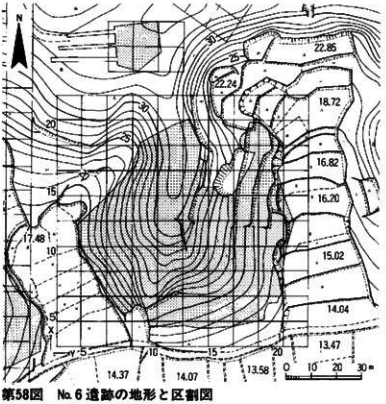
遺構（図版第24の3、25の1・2）

遺構は緩斜面になる丘陵中腹から裾にかけて多く立地する。このうち住居跡は、丘陵をとりまくように検出し、重複したものが多くみられる。

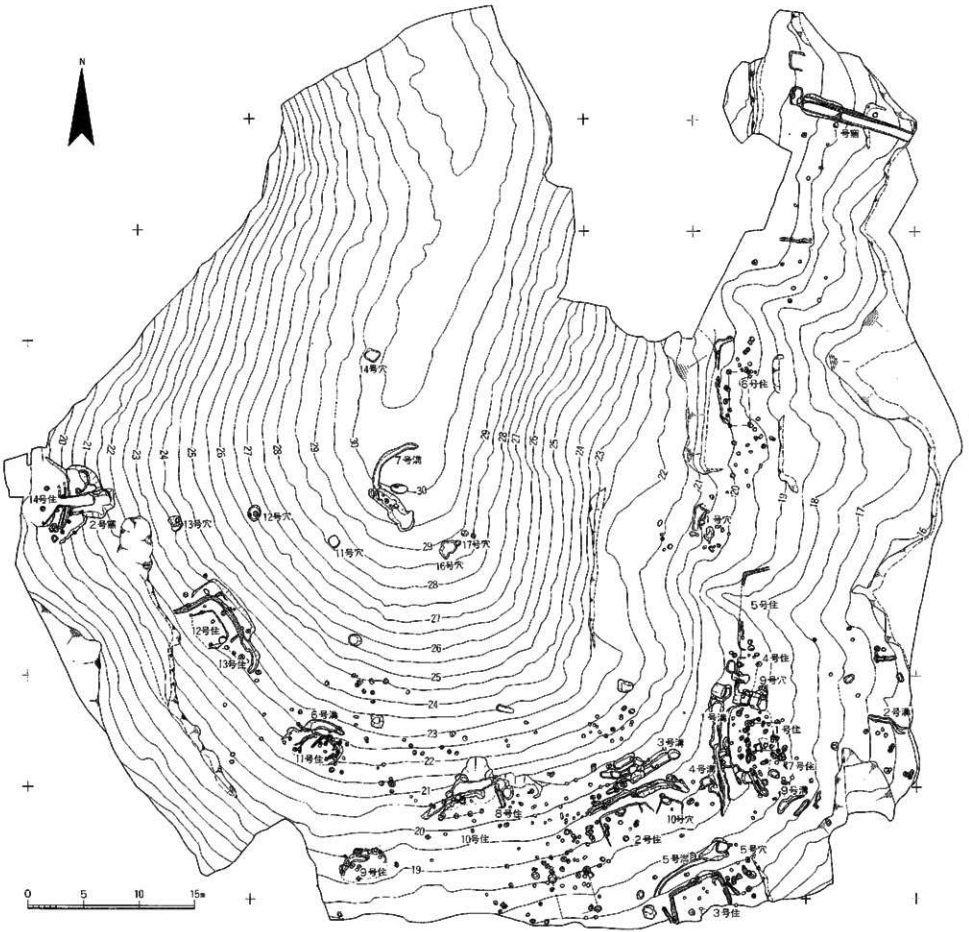
第1・7号住居跡（第61図、図版第25の1）

第1号住居跡は斜面部に構築されたため、西側半分のみが遺存している。

平面形態はほぼ方形と推定され、完存する西壁の長さが4.5mを測る。壁高は約50cmである。主柱穴は4本で、床面からの掘り込みが1m前後と深い。柱間は2.5m×2.5mで、住居跡の中央部に炉と思われる焼土ブロックがある。また、西壁の山側にその間0.7mを隔て周溝を配する。



第58図　No.6遺跡の地形と区割図



第59図　No.6遺跡遺構全体図

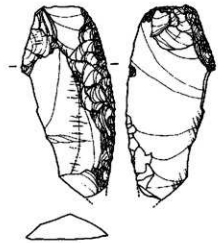
第7号住居跡は第1号住居跡やその他多数の柱穴状の穴と重複しており、床面・周壁溝の一部を確認したにとどまった。

第3号住居跡（第62図、図版第24の3）

住居跡は山側半分が遺存し、平面形態が歪んだ方形を呈する。主柱穴は確認できなかったが、周壁溝及び炉と思われる焼土ブロック、さらに北壁の山側斜面で周溝を検出した。

第2号窯跡

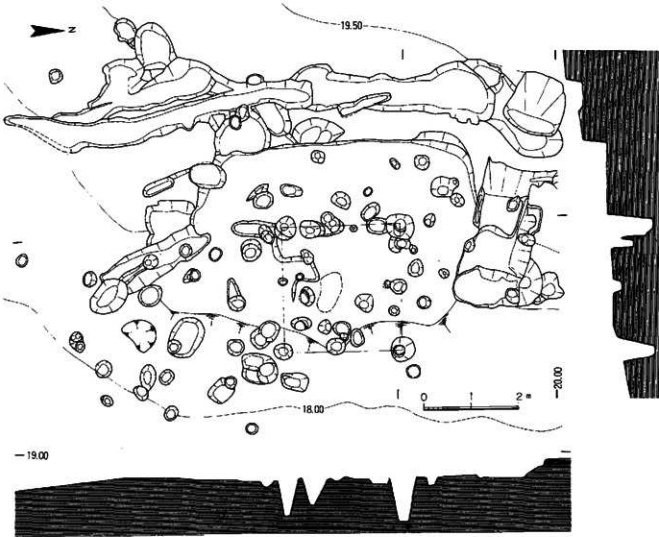
窯跡は構築途中で放棄されたものであり、第14号住居跡に先行して掘り込まれる。床面はほぼ水平で、焚口近くで幅0.6m、奥壁で幅1.1m、長さ3.1mを各々測る。側壁はほぼ垂直に立ちあがる。主軸方向はN－82°－Eである。地山は淡灰黄色の粘質土が堆積している。



第60図　出土遺物（3/5）

第10号穴

穴はほぼ方形のプランで、完存する部分が一辺約2mを測る。底面は、平坦で、直上に炭化物層が厚くしかも一面に広がった状態で検出された。この炭化物層中からは、土師器の甕底部片と第68図16の鎌が伴出した。その他の遺物としては、穴の周辺から第68図17～20の鉄器が出土した。　（上野）



第61図　第1号住居跡実測図

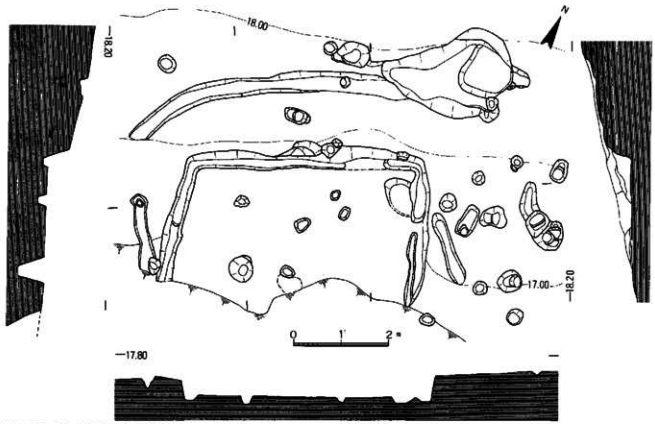
古墳時代の遺物

古墳時代の遺物は発掘区全域から出土した。出土量は遺構の多い東、南斜面に集中する。須恵器、土師器の割合は大略3対2である。また、斜面から谷部に変わる変換部に、土器溜りが東側で2ヶ所、西側で1ヶ所認められた。出土遺物の内訳は、須恵器、土師器、土製品、石製品、鉄器がある。

須恵器（第63～67図、図版第25の4～18、26の1～6）

杯蓋（第65図1～18・37～50）　口縁部内面にかえりをもたないものA、内面にかえりをもつものをBとする。A_1（1・2・6・18）口径10.4～14.1cm、器高3.9～4.3cmを計る。天井部から口縁部になだらかに連なるもので、1・6は天井部の一部にヘラケズリを施す。A_2（3～5・7～17）は、天井部と口縁部の境界に鈍い稜をもち、口径11.8～13.3cm、器高3.2～4.6cmを計る。天井部はヘラキリ離しのままである。体部内外面は、ヨコナデ、ナデ調整する。B_1（37・38・41・42・45～48）乳首形のつまみが付くもので、天井部は口端部近くまで逆方向のヘラケズリが施される。口径8.4～10.2cm、器高3.6cmを計る。B_2（39・40・43・49・50）は、つまみが付かず天井部の調整はヘラキリ離しのままで終わる傾向にある。口径8.2～9cm、器高2.3～2.5cmを計る。B_2はB_1に比べ内面かえりの器肉が薄く、天井部には自然釉の付着したものが多い。

杯身（19～36・51～61）　受部のあるもの、ないものに別れる。A_1（20～36）口径10.6～12.3cm、器高3.1～3.9cmを計り、11cm台が多い。全体に浅く扁平の傾向にある。受部は水平または上外方にのび、端部は内側にまき込むものが多い。受部上面には、凹線を施すものもある。たちあがりは低く、内傾し、端部は丸くおさめる。底部はヘラキリ離しのままの状態が多いが、ヘラケズリを施すものもある。器面調整はヨコナデ、ナデを行う。A_2（19）は口径10.9cmを計り、たちあがり端部は薄く、尖り気味になる。B（51～61）口径8.3～11cm、器高5.2～5.5cmを計る。口縁部が外反気味のもの（52・53）と体部から外傾するものがある。底部は大部分に逆方向の丁寧なヘラケズリを施すが、53・54の様にヘラキリ離しのままで終わるものもある。体部に1～2条の凹線をめぐらし、内外面はヨコナデ、ナデ調



第62図　第3号住居跡実測図

整を行う。

高杯（第64図2～16）　有蓋高杯をA、無蓋高杯をBとする。A（2～6）杯部に対して脚部が短く不安定な形態をもつ。口径11～12.1cm、器高8.1cmを計る。杯部は杯身A_1と同様であるが、底部にヘラケズリを施す違いがみられる。ヘラケズリの範囲は約1/4程度で、脚部接合後にヨコナデ調整を行う。短小な脚は裾部で屈曲して外方にひろがる。B_1（9）は、口径12.8cmを計る。B_2（10）は底部と体部の境界に段をもつもので、口径12.1cmを計る。B_3（13、14）は、体部に1条の凹線をめぐらせる。底部はヨコナデ調整するものが多いが、14はカキ目を施す。

高杯蓋（1）　口径12.8cm、器高5.8cmを計る。天井中央部に低い扁平なつまみが付く。

壺（17～21）　短く、細い口頸部から外反して大きくひらく口縁部が付く。17の頸部とやゝ扁平な体部の肩に2条の凹線をめぐらす。凹線の間に円孔を穿ち、円孔の下半を粘土貼り付けで盛りあげて注口部を作る。体部下半から底部にかけてはヘラケズリ調整をする。

鉢（22～25、第66図2・3）　A（22～24）は、すり鉢形のもので、口縁部は内傾気味になる。口径15.4cmを計る。B(25)は杯身Bの大型形態で、口径17.5cmを計る。C（2）は口径38.8cmを計り、体部は直線的にのびる。D（3）は鉄鉢形のもので口径38cmを計り、器肉が厚い。

椀（35・第65図3）　35は「ハ」の字状にひらく短い脚部で、底径11.5cmを計る。3は口径13.2cmを計り、口縁部は内傾し、端部は丸い。

壺（26～34・36～39、第65図1・2・4・12、第66図6）　A（27・28・31）口頸部は直線的にのび、肩がはり、底部にかけては丸味をもつ。28の頸部内面にしぼり目がみられる。B_1（26・33）頸部が「く」字状に外反し、体部は球形に近い。体部径は口径とほゞ同じで、26は口径12.6cmを計る。C（29・30・32・34）口径11.6～14.5cm、器高8～10cm前後のもので、口径に比べて器高の低い形態をもつ。D（38・39・4）口径11～13.2cm、器高19.4～21.5cmを計り、直線的に外反した口縁部をもつ。E（36・37・6）口頸部から外反し、口径は体部径をうわまわり、21.7～25.3cmを計る。E(1)の口頸部は直線的に上方にのび口縁部を肥厚させる。F(12)は口径13cm、器高22.6cmを計る無頸壺である。

器台（13）　器台の受部破片3点出土。図上復元すると、No.7遺跡北地区出土の装飾付の須恵器と同形態になる。

平瓶（6・9）　6は口径8cmを計り、長い筒状の口頸部が付く。9の体部上面に提梁をもつ。

提瓶（10）　長い口頸部に3条の凹線がめぐる。体部背面にはヘラケズリが施され、肩に環状の耳が付く。

横瓶（14・15、第66図1）　A（1）は口径15.4cm、器高32.4cmを計る。短く外反したL口頸部に、外傾し肥厚した口縁端部が付く。B（14）は短く外反したL口頸部に1条の凹線をめぐらせる。口縁端部は内傾し、稜をもつ。

甕（第65図11、第66図4・5・7～11、第67図1～10）　A_1（第65図11、第66図8・9、第67図8）口頸部が直線的に外上方にのび、1～2条の凹線がめぐる。11には底径21.2cmの脚部が、第67図8の肩には4個の耳が付く。A_2（第66図4・5・7）口頸部は短く外反し、口縁部は肥厚する。口径21.2～30.8cmのものがある。A_3（第66図10・11、第67図1）口頸部は極端に短い。B（第67図2～7・9・10）は口頸部が大きく外反するものである。

土師器（第68図、図版第26の7～9）

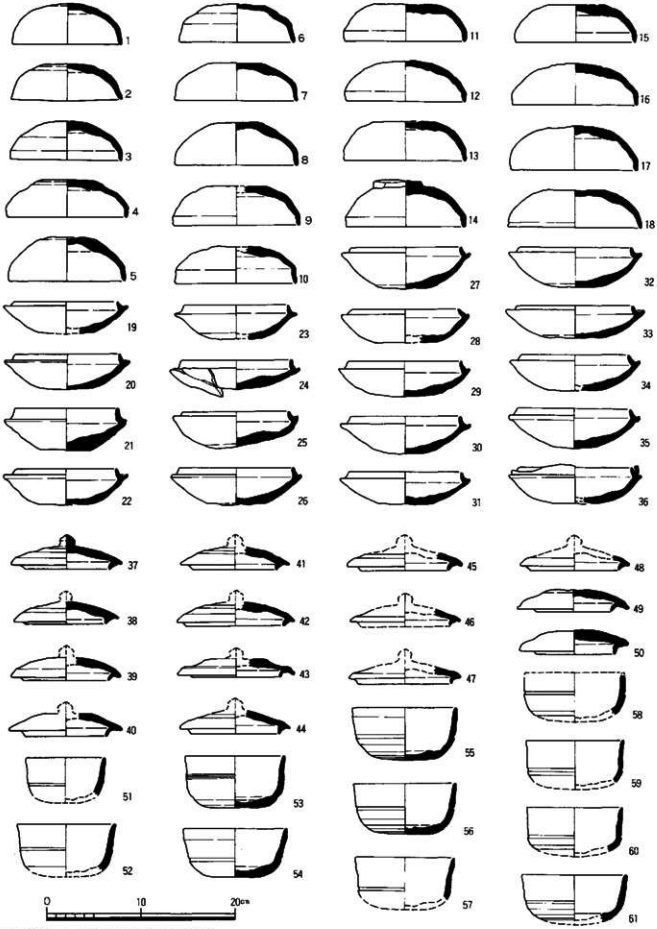
壺（1）　1は口径13cmを計る壺の口頸部であろう。外面に縦方向、内面に横方向のハケ目を施す。

甕　（2～10）　A_1（3・7・10）頸部が「く」字状に折れまがるもので口径18～23cmを計る。A_2（2・4～6・8・9）は口頸部がなだらかに折れまがるもの。B（4）は口頸部が短く、内面はヘラケズリを施す。

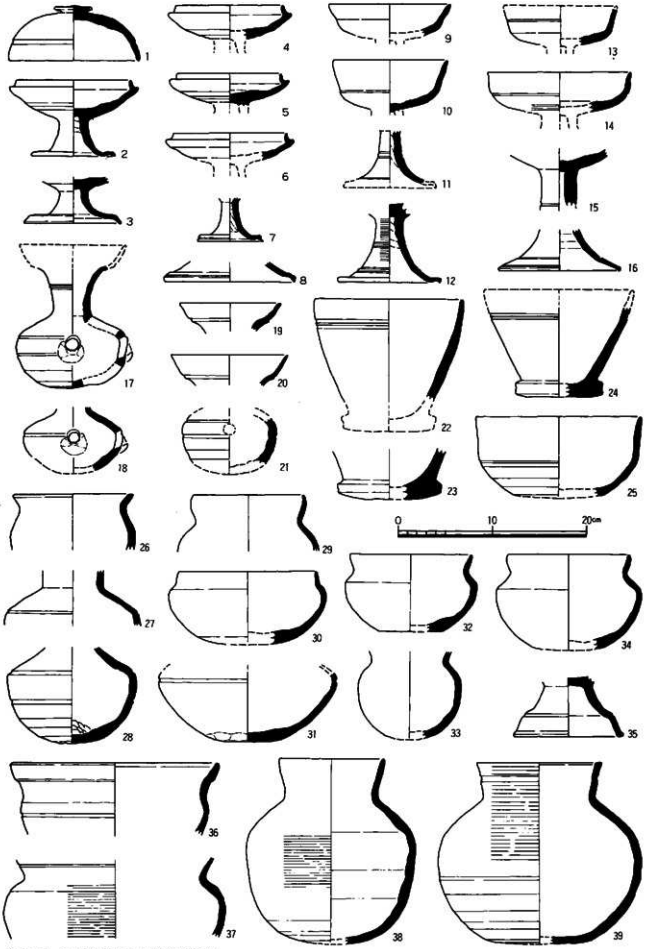
支脚（14・15）　15は完形品で長さ10.8cm、直径3.6cmを計る。表面には櫛状工具による調整がみられる。

紡錘車（21～24）　21～23は須恵質、24は石製である。

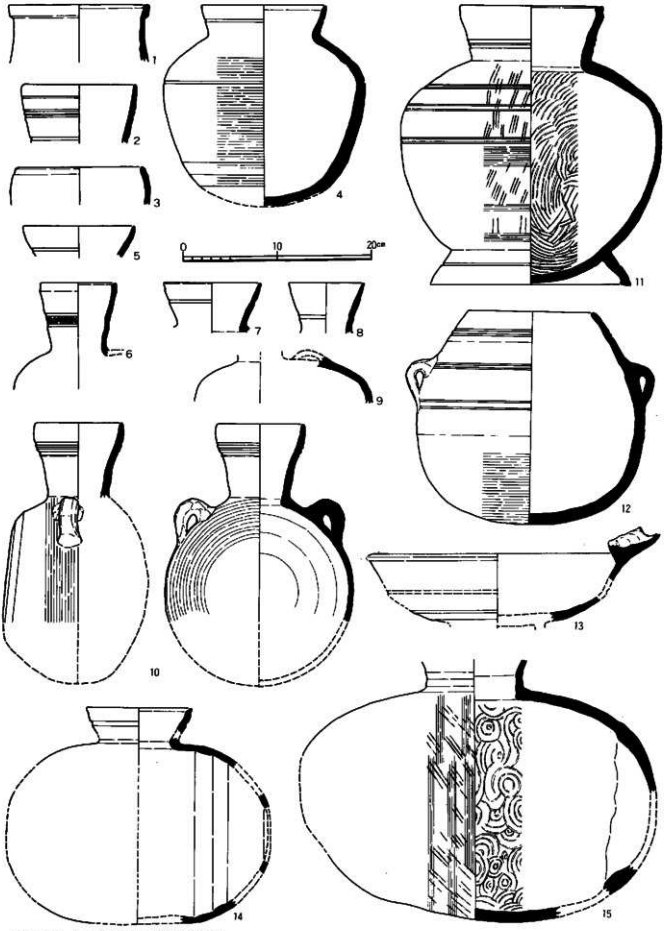
鉄器（16～20）　鎌16は基部を欠き、棒状鉄器が付着する。17・18は鉄釘、19は整頭式の鎌で鎌身長4.7cm、最大幅1.7cmを計る。20は断面長方形を呈し、一方に折り曲げが認められ、鏃であろうか。



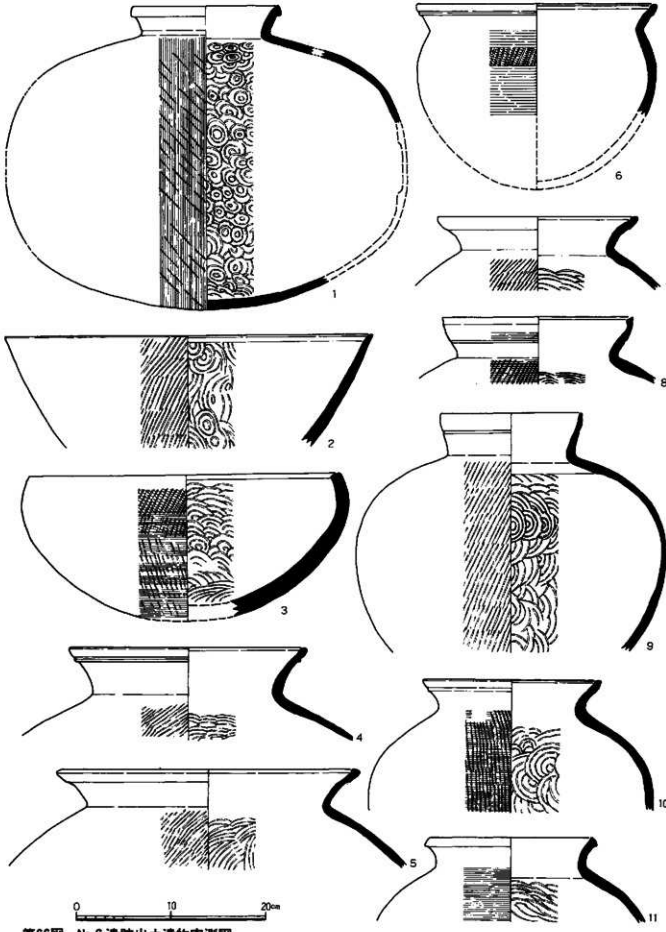
第63図　No. 6 遺跡出土遺物実測図



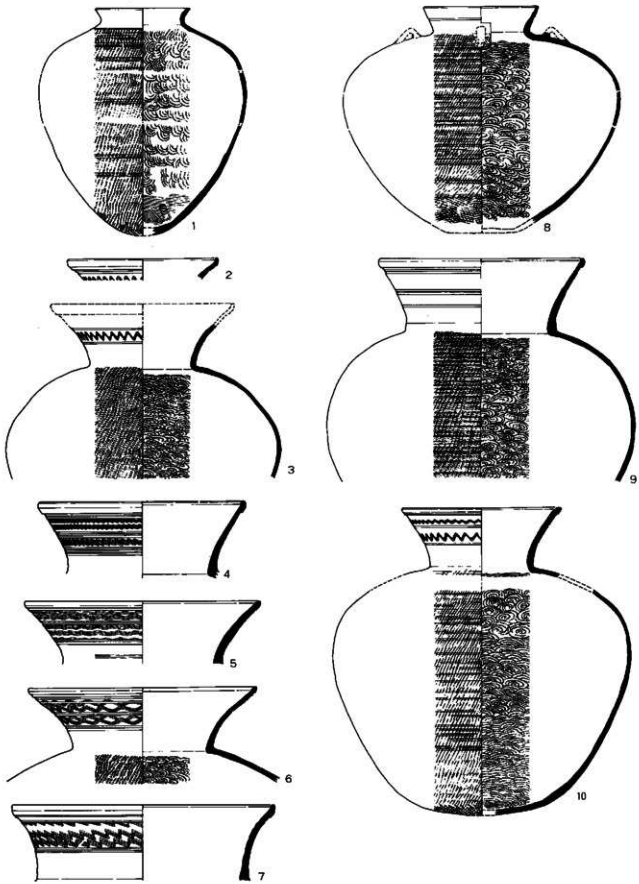
第64図　No.6 遺跡出土遺物実測図



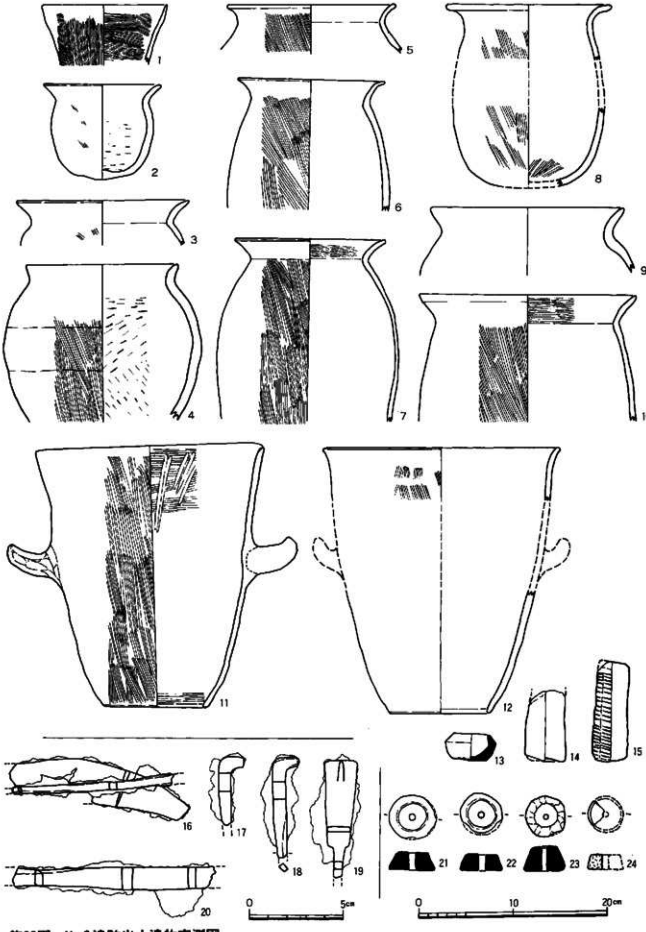
第65図　No. 6 遺跡出土遺物実測図



第66図　No. 6 遺跡出土遺物実測図



第67図　No. 6 遺跡出土遺物実測図



第68図　No.6遺跡出土遺物実測図

(4) 奈良～平安時代

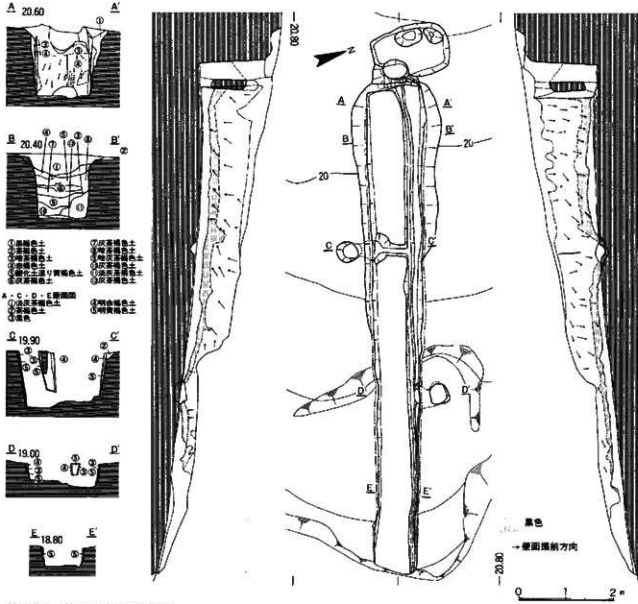
第１号窯跡（第69図、図版第25の３）

第１号炭焼窯跡は遺跡の北東端に位置し、前庭部・焚口を欠く。

焼成部の床面全長10.3m、幅は手前で85cm、奥で1.05mを測り、長軸N－71°－Wにとる。標高は手前で17.9m、奥で20.8mを測り、90cmの比高差をもつ。また、床面は約12度の傾斜をもって登り、徐々に傾斜を緩め、平坦に近くなる。さらに奥壁近くでは弓なり状に反る。排水溝は奥の煙り出し底面から出て、床面北側隅を通り前庭部方向へ延びる。規模は幅13～20cm、深さ４～８cmを測り、他の煙出し底面とも連なる。

側壁は床面から１～６度の傾斜をもって外方に立ちあがり、高さは手前で45cm、奥で1.35m残存し、直線的に連なる。壁面には工具痕を残し、方向は上から下、右上から左下が多い（断面図矢印）。また、工具は壁面のなめらかさ、工具痕の幅、長さをみると鋤状のものと推定される。壁面下部には黒色化した帯が認められ、焼成部横の煙出しに入り、再び現われる形状を示す（断面スクリーントーン）。この黒色帯以下の壁面は、強い熱を受けた痕跡に乏しい。

煙出しは焼成部右側、左側、奥の３ヶ所に認められる。床面からは半円形の窓で連なり、底面は床面より一段低く構築される。焼成部と煙出しの間の壁は右側のものは貼り付けで他は掘り抜きである。



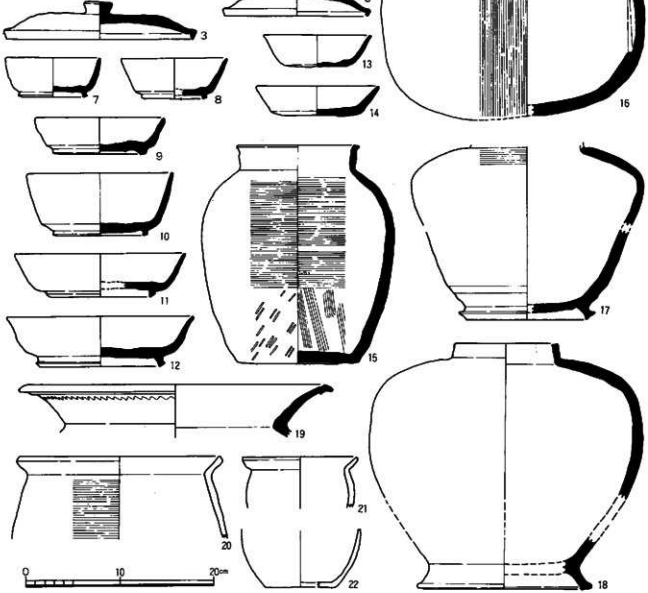
第69図　第１号窯跡実測図

奈良～平安時代の遺物（第70図、第26の16～19）

奈良～平安時代の明確な遺構は、第1号炭焼窯跡のみで、遺跡の大部分は、古墳時代の住居跡覆土上面より出土した。

杯蓋（1～6）3は口径19.8cmを計り、低く平らな天井部にはヘラケズリが施され、縁部は内方に下り、端部は鋭い。中央部には背の高い平らな擬宝珠のつまみが付く。2は口径18.1cmを計り、中央部には扁平な宝珠形のつまみが付く。笠形の天井部をもち、端部はやや鋭く、天井部内面とは明瞭な稜はもたない。

杯身（7～14）12は高台を有する杯で、口径19.8cmを計る。外底面にはヘラケズリを施し、高台は外方にふんばり、端面は外方にむく。体部は一旦内傾気味になって外上方にのびる。10は口径15.4cm、器高6.7cmを計る高台付杯で、体部は内傾気味に外上方にのび、端部は丸い。外底面にはヘラケズリを施し、ややふんばる高台が付く。（池野）



第70図　No.6遺跡出土遺物実測図

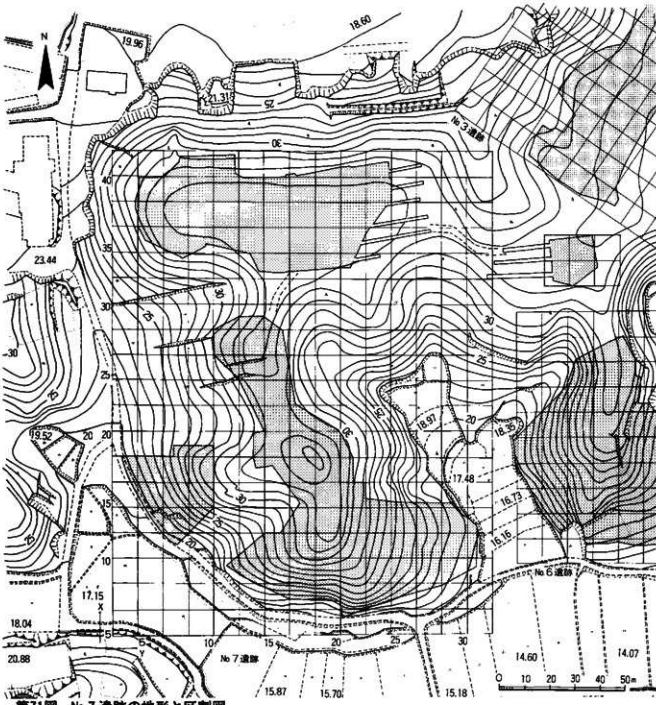
5　No.7遺跡北地区

(1)　調査の経緯と立地（第71・72図、図版第27の1）

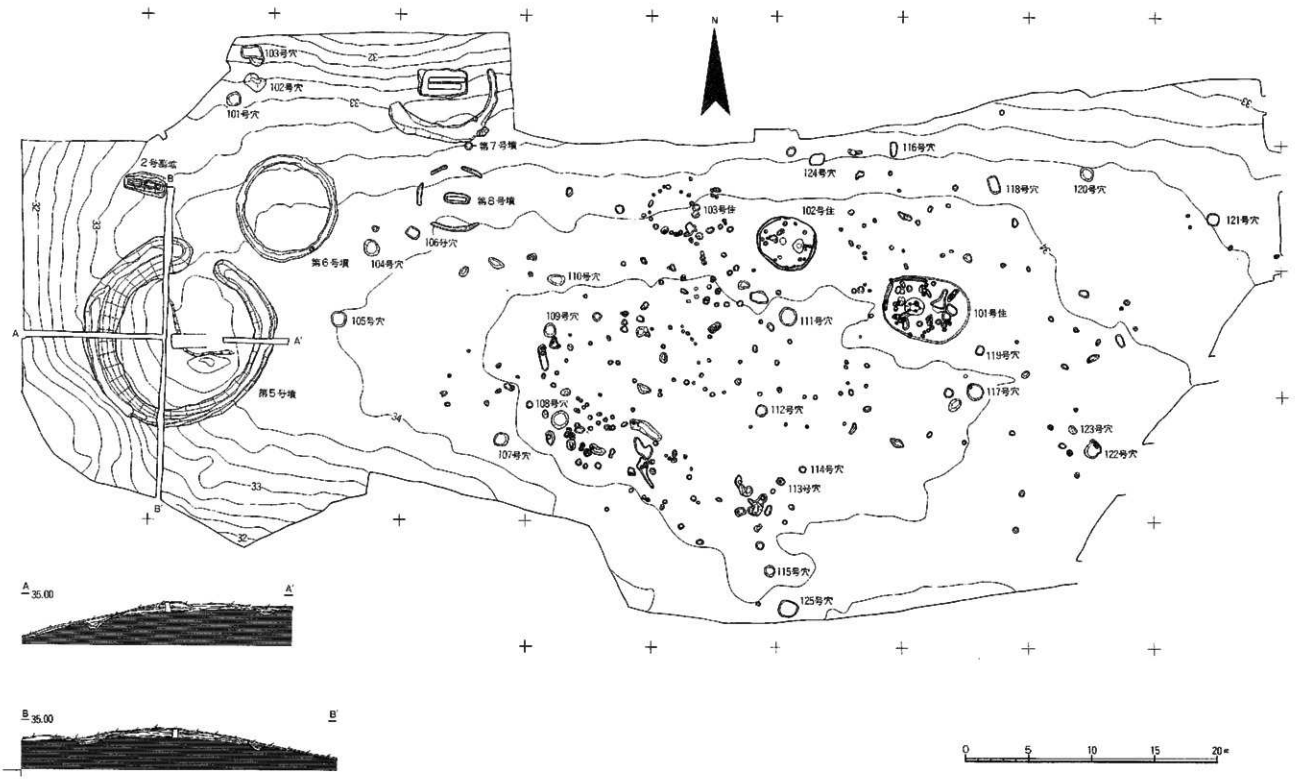
今回の調査区は、昭和55年度に本調査を実施したNo.7遺跡の北側部分にあたる。

当地区は平野部に接した丘陵上で、広く展望がひらける所である。丘陵上は標高34m前後を測る。東西に細長い丘陵上は平坦で、その東側尾根部が一旦くびれ、No.3・6遺跡の丘陵に連なる地形である。

調査の契機は昭和55年夏に実施したNo.3遺跡の古墳調査から、当地区にも古墳の存在が予想されたゝめ、同年11月急きょ試掘調査を行い、昭和56年度の本格的な発掘調査に至った。この結果、縄文時代中期前葉の住居跡3棟、穴多数、円墳4基、墓壙1基、その他、時代不明の穴で、周壁が熱により酸化するもの等々、試掘当初では予想もしなかった多数の遺構を検出した。



第71図　No.7遺跡の地形と区割図



第72図　No. 7 遺跡北地区遺構全体図

(2) 縄文時代

遺構

第101号住居跡（第73図、図版第27の2）

住居跡は丘陵中のほぼ中央部に設けられている。東側は風倒木痕〔能登　1974〕で切られ、遺存状況が悪い。

平面形態は、残存部から推定すると7.0m×5.1mの大きさの楕円形となる。住居跡の主軸方向はN－80°－Wである。主柱穴は床面からの掘り込みが30～60cmの深さをもつP_1～P_7と思われる。7本主柱ＸＹ型〔橋本　1976B〕の配列となる。

炉は住居跡中央部やや東寄りに位置した単設式地床炉である。焼土は床面より盛り上って検出され、固くしまりブロック状を呈する。

また、住居跡の主軸方向西側には、断面形が漏斗状を呈する穴をもつ。穴の大きさは1.5m×1.4mであり、底面近くには直径10～20cmの穴5個が更に間隔をおいて掘られる。

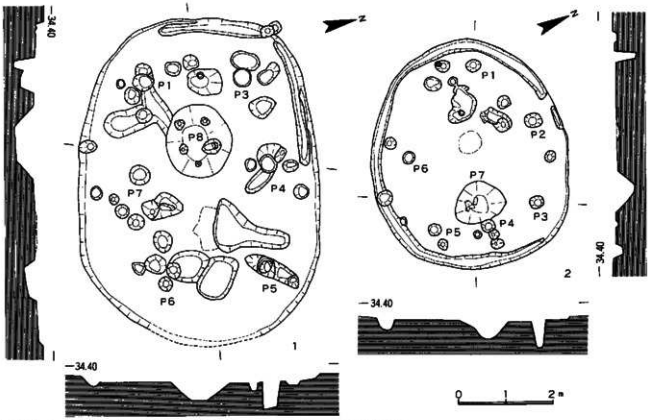
第102号住居跡（第73図、図版第27の3）

住居跡は第101号住居跡の北西側に位置し、その間は約6mの隔たりがある。

遺存状況は比較的良く、その規模は4.1×4.8mの大きさを測り、平面形態は楕円形となる。周壁溝は幅25cm前後である。住居跡の主軸方向はN－80°－Wで第101号住居跡の主軸とほぼ同一方向をとる。また、主軸上に位置すると炉と漏斗状の穴の配置は第101号住居跡に比べ逆の方向に配されている。

炉は単設式地床炉である。焼土の一部及びその南側は攪乱を受けるが炉の原位置は確認しえた。焼土のしまりは軟かい。柱穴はP_1～P_6が主柱穴であると思われる。床面からの深さは30～60cmを測る。

P_7は漏斗状に掘り込まれる。規模は1.0m×0.9mの大きさをもち、覆土から第75図14の土器と石が底面より浮き上った状態で出土している。住居跡の遺物出土状態は、吹上パターン〔小林　1968〕をとる。



第73図　第101・102号住居跡実測図　1.101号住居跡　2.102号住居跡

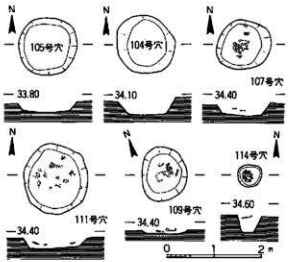
穴

直径1m前後の大きさをもつ穴は、9個を検出した。穴は丘陵上全体に点在する。

第104・105号穴は丘陵西側に位置する。規模は第104号穴が1.3m×1.2mで、深さ0.2mを測る。第105号穴は1.2m×1.1mで、深さ0.35mを測る。平面形は円形であり、覆土からは若干の土器が出た。

第107・109・111号穴は、直径が1.0～1.4m、深さ0.1～0.25mを測る。平面形はほぼ円形で、浅い皿状の掘り込みである。穴には土器・石が入り、底面より浮いた状態で出土した。

第114号穴は、直径が0.5m前後であり、隣接する113号穴出土の土器と接合する。いずれも土器は細片で穴の上面から底面までびっしり入る。



第74図　遺構実測図

出土遺物

縄文時代の遺物は、住居跡・穴の遺構内から出土したものと、遺構に伴わず点在して出土したものとがある。

第101号住居跡の土器（第75図11、第77図1～12）　深鉢形土器には、口縁部が単に外傾する第77図1・5・6があり、第77図3の口縁部内面には半截竹管を当て、沈線をもつ。また第77図2は波状口縁となる。2・3の口縁下には花弁の短い蓮花文様を配する。

浅鉢形土器の第75図11は、口縁部が強く屈曲し、口縁部と屈折部の間には、縦に短い半隆起線を引き、釣手状の突起を付ける。この口唇上には玉だき三叉文を彫る。第77図11は土器片を用いたメンコである。

第102号住居跡の土器（第75図4・9・14、第77図13～14）　深鉢形土器には、頸部から口縁部にかけての屈曲が強くて外反する第75図9と、胴部が円筒形となり、口縁部がわずかに外傾する第75図4の二形態がある。第75図4は器高が低く寸づまりの器形である。文様は無文帯に沿って、半隆起線を巡らせる。口唇部には突起を配し、この突起に対応して半隆起線を垂下させる。胴部は縦位の文様構成をなす。また、第75図9は口縁部内面に粘土帯を貼付けて隆帯とし、数は不明であるが、口唇部から∪の字状に隆帯を垂下させる。更に第77図14の口唇上には、山形の小突起4個を付ける。この他、第77図14にも突起が配され、突起の下方には、∪の字状の隆帯を付ける。

住居跡内からは、土製品のメンコ2個と、磨製石斧4点が検出された。内蛇紋岩製石斧片の1点は、側面に両面から擦り切りを行っている。

第103号住居跡（第75図7）　土器は深鉢形土器で、蓮花状文様及び横位の半隆起線文を引き、その下部は縦位の文様構成を行う。半隆起線区画内は、正位格子目文で埋める。

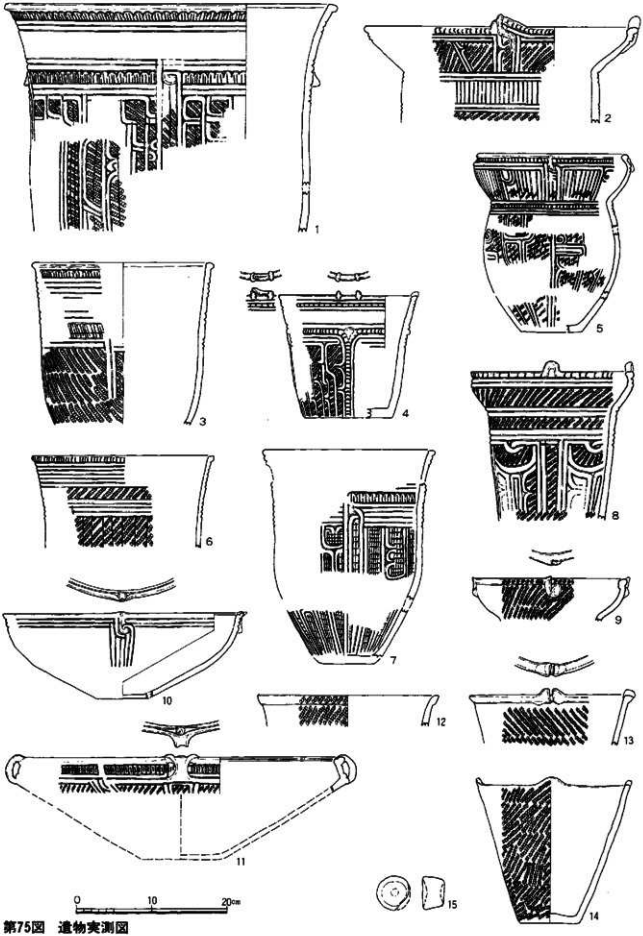
第113・114号穴（第75図1・6・13）　穴出土の土器は、互に接合する。第75図1は口縁部内面に半截竹管を当てる。器面の施文は、頸部に引かれた4条の半隆起線と花弁の短い蓮花状文で、横位の口辺部文様を施す。胴部文様帯は、縦位の文様をとる。蓮花状文の間には、L字状の短い隆帯を土器の一周に4個配置すると思われる。

その他、穴に伴出した土器は第75図7・8・39があり、他は遺構に伴わない。

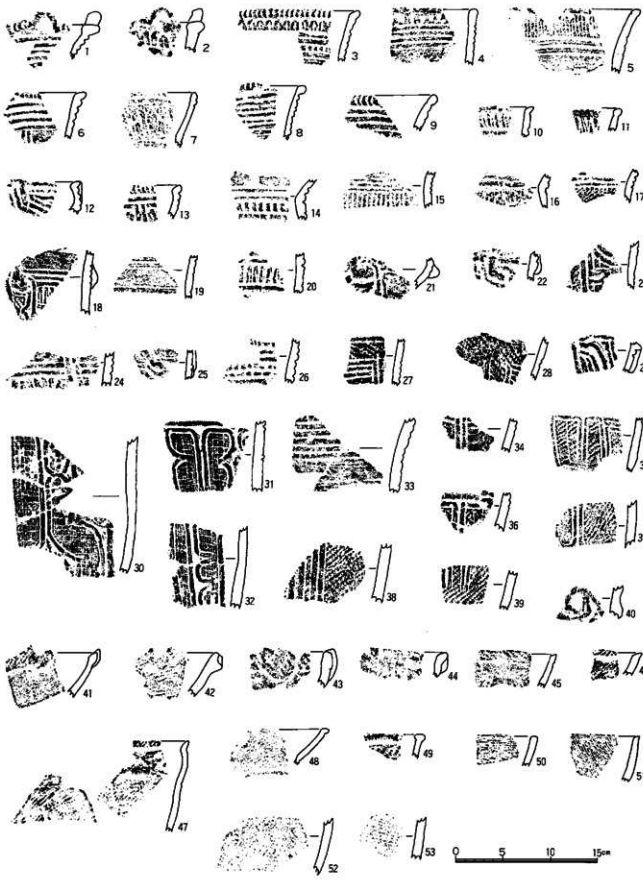
第75図2は口縁部が外傾し、口唇部に突起を付ける。突起からは半隆起線・Lの字状の隆帯を垂下させる。頸部上部と下部の2条の半隆起線文間には、縦の半隆起線を密に引く。

第75図は、キャリパー状の口縁部と丸くふくらむ胴部をもつ深鉢形土器である。口縁下及び胴部は半隆起線を縦に垂下させて尾部を渦巻かせる。また第75図8は、口唇上にボタン状突起を付け、突起は中凹みとする。

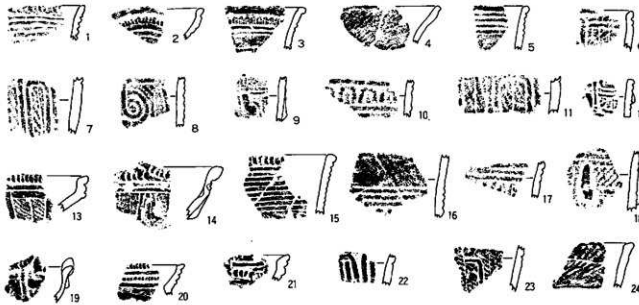
第76図41～45は、口縁部に粘土帯を貼り付け隆帯とする。42は内面の口縁部に縄文を施し、外面は中凹みの隆帯を



第75図　遺物実測図


1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
21
22
23
24
25
26
27
28
29
30
31
33
34
35
36
37
32
38
39
40
41
42
43
44
45
46
47
48
49
50
51
52
53
0
5
10
15cm

第76図　遺物拓影図(¾)



第77図　遺物拓影図（1/4）　1～12.第101号住居跡、13～24.第102号住居跡

付ける。41は口縁下に縦２条を、47は頸部に１条の各々縄文を押圧し、また52は縦位の羽状縄文を施文する。

石器には、短冊形の打製石斧、縦断面形が蛤刃形の磨製石斧、礫の長軸を打ち欠いた石錘、長楕円形の一面に磨面をもつ擦石、横形の石匙などがある。

また黒曜石には、剥片と円礫（１点）がある。剥片中には石材に白い斑点が入り不透明な黒曜石と思われるもの１点が出土している。　（上野）

(3)　古墳群（第72図）

昨年調査した南々東方向に延びる台地の北側基部にあたり、南側より第５・６・８・７号墳と呼ぶ。従って、No.７遺跡古墳群は８基で構成されたことになる。

第５号墳（図版27の６、28の１）

第５号墳は谷奥に延びる台地基部に位置し、平野部の眺望は最も良い。現墳頂部の標高は34.67ｍを測る。

墳丘封土は西側斜面に沿って流失した状況を呈し、南東隅が最も高い。さらに、北東側４分の１は削平を受けるなど、全般的に遺存状態は良くない。

封土は東西幅9.7ｍ、南北幅8.4ｍ、最も厚い部分で20cmを測る。盛土方法は、旧表土層上に直接盛るが、構築順序は下から上へと版築状に行う単純な方法である。厚さは、標高の低い西側部分に厚く、東側に薄い盛土で墳丘整形を行う。

周溝は円形に廻るが、北々東部分に幅２ｍの規模をもつ陸橋部を設ける。周溝の断面形態は逆台形を呈し、幅1.3～3.0ｍ、外周高は30～40cmを測る。底面の標高は東側で33.40ｍ、西側で31.10ｍを測り、2.30ｍの比高差をもつ。

第５号墳は外周径15ｍ、周溝底面から現墳頂部までの最大高3.75ｍを測る円墳である。

出土遺物には、封土層上で破砕されたと推定される須恵器甕、南西側周溝内より土師器杯、主体部上の撹乱層からの鉄鏃がある。

埋葬施設

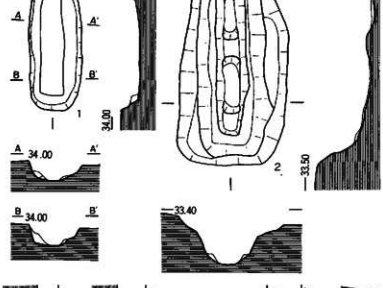
埋葬施設は墳頂中央部で一部分痕跡のみ確認されたが、大部分は削平のため消失している。検出した墓坑は南西端のみで、規模は幅1.3ｍ、長さ85cmを測る。長軸をＮ－75°－Ｅに取り、軸は陸橋部方向と一致しない。この墓坑内に納められた木棺の形状は、明らかでない。

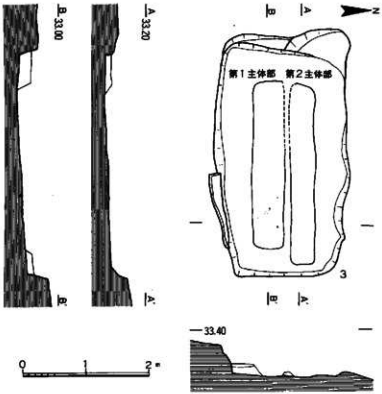
出土遺物（第79図１・３・５～14、図版第28の５・７）

須恵器壺（１）　破片総数はかなりの量になるが細片が多いため復元できなかった。従って図上復元によると、口径22cmの中型の壺になる。朝顔形に外反した口頸部で、断面三角形の凸帯を１条めぐらす。その下に櫛描波状文を施す。肩の張る体部外面に平行タタキ目を残し、内面は同心円文を消す。焼成はあまい。

土師器杯（３）　口径15cmを計り、底部からなめらかに外反し、口縁端部は内傾する。

鉄鏃（５～14）　すべて片刃の尖根式鉄鏃で、関の部分に小さな逆刺をもつ。９・10は篦被から篦代に連なる関の部分で、10には樹皮を巻いた痕跡を残す。長頸柳葉式に属すると推定される鉄鏃15は、当墳削平土層中より出土し、主体部に伴った遺物の可能性が強い。





第78図　主体部実測図　1.第８号墳　2.第２号墓坑　3.第７号墳

第６号墳

第６号墳は、第５号墳の北東２ｍの距離に位置し、墳丘は削平を受け、周溝を残すのみである。

周溝は円形に全周し、幅50～70cm、深さ20cmを測る。当墳は外周径8.5ｍの規模をもつ円墳である。

出土遺物には、周溝南西部側から出土した須恵器有蓋高杯・土師器壺がある。

出土遺物（第79図２・４、図版第28の４・６）

須恵器高杯（２）　口径10.8cmで、口縁部は内傾し、端部は垂直に近い。底部には順まわりのヘラケズリを施し、長方形の透し痕跡が３方向にみられる。脚部は接合部分で欠失している。接合部分には螺旋状の刻みをつけて、接合を容易にしている。

土師器壺（４）　口縁部は直線的に外反し、頸部は「く」字状に折れ、体部は球形に近い。

調整は外面にヘラ磨き、内面にはハケ目を施す。

第８号墳

第８号墳は第６号墳の東側６ｍの距離に位置する。

墳丘、封土は既に削平を受けて消失し、周溝の一部及び主体部を検出した。周溝は地山層への掘り込みは浅く、部分的に途切れる。しかし、元来は円形に全周していたと推定さ

れ、規模は幅25～40cm、深さ4～8cmを測る。第8号墳は外周径5.3mの円墳である。

埋葬施設（第78図1）

墳丘中央部より墓坑を検出した。形状は長方形を呈し、長さ2m、幅80cmの規模で地山層中に掘り込まれる。棺はやや南側寄りに置かれ、長さ1.57m、幅36cmを測る割竹形木棺である。棺の長軸はN－82°－Wに取る。

第7号墳（図版第28の2）

第7号墳は北側斜面上に位置し、墳丘は流失して痕跡をとどめない。また、墓坑内覆土上面にもかなりの厚さで黒褐色土層が堆積していた。周溝は山寄りに認められ、幅0.4～1m、最も深い場所で30cmを測る。第7号墳は外周径約9m前後の円墳であろう。

埋葬施設（第78図3）

墳丘中央部で等高線に平行した墓坑を確認した。長方形に掘り込まれた墓坑の規模は長さ3.5m、幅約2.2mを測る。墓坑内中央に並列して2棺が埋葬され、間隔は約10cmである。南側を第1、北側を第2主体部と呼ぶ。

第1主体部　第1主体部は長さ2.65m、幅50cmを測る割竹形木棺である。長軸をN－90°－Eに取る。棺内からは中央部から東寄りにかけて、ガラス玉、臼玉が出土した。出土レベルは棺底に近く、被葬者は東頭位で埋葬されたものであろう。

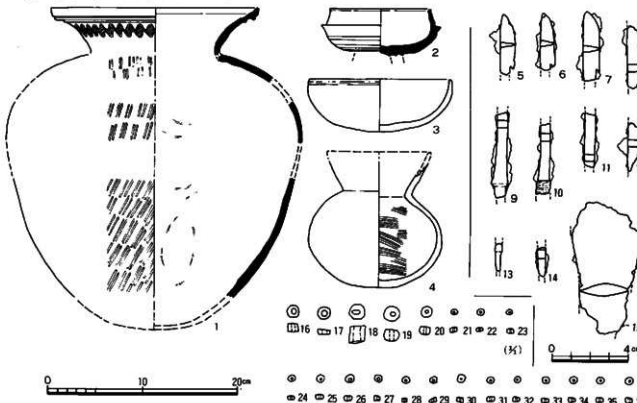
出土遺物（第79図16～36、図版第28の8）

ガラス玉（18～36）　ガラス玉総数142個、総延長は18cmになる。大きさは4種認められるが、直径1.6～2.6mm、厚さ1.1～1.4mmの極小の玉が大部分を占める。色調は、淡い青緑・濃い青緑・紫褐色がある。

臼玉（16・17）　滑石製の臼玉2個出土した。管状のもの、臼状のもので、直径3.0～3.65mm、厚さ1.4～2.2mmを計る。

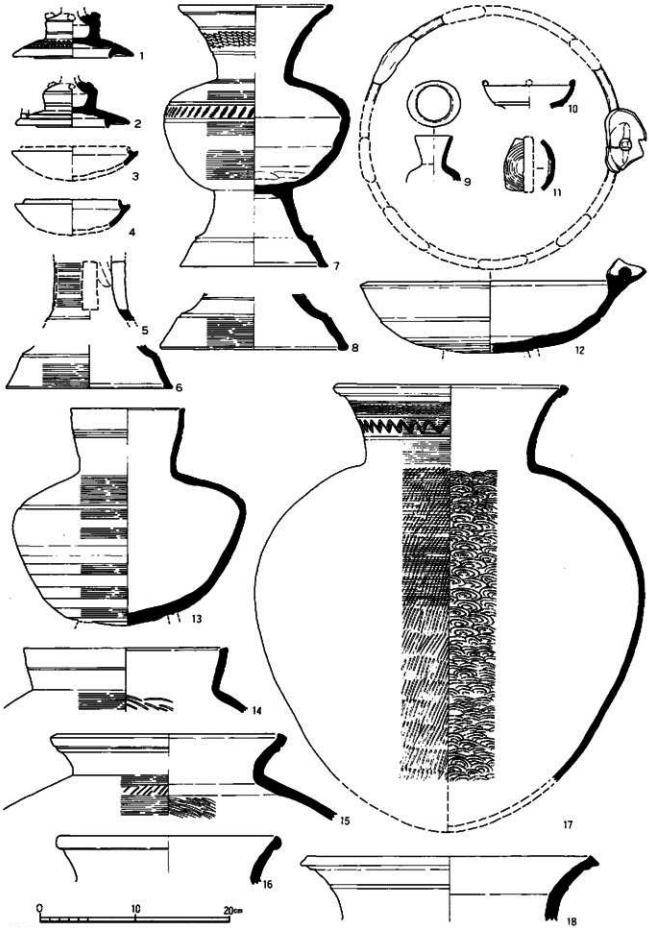
第2主体部　第2主体部は長さ約2.8m、幅約40cmを測る割竹形木棺である。棺内からの出土遺物は無い。

第2号墓坑（第78図2、図版28の3）



第79図　古墳出土遺物実測図

1・3・5－14．第5号墳　2・4．第6号墳　16～36．第7号墳第1主体部



第80図　台地上出土遺物実測図　17（1/6）

第２号墓址は第５号墳の北北東３ｍの距離に位置する。周溝及び墳丘は認められない。墳丘は削平の可能性をもつが、墓址の深さを考慮すると無墳丘墓の可能性が強い。たとえ墳丘が存在したとしても小規模なものであろう。

墓址は長さ3.4ｍ、幅約１ｍ、深さ約80cmの規模を測り、その中には、長さ約2.6ｍ、幅50cmの割竹形木棺が置かれ、長軸をＮ－72°－Ｗにとる。棺内からの出土遺物は無い。（池野）

(4) 台地上の遺物（第80図、図版第28の９～15）

台地上からは、遺構を伴わない古墳時代後期の須恵器・土師器と中世の珠洲の出土があった。

１～２・５～12は、第５号墳周溝外の南東と東の２ヶ所よりまとまって検出された。１～２・９～12は装飾付の須恵器である。

１・２は壺蓋で、内面にかえりをもち、天井部外面には中空の円筒部を付けてつまみとする。つまみ頂部は接合面で欠けている。このつまみ外面には、小玉を付ける。１には５個の小玉をほぼ等間隔に配し、小玉は２個が現存し、残り３個はなく、痕跡として器面にみられる。２は欠損部が多く、現存するつまみ上面には、小玉１個だけで、全体の玉数は不明である。また２は天井部外面に施文される２条の沈線間へ別個体を接合し、器面を飾ったと思われる。その残片が器面に付いている。更にこの部分の左側７cmのところにも、２条の凹線間に小さな中凹みの剥離面がみられ、ここにも蓋とは別のものを配置した可能性がある。１は天井部外面に２条の凹線を引き、ここへ櫛状施文具により羽状の刺突文をめぐらせる。

７は脚付きの広口壺で、朝顔形に大きく開いた口頸部を付ける。口縁部の1/4の部分は焼き歪みにより下方に折れ曲る。体部外面はヨコナデ・カキ目調整を行う。体部張り出し部には櫛状工具による刺突を連続して加え、口頸部には波状文を施文する。脚部の端部は肥厚し幅広く、生焼けの状態である。６・８の脚部は７の脚部と同形態であり、また５・８には透しの切り込みがみられる。

９は口径4.0cmの小型の壺で、体部内外面にヨコナデを行う。体部の横断面は楕円形を呈する。10は口径9.6cmを計る鉢が、口縁部内外面にヨコナデを行い、口縁端部には小玉を付ける。11は体部外面にカキ目を加え、内面にヨコナデを行う。内面には直径1.8cmの閉塞用円板を横したものを付け、この側面は透しの切り込み面がみられる。器種は不明であるが、提瓶もしくは横瓶が考えられる。

12は口径28cmを計る器台の受部である。口縁端部を肥厚させ、受部の屈曲部に１条の凹線を引く。底面はヘラケズリを行う。口縁部上には小型の土器７個を配置したと推定される。現存する土器は器形が不明であり、横断面が扁平となり、底部内面に小玉１個を置く。

一方、３・13・15・17はＸ40Ｙ21付近より集中して出土した。13は脚付壺であり、底面に３ヶ所の透し穴痕をみる。17の壺は口縁部から体部の約半分が生焼けの状態である。

中世の珠洲は甕体部片で、台地中央の２ヶ所から出土した。

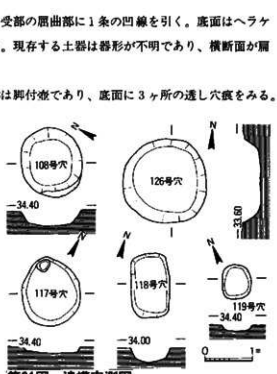
穴（第81図）

所属時期が不明で、周壁の焼けた穴は13個を数え、台地上全体に点在する。

穴の平面形には円形と方形があり、大きさは１ｍ前後の規模を有し、穴の底面には炭化物を多く含む層がみられる。

第126号穴は、直径1.8ｍ、深さ0.4ｍを測る。覆土上面は黒褐色土で、下部は炭化物・焼土粒を多く含む茶褐色土が入る。

第118号穴は、1.4ｍ×0.8ｍの隅円長方形の平面形を呈し、現地山面からの深さ0.3ｍを測る。（上野）



第81図　遺構実測図

V　各遺跡のまとめ

No.3遺跡古墳群について

No.3遺跡古墳群は円墳9基で構成される。古墳群は平野に面した台地上に位置し、古墳からの眺望は全て良い。

占地状況は最も高い位置に第2・5号墳があるが、各古墳は約1.5mの標高差の中に包括される。また、第1号と第2号、第3号と第4号、第5号と第6号が近接して構築され、小グループを作る。第7・8・9号墳は小グループを構成せず、特に第8号墳は、群からやや離れて位置する。

古墳の規模は最大のもので直径が11.9m、最小のもので6.4mである。このうち、6.4～8.9mクラスと10.3～11.9mクラスに一応別けられるが、古墳規模と出土遺物の比較は、主体部が大部分消失しており、不可能である。遺存する第7号墳と第9号墳棺内遺物を比較すると、小規模な古墳である第7号墳が優る。

埋葬施設は削平を受けて消失しているものも多いが、2基から2棺検出した。割竹形木棺を採用し、古墳規模と木棺規模は符合する。検出された2棺は全て地山層中に掘り込まれている。

出土遺物には、土器・玉・滑石製品・鉄器があり、第7号墳以外は全て周溝内出土である。

土器には須恵器・土師器があり、須恵器は第2・9号墳から、土師器は第2・4・6・7号墳から検出された。

玉は、第7号墳から碧玉製管玉、蛇紋岩製小玉各1個出土した。

滑石製品には、紡錘車・有孔円板があり、第1号墳から紡錘車、第4号墳から有孔円板各1個出土した。

鉄器には刀子・鉄鏃があり、刀子は第7号墳から、鉄鏃は第9号墳から検出した。

以上が古墳群出土の遺物であるが、最も出土量の多い須恵器から築造時期を考えてみたい。第2号墳からは杯蓋・杯身・無蓋高杯・広口壺がある。杯蓋は大型化し、杯身と共に口縁端面は内傾に傾斜し、シャープさに欠ける。ヘラケズりは粗く、方向は順・逆まわりである。無蓋高杯は杯部が浅く、脚部には長脚化の傾向がみられる。また、第9号墳の杯身の口縁端部は内傾し、内側は浅く凹む。

滑石製品は4世紀末頃から現われ、5世紀代を中心とし一部6世紀にも入る。

鉄鏃の形態は5世紀中頃以降に現われ、長期間使用される〔小林　1975〕。

以上、出土遺物の時期を簡単に推測したが、出土須恵器は森　浩一氏の須恵器編年〔森　1958〕のII期、陶邑の編年では、TK47、MT15型式〔田辺　1981〕に相当し、6世紀初頭を中心にした年代が考えられる。各古墳の築造順序は明らかにできなかったが、短期間に築造された古墳群であると考えておきたい。被葬者層については、後述するNo.7遺跡古墳群の被葬者と同様に考えている。　（池野）

No.6遺跡について

遺跡からは、古墳時代後期の住居跡・建物計14棟と溝・穴多数を検出した。

住居跡の床面・建物の標高は、12棟が18.5～20.5mの高さに集中し、残り2棟はその上方約22.5mと下方約17mの高さに位置する。この遺跡の遺構配置は、丘陵中腹のほぼ水平面に沿って行われ、集落内では一定の規制のもとに構築されていたことがうかがわれる。

住居跡・建物は斜面側が流失しており、平面形態・柱穴の確認など不明確であるが、一応3類に分類した。

A類は、平面形態が隅丸方形で、外周に溝をめぐらせる竪穴住居である。第1～3・9・12・14号住居跡は丘陵斜面に間隔をおいて配置され、A類間の切り合いはない。床面中央には、屋内炉をもつ。A類は推定床面積が約36m²（第1・12号住居跡）のAI類と、約20m²以下のAII類に二分される。AI類は4本主柱で、柱穴も深く大きい。また外周の溝も深く掘り込まれる。一方AII類は主柱穴が不明確で浅い。また外周の溝は浅く掘られるものが多い。

B類は平面形態が隅丸方形で、外周に溝を有しない竪穴住居と思われる。第4・5・8・9・13号住居跡は切り合い関

係をもつ例が多く、遺構の遺存の悪さにより、屋内炉はみられない。推定床面積は第５号住居跡を除いて、約20m²以下の小規模なものである。

C類は、掘立柱建物と考えたい。全体の規模は不明であり、柱間は４間の例（第６・10号住居跡）と１×１間が存在する。

さて遺物は、杓鍾車各１点が第２・12号に伴う。鉄器は第１号住居跡の覆土から鉄鏃が、他は第10号穴内および付近からの出土で、武器と農具がみられる。須恵器では杯身・杯蓋Bが十数個体の組合せをもち、その出土は東側斜面の第５・６号住居跡・建物と第１号穴の下方斜面から谷底にかけての限定された範囲内からで多くの杯身・杯蓋Aと共伴した。

また製塩土器は、吹上パターン〔小林　1968〕をとる第３号住居跡の覆土と第１号穴から検出されている。

これら住居跡・建物は各々に性格・役割が異なっていたとみられ、立地、遺構の切り合い関係等から少なくとも２期に区分される。なお、一時期における集落規模は、さほど大きくなく、多くて数棟前後の同時存在が考えられる。

出土した古墳時代の須恵器は、杯A（身・蓋約300点）と少量の杯Bの２形態がある。

杯Aは、№７遺跡の須恵器窯跡の杯と法量・形態・調整が類似し、ほぼ同時期に生産され、集落にもたらされたものと思われる。同種の杯Bは、窯跡から出土していない。しかし別の窯跡から集落内に供給され、第５・６号住居跡の存在時に一定期間杯Aと併用して使われた公算が大きい。杯身Bは外底面にヘラキリ痕をもった、１例が西側谷部より出土しており、他に１例が検出されている。また有蓋高杯の脚部の形態は、陶邑古窯跡群のＴＫ209〔田辺　1966〕に近い。飛鳥・藤原宮の調査成果〔西　1978〕に対比すれば、杯A・B形態は飛鳥第Ⅰ期の段階に最も類似する。実年代は、須恵器窯跡とほぼ同様に、６世紀末から７世紀初頭にあたると考える。

奈良時代以降の遺物は、時期幅をもつ。第70図12は７世紀末から８世紀初頭頃、他の多くは８世紀中頃から一部平安時代に入るものも含まれる。炭焼窯跡出土の杯身（第70図14）も同様の時期幅をみておきたい。　（上野）

№７遺跡古墳群について

№７遺跡古墳群は８基で構成され、全て円墳である。他に封土をもたない墓坑２基がある。

占地状況は平野に面する台地基部に位置する第５～８号墳の眺望が良く、第１～４号墳は悪い。このことは、№17遺跡第１号墳にも当てはまるが、当遺跡の場合、第８号墳東側にかなりの構築スペースを有する。にもかかわらず、第７号墳は斜面に構築し、周溝は高所のみで斜面下方は盛土だけのものになり、何らかの規制があったと推定される。

周溝を含めた古墳の規模は、数大のもので直径が19m、最小のものが5.3mである。この内訳は15～19mのもの４基、10m未満のもの４基で構成される。また、現状は10m台の古墳は墳丘を残すが、10m未満の古墳はすべて削平されている。このことから、10m未満の古墳の墳丘は、棺を被覆するだけの封土しかもたなかったものと思われる。古墳の規模が被葬者の身分を表わすものとすれば、出土遺物に差が現れるものと思われるが、当遺跡の場合、全般に出土遺物が貧弱なため明確でない。

周溝は全周を基本とするが、第５号墳は陸橋部を設ける。県内では、周溝墓・古墳の調査例に乏しいが、富山市杉谷Ａ遺跡〔藤田　1975〕に例がある。杉谷Ａ遺跡の場合は円形周溝墓で、出土遺物には古式土師器がある。

埋葬施設は４基から７棺検出され、全て木棺直葬墓である。また、木棺は検出されなかったが推定されるもの（第５号墳・第１墓坑）２棺、墓坑の１棺がある。木棺の形式は割竹形木棺６、箱形木棺２基を数え割竹形木棺が多い。なお、複数の内部主体部をもつ古墳は４基中３基にのぼる。第７号墳は同一墓坑内に２棺納められ同時埋葬である。また、第２号墳は両主体部ともに箱形木棺、第３号墳は、両主体部ともに割竹形木棺で同一形式を取る。さらに、両主体部の長軸方向が若干ずれることは、前後関係をもつものかなり近接した埋葬時期と考えられる。木棺の規模は長さ1.57～3.6mのものが認められ、２m台が一般的である。

墳丘をもたなかったと推定される墓坑は２基検出した。第２号墓坑は割竹形木棺が置かれ、副葬品は無いが規模は

有丘墳主体部と遜色ない。

出土遺物には、土器・玉・鉄器がある。

土器には須恵器・土師器があり、第5・6号墳より各2個体検出した。第5号墳の須恵器甕は、墓上祭祀に供された遺物で、他は周溝内出土である。

玉類には臼玉・ガラス玉がある。臼玉は3古墳4主体部より検出した。特別量の多いのが第2号墳第1主体部で、315個を数え、他は2－10個である。ガラス玉は第7号墳第1主体部のみで142個になり、当主体部だけ2種類の玉をもつ。

鉄器には鉄鏃・鍬先・刀子がある。鉄鏃は第5号墳主体部上の撹乱層中から、片刃の尖根式鉄鏃が出土した。鍬先・刀子は、第2号墳第1主体部より検出した。また、3古墳3主体部からの出土遺物はない。

以上の如く、出土遺物は、バラエティー・数量共に貧弱な状態である。この中で、玉類が目立った存在であり、刀・剣類は全く含まれない。

古墳築造時期の目安になる遺物は少ないが、その中で須恵器が最も手がかりとなろう。第5号墳出土甕の外面は平行タタキ目で内面スリ消しが行われ、陶邑古窯跡群のＴＫ208型式〔田辺　1966〕に相当する。また、第6号墳の有蓋高杯は丁寧な順まわりのヘラケズリをし、3方向の透しを有する。これらの特徴をもつ遺物の時期は、第6号墳甕と同時期ないしやや新しいと思われる。

臼玉は、ソロバン玉状のものが中期前半から中頃、臼状のものが中期後半から後期初頭〔伊藤・一瀬　1978〕にかけてみられ、当遺跡の場合両形状のものが含まれる。

ガラス玉は、弥生時代からみられるが、5世紀末頃から各種の色調を呈するガラス製小玉が出現する〔三木・小林　1959〕。第7号墳の場合は、淡青色を基調にコバルトを含んだ紫紺色が数点みられる。

鉄製鍬先の使用期間は弥生時代中期末から5世紀中頃までで、5世紀中葉以降「U」字状鍬先に変る〔都出　1967〕。

以上、出土遺物の所属時期を列記したが、須恵器を除いて時期幅が大きい。従って、各古墳の時期・構築順序は決定できなかったが、5世紀後半を中心に短期間に構築された古墳群と考えられる。

古墳の規模・出土遺物をみると本古墳群は、中、小規模の2グループを含んだ、初期群集墳として、とらえることが可能であろう。また、被葬者は家長と呼ぶべき、古墳造営可能な小単位の長ではなかろうか。そして複数の主体部をもつ古墳の中に、一方の主体部が無遺物である例が多いのは家長の類縁者が被葬されたものではなかろうか。

古墳番号	墳形	最大規模	最大高	封土	周溝幅	墓壙規模	棺形式	棺規模	出土遺跡
1	円	17.5	1.8	0.15	1.3~1.7				
2	円	18.3	1.8	0.4		2.35×0.8	箱形	1.85×0.8	臼玉・刀子・鉄製鍬先
						2.9×1.1	箱形	2.4×0.55	臼玉
3	円	19	2.6	0.2		3.8×1.7	割竹	3.6×0.6	
						3.75×1.3	割竹	3.45×0.55	臼玉
4	円	6.7			0.4~0.8				
5	円	15	3.75	0.2	1.3~3	×1.3			須恵器・土師器・鉄鏃
6	円	8.5			0.5~0.7				須恵器・土師器
7	円	9			0.4~1.3	3.5×2.2	割竹	2.6×0.5	ガラス玉・臼玉
							割竹	2.8×0.4	
8	円	5.3			0.25~0.4	2×0.8	割竹	1.57×0.36	

表4　No.7遺跡古墳群一覧　　単位（m）

No.7 遺跡台地上の遺物について

出土遺物は表土層中に包まれ、かなりの範囲に散在するが、出土量から大略３ヶ所の地点が認められる（第82図１と２、３と４、５）。出土個体数は少なく、体部破片を除いて、大部分図示した。また、完全復元できるものはなく、部分的に欠失するものが多い。甕（第80図14～16）の体部破片はかなりの量が出土したが復元できるまでに至らなかった。

第82図　台地上の遺物出土地点

装飾付須恵器は第５号墳の東側（第82図１・２）から出土し、完全形態を知りえるものはない。装飾付須恵器は古墳から出土するのが一般的であるが、本遺跡の出土状況は、古墳群とは直接結び付かず、装飾付須恵器本来の意味を失っているものと考えられる。装飾付須恵器は、６世紀後半以降に急速に衰退化〔岸本　1975A〕することに符号する。またNo.6遺跡から同形態の破片が検出され、当遺跡と有機的な結び付きが推定され、さらにこのことは、No.6遺跡の集落は須恵器生産に係わった工人集落の可能性を物語る。

遺跡の性格については類例に乏しく今後の調査例の増加をもって判断したい。出土遺物の時期は、No.6遺跡杯身A、No.7遺跡窯跡群の杯身に類似し、実年代は６世紀末から７世紀初頭と推定される。（池野）

No.7 遺跡須恵器窯跡について

No.7遺跡からは７基の須恵器窯跡が検出された。この内第１～６号窯跡は同一丘陵斜面上に立地する。

これらの窯跡群についての構築順序をみる。

窯跡で切り合い関係を有するのは、第３号と第６号である。第３号窯跡の焼成部上端は第６号窯跡の構築に際し埋め込まれ前庭部として形態を整える。

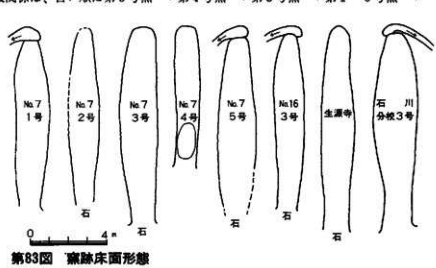
また第３、４号窯跡は互に前庭部が並置しており、近くの土層セクションの観察からは、第３号窯跡が新しく、第４号窯跡が古いことが確認できた。

次いで第４・５号窯跡をみると第５号窯跡の床面に焼き台として利用されていた大甕片（第27図）の復元過程で、第４号窯燃焼部出土の１点が先の大甕と同一個体であり接合した。このことから第５号窯跡から第４号窯跡に破片の１点が移動した結果と理解できる。従って４号窯跡が５号窯跡に比べ同時操業または後出と考えられる。

一方第３号窯跡燃焼部から前庭部にかけての上層には、第１号窯跡の灰層の一部が拡っており、また第６号窯跡前庭部及び第507号穴の上層にかけては第２号窯跡の灰層が各々うすく存在する。

以上の発掘調査の状況から窯体の先後関係は、古い順に第５号窯 ⟶ 第４号窯 ⟶ 第３号窯 ⟶ 第１・６号窯 ⟶ 第２号窯跡の順となる。ただし第６号窯跡（窯体として未完成）を除いて窯の操業が１基だけに限らず一時的に、二基が同時に操業していた可能性をもつ。

丘陵への構築順序では、まず裾部（第５・４・３号窯跡）に築かれ、次いで丘陵中程（第１・６号窯跡）に設け、最後に上方斜面（第２号窯跡）に作られ、同一斜面は下方から上方に向かって、尤分に活用されている。



第83図　窯跡床面形態

また窯体の構築方法には、掘り抜きで一部を半地下式とする第１・３～５号窯跡と、窯体の全てを半地下式とする第２号窯跡がある。ほぼ同時期に操業されたNo.16遺跡第３号窯跡〔池野　1980〕・生源寺窯跡〔塩　1964〕は前者に属する。

窯体の煙出し部付近から窯体の側面斜方向に溝が延びる形状は、第１・５号窯跡にあり、類例は西日本に多く報告及び集成されている〔向田　1981〕。第１・５号窯跡では溝底面の地層が砂層に達することから、その目的は排水の役割をはたしたものと考えられる。

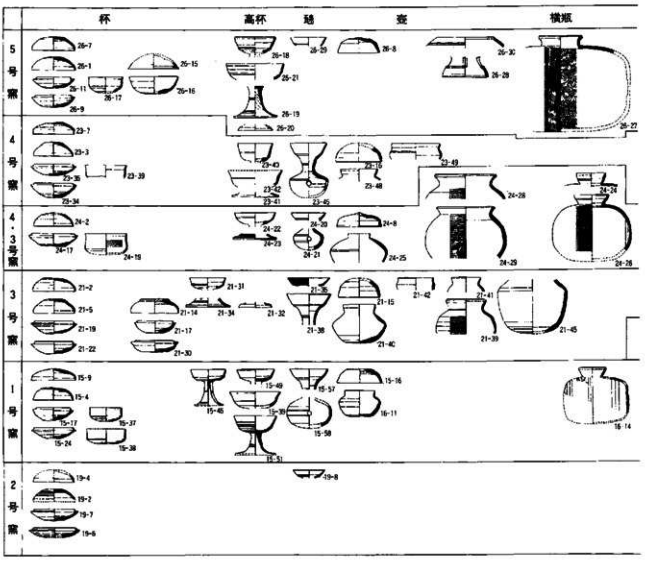
窯体の床面平面形態では、第４号窯跡を除き、いずれも焚口が狭く、焼成部中程に最大幅をもち、奥壁で幅を減じる、中ふくらみの細長い形が一般的である。規模は、全長が9.0～11.0m程に達し、最大幅が1.5～2.2mを測る。

第４号窯は焚口から奥壁にかけての幅が一定で、幅・長さとも小規模である。

燃焼部のいわゆる舟底状ピットは第４・５号窯跡にあり、その目的は明らかでない。

また標高約23mラインは、若干の湧水を伴う砂質土層である。この水平面には、第１号窯跡の排水溝と第６号窯跡掘削中止面があり、第５号窯跡の斜方向に伸びる溝底面もこの等高線上である。

窯体の側壁には窯体構築時の掘削整形の鉄製工具痕を全ての窯体に留め、その痕跡は丸みをもち、鍬と思われる。側壁の補修は燃焼部を中心とした部分的な範囲であって、貼壁は２～３回程度で、床面の枚数も１～２枚と少数であ



第84図　No.７遺跡窯体別の器種（数字は挿図番号を示す）

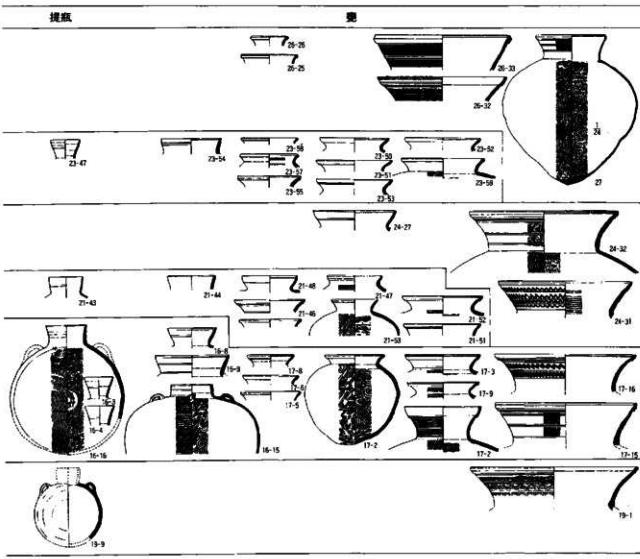
る。またNo.16遺跡第3号窯跡では、側壁の補修・床面の重なりは認められなかった。この点から1基の窯の操業は、壁の崩壊を機に改修を施すことなく、その使用を中止する場合が多く、比較的短期間で終えたと思われる。そのため、ここでは順次窯体を設け、生産を継続して行ったと解される。各窯体の灰層はいずれも小規模であり、使用回数の少なさを物語っている。

床面には焼台として、人頭大の河原石と甕片を用いる。これは第2・3・5号窯跡とNo.16遺跡第3号窯跡・生源寺窯跡で知られる。県内では奈良・平安時代の窯跡で類例がなく、現時点では限定された時期的・地域的特色とみておく。

窯跡出土遺物は、形態上の違いからII群に分けられる。I群は第1・3～5号窯跡で、II群は第2号窯跡の遺物である。第I・II群は窯体の先後関係からもI群が古く、II群が新しい。しかし現時点の土器編年では、ほぼ1型式の枠内におさまる時期である。杯身の口径は、12.5cm前後が多く、杯蓋の口径は13.5cm前後が中心を占める。

大阪府陶邑古窯群の調査成果〔中村　1977〕に対比するとII型式5段階に、田辺編年では、TK209型式に含まれる。また内面かえりをもつ杯蓋は第5号窯跡出土の1点である。No.6遺跡では杯身・杯蓋Bとして若干量が限定された範囲から出土している。

従って、実年代は6世紀末から7世紀初頭頃が考えられる。　（上野）



No.7 遺跡の集落について

竪穴住居跡23棟、掘立柱建物7棟の他、多数の穴・溝が検出された。古墳時代、奈良時代、平安時代に属するものがあり、古墳時代・奈良時代は、土器の特徴・遺構の切り合いから、それぞれ数期にわかれる。

古墳時代は、須恵器杯・杯蓋の特徴から大きく2群にわかれる。

第Ⅰ群は、杯身A類・杯蓋A類がその目安となり、建物A・B・C類（竪穴住居跡）の時期である。第Ⅱ群は、杯身B類、杯蓋B類が目安となり、X10Y21区平坦部一括出土のものがある。大阪府陶邑古窯跡群〔中村　1977〕の編年に拠れば、第Ⅰ群は、Ⅱ型式第6段階、第Ⅱ群は、Ⅲ型式第2段階にほぼ対応できる。また、飛鳥・藤原宮の成果〔西1978〕に照らせば、それぞれ、飛鳥Ⅰ期（7世紀第Ⅰ四半期）、飛鳥Ⅱ期（7世紀第2四半期）に比定できよう。

古墳時代の竪穴住居跡は10棟ある。平面が隅円方形で、4本主柱、屋内に炉を残すもので、外周に溝をめぐらす建物A類、溝をめぐらさない建物B類、がある。第2号住と第4号住で切り合い関係があり、新旧を認める。第Ⅰ群土器が、さらに二分される余地を残している。建物C類は、柱穴がない竪穴で、溝をめぐらしている。建物A・B類に付属する納屋風の施設であろう。

建物A・B類は、小杉町上野遺跡〔橋本　1974A・1976B〕で類例がある。それらは、6世紀後半に位置づけされ、カマドを有するものがあるらしい。

本遺跡では、第5号住で炉のそばに、表面が加熱を受けた方柱状の土塊が残っており、また、その崩壊土に混って土製支柱があった。炉床面が焼きしまって硬く、いわゆる地床炉とは違いがある。この土塊は、カマドの一部分を構成していたものと考えられる。ただ、南関東地方では、「鬼高Ⅱ期以降、カマドが壁を掘り込んで構築されるようになり、煙道が竪穴外へ長く延びるようになることや、土製支柱の使用等の変化が表れる」〔柿沼　1979〕ことや、長野県金（鐘）鋳場遺跡〔山田他　1976〕、新潟県山畑遺跡〔小島　1979〕などでも、カマドは壁に接しているのが一般的である。

本遺跡では、壁面から少し離れた内部に設けられ、煙道なども認められずやや異なった状況となっている。斜面であるという立地条件の違いか、特別な排煙施設を設けていたのか、本遺跡だけの現象であるのか、地域性であるのか、古墳時代の居住様式を考えるうえで、重要な発見である。

土製支柱は、立山町辻坂の上遺跡〔久々　1982〕から、やや太目のタイプが出土しており、6世紀後半に比定している。本遺跡では、太目のタイプと細目のタイプがあり、後者が多く、時期差を示すかもしれない。

建物A・B・C類は、それに伴う遺物に須恵器の生焼け品が多く、須恵器製作にたずさわった工人集団の住居であることは、疑いない。第1～7号須恵器窯との関係が注目される。

掘立柱建物D類は、第13号住の5間×3間のように、間数が多く、規模が大きいものである。柱間寸法や、柱穴並びが不揃いな点、間数や柱穴の形状、建物の軸方向等で、奈良時代のE類とは区別できる。

県内では、上市町東江上遺跡〔岸本　1981〕で、7世紀末の掘立柱建物群が検出され、今のところ県内で最古の掘立柱建物となっている。

第85図　住居跡配置図

一方、「畿内では6世紀末～7世紀初頭を画期として、掘立が一般化する」〔山田　1981〕とか、西日本では、「6世紀後半になると、一般集落の中にも、1・2棟前後の掘立建物が出現してくる」〔広瀬　1978〕と言われ、その出現は、「政治性を表出したもの」と考えられている。

建物D類は、第Ⅱ群土器（飛鳥Ⅱ期）と結びつく可能性があり、そうであれば、県内での掘立柱建物の出現が、7世紀前半にさかのぼることになる。しかし、その周囲で決め手となる遺物を指摘できない。

流通団地内№21遺跡では、飛鳥Ⅲ期に比定される須恵器窯跡から、瓦の出土が知られることや、金山丘陵から呉羽丘陵にかけて分布する、数多くの古墳群、須恵器窯跡群（古墳時代後期～奈良時代）、製鉄遺跡群（奈良時代初頭～平安時代後期）の有様は、この地で、須恵器製作にたずさわった工人集団のその後の動向と、深く関係するものと考えられる。そのような状況の中で、建物D類の存在は注意しておきたい。

古墳時代に属する第4号穴から、製塩土器が出土している。筒状胴部に、ラッパ状に開く口縁部がつき、底部が棒状となる。能登式製塩土器〔近藤　1962〕である。立山町辻坂の上遺跡、上市町東江上遺跡〔岸本　1982〕でも、同類のものが出土している。いずれも海浜から離れた内陸部の、集落遺跡からの出土である。

県内では、氷見市九殿浜遺跡〔岸本　1975B・斉藤　1975〕で、塩生産に関わる出土が知られているが、内陸部の集落からの出土は、塩をつめた運搬容器としてもちこまれたものと考えられている〔岩本　1980〕。生産地の能登方面から、どのような経路、手段をへて、この地に至ったのか、その実態は明らかでなく、本県での塩の流通を考える上で、貴重な資料である。

建物E類は、奈良時代8世紀前半に属する掘立柱建物である。2間×2間で、柱穴にそって浅い溝が掘られている。3棟の建物が、軸を同じくしている。流通団地内№16遺跡、№20遺跡では、カマドをもった竪穴住居跡があり、両者の性格の違いが、今後問題となろう。

建物E類第7号住と、建物F類第8号住との間に切り合い関係があり、奈良時代の土器群も二分される可能性がある。
（久々）

№18遺跡C地区の遺構について

第1号住居跡は、3枚の貼床面を確認している。各々の貼り床面の差は約10cmである。各貼り床に伴う住居跡の壁面は、同じ黒色土の覆土なので、確認できなかった。第2号住居跡も2枚の貼り床を持っている。新しい床面は、第11号溝を埋めて構築しており、第6号溝が周溝になろう。第1・2号住居跡は、遺物の時期差を考慮して、奈良時代前半から後半に比定される。

第1・2号住居跡は、カマドを持たず、主柱穴も見あたらず、周溝をもたない点が共通する。当地域内では、№16遺跡の第2号住居跡（8世紀前半、平城宮Ⅱ段階並行）、№18遺跡A地区の第1号住居跡（奈良時代）、№20遺跡の第4・5号住居跡（8世紀後半）などは、カマドを持ち、主柱穴がある。№20遺跡の第3号住居跡（奈良時代）にはカマドがなく、主柱穴はある。奈良時代の竪穴住居跡には、カマドを持つものと持たないものがある。

第1・2号住居跡の立地は、№18遺跡A地区のあり方と類似しており、遺物にも生焼け品が混入していることから、両住居跡は、№18遺跡A地区の須恵器窯の工人の住居跡とも考えられる〔池野　1980〕。

両住居跡より鉄鏃が出土し、第24号穴からはフイゴの羽口と付近からは鍛冶滓が出土していることからも、両住居跡は、鍛冶工房も行っていたと考える。本遺跡から東へ3km離れた上野赤坂A遺跡の第1号住居跡（奈良時代初頭、平城宮Ⅰ段階並行）は、カマド・周溝を持たず、住居跡内に主柱穴も見あたらず、付近に鍛冶の穴があることから、鍛冶工房的性格を考えている〔関他　1982〕。その例は、本遺跡の両住居跡のあり方の参考になろう。

第1号炭焼窯は、窯体の覆土中より、9世紀前半の須恵器が出土している。しかし、窯体は短いが、窯壁面が直立し、煙出しが壁より離れることから、奈良時代～平安時代前半の特徴を備えている〔関他　1982〕。そうすると、住居跡の鍛冶工房的性格とを関連づけて考えられるならば、鍛冶用木炭を作る炭焼窯の可能性を示唆できる。（宮田）

No.18遺跡C地区の遺物について

土器は供膳形態として、須恵器は杯・皿・高杯・鉢（鉄鉢・すり鉢）があり、土師器では椀と黒色土師器・丹塗土師器がある。また貯蔵形態として、須恵器には、壺・横瓶・甕の器種が存在し、煮沸形態には、甕・鍋などがみられた。

出土土器は遺構・遺構面ごとの検討を行っておらず、時期幅はもつが一括して取扱った。

須恵器の杯蓋は、形態の変化が多くみられ、口縁端部にその傾向が集中する。一般に天井部外面が笠形をなし、口縁端部が角ばり、端面の尖る形態が古い様相である（第43図25・32）。また天井部が平坦で縁部が屈折して端部が部厚く尖るもの（第43図5～7）、全体に器肉が厚く丸いつまみをもつもの（第43図10・24）などは新しい様相である。また杯身の高台のふんばりは強いものと、弱いものがあり（第46図63）、時期差を示すものであろう。

この遺跡の東方約200mには、須恵器窯跡が存在し、No.16遺跡第2号窯跡〔上野　1980〕とほぼ同時期とみなせる。須恵器の一部は、当遺跡に持ち込まれており、杯蓋では、第43図21・35・39が、長頸壺では第44図7の形態が、窯跡出土品と似る。

平城宮土器編年によれば平城宮II段階〔小笠原　1976〕以降は、長頸壺の体部が球形となる。また鉄鉢形土器は平城宮Ⅰ・II段階で平底また丸底ふうをなし、平城宮III段階以降は尖底状が一般化するとされ、第45図2・3は前者の段階に属する。

従って、当遺跡の遺物は8世紀前半から後半にかけてのものである。なお第1号炭焼窯跡出土の第43図60は、9世紀前半頃に属すると考えたい。

甕の内面には、第45図15・16に扇形状のあて具痕がみられる。9世紀後半から10世紀代とされる立山町法光寺2号窯跡〔藤田　1974〕からも扇状圧痕のものが報告され、奈良時代にも同種類の圧痕が存在したことになる。

内面あて具は土師質で、土器製作に用いられた。陶製当て道具の実例は、数例あり、美濃須衛古窯跡群に集中し、時期はいずれも奈良時代をさかのぼるものでないとされる〔田辺　1981〕。今回の発掘例は須恵器土師器製作との関連をもつ遺物として、注目できる。（上野）

No.32遺跡について

製鉄用木炭を焼成した炭焼窯跡2基がある。平安時代9世紀前半に位置づけられる。小杉町上野赤坂A遺跡〔関他　1982〕では、奈良時代前葉と考えられるタイプと平安時代後期のタイプがあり、本遺跡のものは、壁が垂直に立つ形態でA類とした前者に近い。平安時代前期にも製鉄が行われていたことを証するとともに、奈良時代～平安時代前期まで、窯の構造が、そう大きな変化をとげていないことを示している。流通団地内No.21遺跡でタタラ跡があり、それとの関連が考えられる。

また、流通団地内では、計4基の炭焼窯が散発的にみつかっている状況であるのに対して、太閤山ランド地内では密集するような分布状況を示し様相を異にしており注意される。（久々）

Ⅵ 総 括

縄文時代

小杉流通業務団地内の遺跡では、縄文土器が出土する遺跡が多くある。その大部分の遺跡は中期から晩期にかけての遺物が若干検出されるもので、遺構の存在はまれであった。

今回の調査では、No.3遺跡で3棟、No.7遺跡で3棟の住居跡が発掘された。

No.3遺跡第1号住居跡は、丘陵尾根部に1棟が単独に存在し、中期中葉に属する。また第2・3号住居跡は、幅広い台地の中央よりに立地する。2棟の住居跡は隣接して設けられ、主軸方向は40度の異なりを有する。時期はいずれも中期前葉にあたり、出土土器は、広義の新崎式に該当する。砺波市厳照寺遺跡の調査成果〔神保他 1976〕によればほぼ厳照寺Ⅰ式に含まれる。

No.7遺跡の北地区は、No.3遺跡同様幅広い台地上のほぼ中央部に住居跡がある。住居跡2棟は隣接して位置する。台地上には、性格が不明であるが浅い皿状の形態をした1m前後の穴が点在する。

この遺跡の出土土器は、中期前葉に属し、厳照寺Ⅰ・Ⅱ式の両方の様相がみられる。[2※①]

このことから、当地域では、限られた短期間に少数の住居跡が順次作られ、生活を営んでいたことになる。

周辺の遺跡では、中核的な大きな集落を形成するものに、中期中葉の水上谷遺跡〔橋本他 1974〕、中期中葉から後葉にかけて串田新遺跡〔橋本他 1973〕が知られる。No.3・7遺跡はこれらに先行または平行する時期の小規模な遺跡である。（上野）

註① この点について、神保孝造・酒井重洋氏から教示を得た。

古墳

従来、群集墳の形成は6世紀に入ってからと言われていたが、近年、5世紀後半に遡る初期群集墳の調査例が多くなった。また、北陸の5世紀後半は、大和政権の再編成機構の段階にあるという〔高堀・吉岡 1966〕。この流れに軌を一にするが如く、No.7遺跡古墳群は形成されはじめる。

No.7遺跡古墳群は、4基の中規模程度の規模をもつ古墳を核に、小規模墳及び墓域が付随する形態をとる。この4基の中規模墳間には卓越した遺物差は認められないが、第5号墳は占地状況、墓上祭祀に若干の優位性が認められなくもなく、集団家長層の中でもやや有力な長を物語るものであるかも知れない。しかし、また、第7号墳の占地状況は、やや有力な一家族でも、集団から墓域規制を受けた結果ではなかろうか。ともかく、5世紀後半から古墳が築造され、そして、最も新しいと推定される第7号墳築造以降にNo.3遺跡占墳群へ墓域を移動したと推定される。時期は、第7号墳の出土遺物が、ガラス玉を主体にしながらも滑石製臼玉をもち、6世紀初頭を下らない段階である。

No.3遺跡古墳群は、No.7遺跡古墳群より全体に小規模墳となり、最大のものでも11.9mである。また、各古墳間には小グループを構成するもの、単独墳的なものが存在し、単独墳的なものは第7号墳を除いて大型グループである。そして、小グループを構成するものの中の小規模墳は、中核墳＝家長の類縁者が被葬されたものではなかろうか。このことは、主体部調査例が少なく明確ではないが、1墳1主体部に変化した結果ではなかろうか。そして、No.3遺跡古墳群は、6世紀中頃近くになって終焉を迎えたと考えられる。

この様に5世紀後半から6世紀中頃近くまでに形成された古墳群は、小地域の在地集団の墓域として捉えることが可能であろう。（池野）

須恵器窯跡

No.7遺跡の須恵器窯跡群は、6基で構成される。各窯跡の使用は短期間で廃止され、順次同一丘陵斜面に構築される。この結果窯跡群の時期は、陶邑古窯跡群のTK209型式に対比でき、ほぼ1型式内におさまる短期間の操業であった。このような短期間の操業傾向は陶邑古窯跡群のTK217型式以降にみられ、窯業技術上の大きな変化として把握されている〔田辺　1981〕。No.16遺跡第3号窯跡も前2例と同様の窯構築方法で、窯跡1基が短期間で廃棄される。

周辺には、時期的に近い生源寺窯跡が南西方向約0.4kmに存在し、この地域での生産開始時期は陶邑古窯跡群の第Ⅱの画期に当り、地方窯の増加時期と軌を一にする。

集落跡

No.6遺跡は、須恵器窯跡の操業時期とほぼ一致し、出土遺物から須恵器生産に従事した工人集団の集落跡と推測した。また住居跡は、平面形態から隅円方形で外周に溝をめぐらすものと、めぐらさない竪穴住居と掘立柱建物がみられる。No.7遺跡との類似点では、外周に溝をめぐらし、床面に屋内炉が存在する竪穴住居は、切り合い関係が殆んどなく、住居跡は単独に立地するか、重複関係をもつ例では最も新しく構築される。また推定床面積が大型と小型があり、約25m²以下の小型のものは主柱が不明確な例が多く、大型のものは4本主柱で、柱穴は深く大きい。両遺跡とも造り付けのカマドは未検出である。また両遺跡の相違点では、No.7遺跡に推定床面積約60m²におよぶ大型の竪穴住居がみられ、また大きな面積の掘立柱建物の存在が目につく。

小杉町上野遺跡〔橋本　1974A・1976B〕の古墳時代後期の住居跡は、3つの丘陵上から合せて数棟が発掘され、各丘陵の斜面に構築されていた。時期はNo.6遺跡にきわめて近い。住居の形態は外周に溝をもつものとないものの二者があり、床面に地床炉を有するものとカマドを設けた例が知られる。

石川県千崎遺跡〔四柳他　1972〕は6世紀後半とされる住居跡数棟が調査され、造り付けカマドと床面のほぼ中央に地床炉を併設している。北陸では造り付けカマドの普及がこの時期でも充分浸透していなかったことになる。

No.7遺跡の集落跡出土の須恵器杯Aは、No.6遺跡に比べ若干新しい様相を含む、それは杯底面の平担化とたちあがりの形態差であり、相対的にNo.6遺跡に後続するきわめて近い段階の遺物と考えたい。従ってNo.6遺跡の集落から、至近距離に位置する隣のNo.7遺跡の丘陵地に集落が移動した可能性を示唆するものと言える。

両遺跡から出土した遺物の比較では、鉄器・砥石・紡錘車・黒色土師器・土師器杯・椀類の有無と壺類の種類差などあげられる。土器では供膳・貯蔵・煮沸形態に占める器種・割合の相違が存在する。

奈良・平安時代の遺構は、No.7・No.18遺跡C地区の調査で確認された。

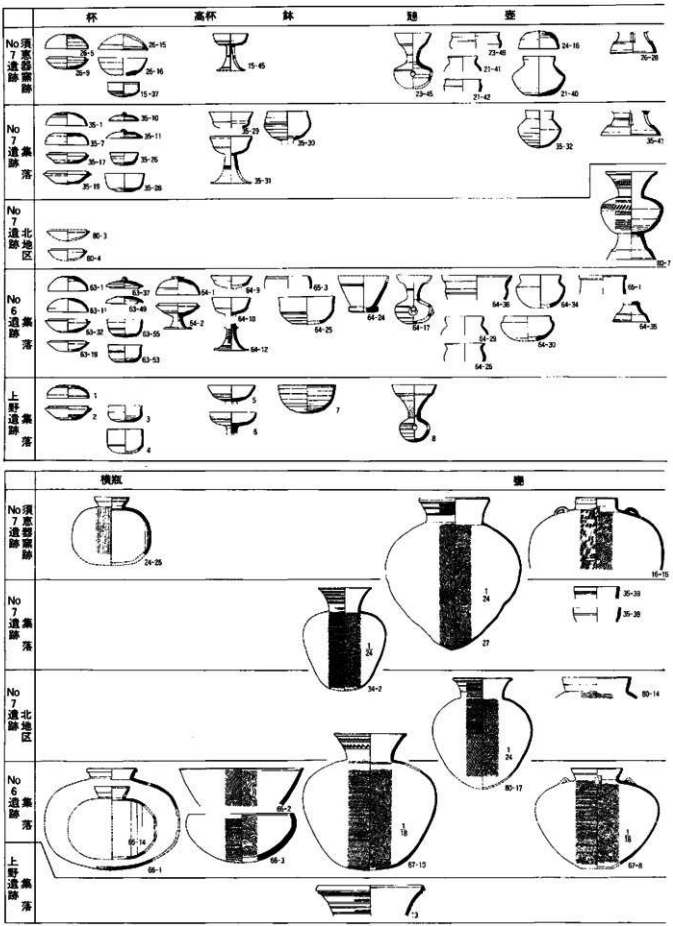
小杉流通業務団地内では、No.18遺跡A地区・No.20遺跡・No.16遺跡で各々住居跡が調査され、いずれも奈良時代に含まれる。これらの遺跡は近くに同時代の須恵器窯跡が存在することから、須恵器生産に関連をもつ工人集団の集落跡と考えている。住居跡は殆んど造り付けのカマドをもつが、今回調査のNo.7・No.18遺跡C地区では検出されなかった。また小杉町上野遺跡〔橋本　1976B〕でも屋内炉だけの住居跡があり、同時代にも地床炉・カマドの2系統が存在する。

（上野）

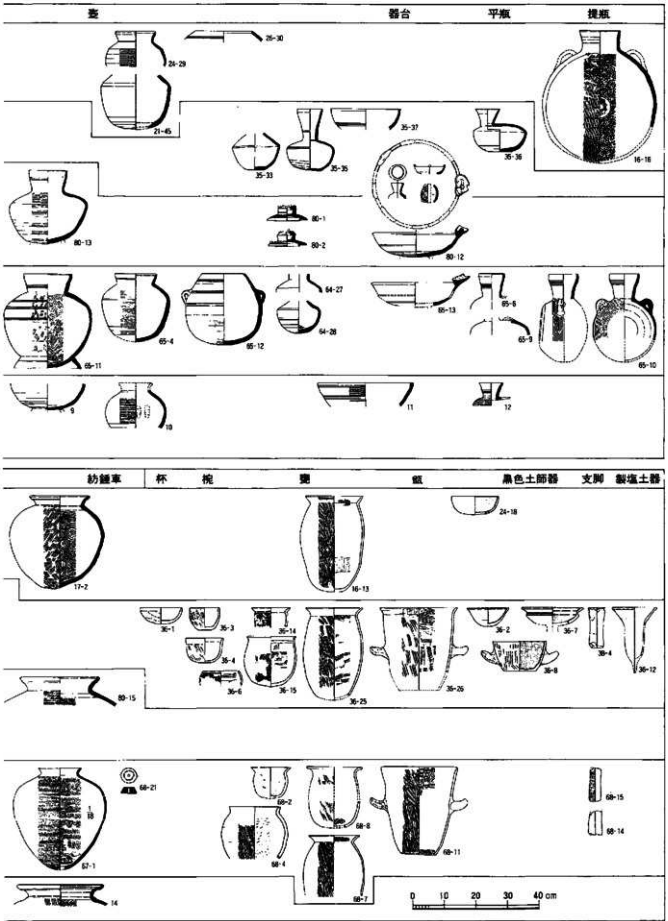
参考・引用文献

イ　池野正男・山本正敏・酒井重洋　1979　『富山県小杉町流通業務団地No.20遺跡緊急発掘調査概要』　富山県教育委員会
伊藤勇輔・一瀬吉男　1978　「第4章遺物・遺構の検討第3節玉類について」　『兵家古墳群』　奈良県史跡名勝天然記念物調査報告第37冊
稲田孝司1978　「Ⅳ遺物　3土器」「Ⅴ考察　2土器」『平城宮発掘調査報告』　Ⅸ　奈良国立文化財研究所
岩本正二　1980　「製塩土器の分布と流通」『考古学研究』　第27巻2号　考古学研究会
上野章・池野正男　1980　『富山県小杉町・大門町小杉流通業務団地内遺跡群第2次緊急発掘調査概要』　富山県教育委員会
岡崎晋一・藤田富士夫　1970　『富山市金草第一号窯跡調査報告』　富山市教育委員会
小笠原好彦　1971　「丹後土師器と黒色土師器」『考古学研究』　第18巻第2号　考古学研究会

小笠原好彦・西　弘海　1976 「Ⅴ考察　2土器」『平城宮発掘調査報告』Ⅷ 奈良国立文化財研究所
小田富士雄・武末純一他　1977 『天観寺山窯跡群』 北九州市埋蔵文化財調査会
カ　柿沼幹夫　1979 「Ⅴ結語　1住居跡について」『上越新幹線埋蔵文化財発掘調査報告－Ⅲ－下田・諏訪』 埼玉県教育委員会
岸本雅敏　1975A 「装飾付須恵器と首長墓」『考古学研究』 第22巻第1号　考古学研究会
岸本雅敏　1975B 「九殿浜製塩遺跡」『日本考古学年報』 27　日本考古学協会
岸本雅敏　1981 「東江上遺跡」『北陸自動車道遺跡調査報告－上市町遺構編－』 上市町教育委員会
岸本雅敏　1982 「東江上遺跡」『北陸自動車道遺跡調査報告書－上市町土器・石器編－』 上市町教育委員会
久々忠義　1981 「Ⅴ辻坂の上遺跡」『北陸自動車道遺跡調査報告－立山町遺構編－』 富山県教育委員会
小島幸雄　1979 『新潟県上越市岩木地区遺跡群発掘調査報告書』 上越市教育委員会
小林謙一　1975 「弓矢と甲冑の変遷」『古墳と国家の成立ち』 古代史発掘
小林達雄　1968 『多摩ニュータウンNo.46遺跡における吹上パターンについて』 考古学協会発表要旨　34
小杉町役場　1958 『小杉町史』
近藤義郎　1962 「能登式製塩土器の研究」『日本塩業史の研究』 5　日本専売公社
サ　斉藤　隆・久々忠義・神保孝造　1979 『富山県大沢野町野沢遺跡発掘調査報告書』 Ⅰ　大沢野町教育委員会
斉藤道保　1975 『富山県氷見市九殿浜製塩遺跡調査報告書』 氷見市教育委員会
塩　照夫　1964 『生源寺窯址調査報告書』
白石太一郎・河上邦彦他　1975 『葛城・石光山古墳群』 奈良県史跡名勝天然記念物調査報告第31冊
神保孝造・岡上進一・松本幸治　1976 『富山県砺波市 厳照寺遺跡緊急発掘調査概要』 富山県教育委員会
神保孝造・久々忠義編　1978 『富山県砺波市栴壇野遺跡群予備調査概要』 砺波市教育委員会
関　清・宮田進一・久々忠義　1982 『富山県小杉町上野赤坂A遺跡』 富山県教育委員会
関川尚功・玉井章進他　1980 『奈良県五條市引ノ山古墳群』 五條市教育委員会
タ　高堀勝喜・吉岡康暢　1966 「6　北陸」『日本の考古学』Ⅳ
田島明人　1972 『加賀市分校古窯址群調査概要』 加賀市教育委員会
田辺昭三　1966 『陶邑古窯跡群Ⅰ』 平安学園創立90周年記念研究論集第10号
田辺昭三　1981 『須恵器大成』 角川書店
都出比呂志　1967 「農具鉄器化の二つの画期」『考古学研究』 第13巻第3号　考古学研究会
ナ　中村浩・高島徹也　1977 『陶邑Ⅱ』 大阪府文化財調査報告書第29輯　大阪府教育委員会
楢崎彰一　1979 「第二部　歴史時代」『岐阜市史』史料編考古・文化財　岐阜市
西　弘海　1978 「土器の時期区分と型式変化」『飛鳥・藤原宮発掘調査報告』Ⅱ　奈良国立文化財研究所
西井龍儀・小島俊彰・山本正敏　1973 『富山県福光町鉄砲谷・向山島・是ヶ谷遺跡発掘調査報告書』 富山県教育委員会
能登　健　1974 「発掘調査と遺跡の考察」『信濃』 第26巻第3号
ハ　橋本　正・神保孝造　1973 『富山県大門町串田新遺跡発掘調査概報』 富山県教育委員会
橋本　正　1974A 『高速自動車国道北陸自動車道関係埋蔵文化財緊急発掘調査報告書　小杉町上野遺跡－記録写真編－』 富山県教育委員会
橋本　正・神保孝造　1974B 『富山県小杉町水上谷遺跡緊急発掘調査概要』 富山県教育委員会
橋本　正・岸本雅敏　1975 『入善町じょうべのま遺跡発掘調査概要(3)』 入善町教育委員会
橋本　正　1976A 『富山県大沢野町直坂Ⅱ遺跡発掘調査概要』 富山県教育委員会
橋本　正　1976B 『竪穴住居の分類と系譜』『考古学研究』第23巻第3号　考古学研究会
原口正三　1979 『須恵器』 日本の原始美術4
広瀬和雄　1978 「古墳時代の集落類型－西日本を中心として－」『考古学研究』 第25巻第1号　考古学研究会
藤田富士夫　1974 「富山県立山古窯跡群」『考古学ジャーナル』 No.97
藤田富士夫　1975 『富山市杉谷A・G・H遺跡調査報告』 富山市教育委員会
藤田富士夫　1981 「富山県における群集墳期の古墳文化－古代氏族の勢力に関連して－」『富山史壇』 76号
ミ　三木文雄・小林行雄　1959 「伝統工芸と新興工芸」『世界考古学大系』 3
向田裕始他　1981 『松ヶ迫遺跡群発掘調査報告』 広島県埋蔵文化財センター
森　浩一　1958 「和泉河内窯址出土の須恵器編年」『世界陶磁全集』 1
森　浩一・石部正志　1961 「後期古墳の討論の回顧」『後期古墳の研究－古代学研究第30号記念特集』 古代学研究会
ヤ　山田瑞穂　1976 「2　金(鐘)鋳場遺跡3まとめ」『長野県中央道埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書－諏訪市　その4－』 昭和50年度　日本道路公団名古屋建設局　長野県教育委員会
山田　猛　1981 「七世紀初頭における集落構成の変質」『考古学研究』 第28巻第3号　考古学研究会
山本正敏・橋本　正・上野　章・池野正男・松本幸治　1979 『富山県魚津市佐伯遺跡発掘調査概要』 富山県教育委員会
吉岡康暢　1974 「第3章　第2節　州衛古窯址群」『輪島市史』 資料編第3巻　輪島市
四柳嘉章・高橋　裕　1972 「千崎遺跡」『加賀市千崎・大畠遺跡』 石川県教育委員会



第86図　遺跡及び地区毎の器種（数字は挿図番号を示す）


壺
器台
平瓶
提瓶
24-29
26-30
21-45
35-37
35-33
35-35
35-38
16-18
80-13
80-1
80-2
80-12
64-27
64-28
65-13
65-6
65-9
65-4
65-12
65-11
65-10
9
10
11
12
紡錘車
杯
椀
甕
鉢
黒色土師器
支脚
製塩土器
17-2
16-13
24-18
35-1
35-3
35-14
35-4
35-6
35-15
35-25
35-26
36-2
36-7
36-8
36-4
36-12
80-15
68-21
68-2
68-4
68-8
68-11
68-15
68-14
67-1
68-7
14
0 10 20 30 40 cm

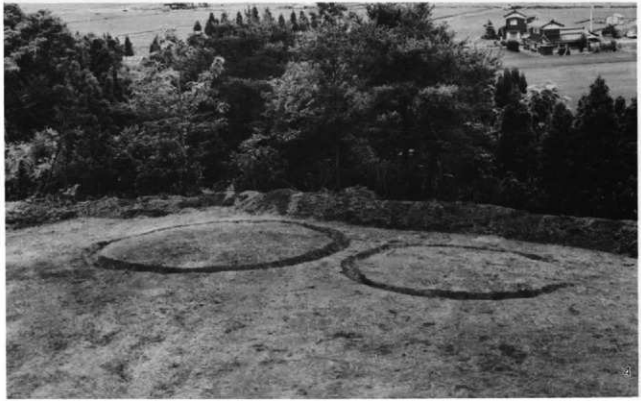
小杉流通業務団地及び周辺の航空写真

昭和49年撮影

図版第1

1. 第1～5号
墳　南から

2. 第1・2号
墳　南から
3. 第2号墳周
溝

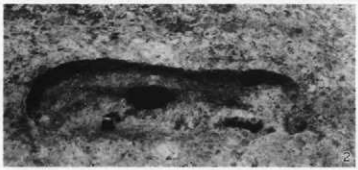


4. 第3・4号
墳　東から

図版第2

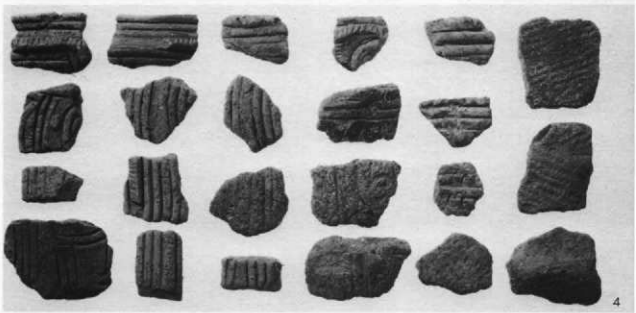
No. 3 遺跡

1. 第7号墳・第1号住居跡



2. 第7号墳主体部

3. 第8号墳



4. 第1号住居跡

5

6

7

8

5～8. 第2号墳

9

10

11

12

13

14

9～12. 第7号墳
13. 第1号墳
14. 第4号墳

図版第3

1. 遠　景
南東から

2. 古墳近景
北から

3. 第1号墳
南から

図版第 4

No. 7 遺跡

1. 第1号墳北から
2・3. 第1号墳周溝須恵器出土状態

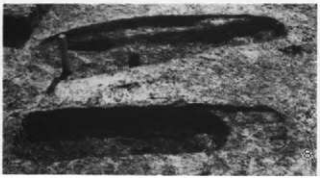
4. 第1号墳周溝出土須恵器

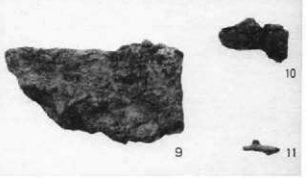
4

5. 第2・4号墳西から

6. 第2号墳北から
7・8. 第2号墳主体部

9・10. 第2号墳主体部出土鉄器
11. 封土出土鉄器



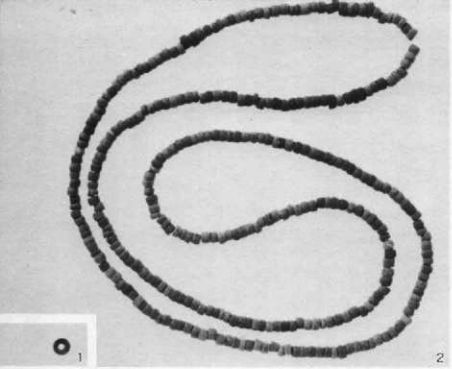


10

9

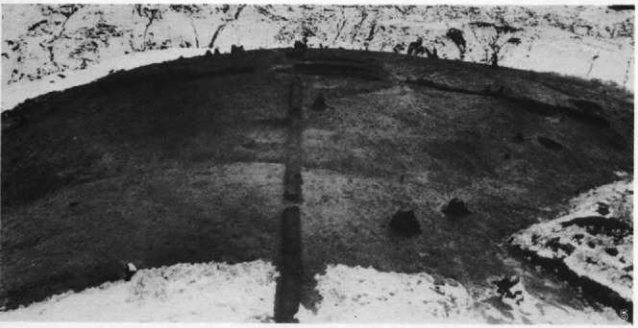
11

図版第5



1.第2号墳第1主体部
2.第2号墳第2主体部
3.第2号墳墳丘上

4.第3号墳第2主体部



5.第3号墳北から

6・7.第3号墳主体部
8.第3号墳北西から

9.第4号墳東から

図版第6

No.7 遺跡

1.遺跡近景
西から

2.窯跡群全景
西から

3.第1号窯跡
側壁の貼り
壁痕跡
4.第1号窯跡
燃焼部

5.第1号窯跡
側壁の工具
痕と貼り壁
痕跡
6.第2号窯跡
の遺物出土
状態

図版第7

No. 7 遺跡

1. 第3・4号窯跡
2. 第3号窯跡排水溝

4. 第3号窯跡側壁の工具痕跡

5. 第4号窯跡奥壁の工具痕跡

3・6. 第5号窯跡

7. 第7号窯跡

8. 第5号窯跡第2床面の遺物出土状態

9. 第501号住居跡

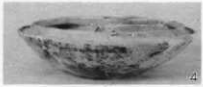
図版第8

No. 7 遺跡
出土遺物

1

2

3


4

5

6

7

8

9

11

10

12

1～4・6～11.
第1号窯跡
5.第508号穴

13

15

16

14

17

18

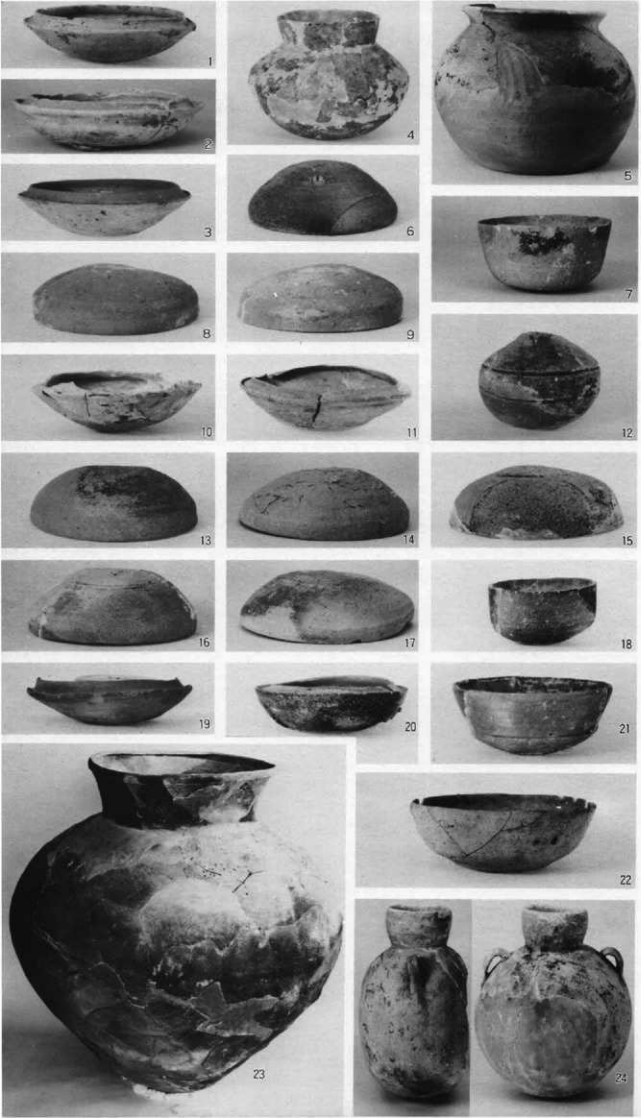
13・14.第2号
窯跡
12・15～21.
第3号窯跡

19

20

21

図版第9



No. 7 遺跡
出土遺物

1～5. 第3号窯跡

6～12. 第4号窯跡

15. 第507号穴

13～14・16～23. 第5号窯跡

24. 第6号窯跡

図版第10

No. 7 遺跡

1. 全　景
東より

2. 第9号住居
跡付近
東より

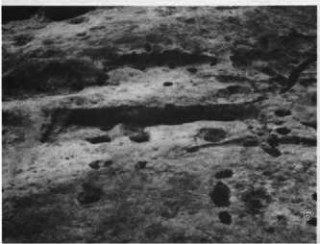
3. 第20号住居
跡付近
東より

図版第11

1. 第12号住居跡付近
東より

2. 第1号住居跡
東より
3. 第2号住居跡
東より

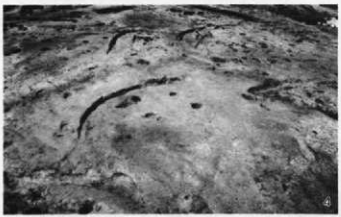
4. 第12号住居跡
北より
5. 第5号住居跡
東より



6. 第4号住居跡
東より
7. 第2号住居跡
南より

1. 第14号住居跡付近
北より

2. 第7号住居跡
南より
3. 第15号住居跡
北より



4. 第18号住居跡
南より
5. 第17号住居跡
北より

6. 第26号住居跡
東より
7. 第28号住居跡
東より

図版第13

No. 7 遺跡

1. 第２号住居跡内支柱出土状況
2. 第５号住居跡の炉

3. 第13号穴内土器出土状況
4. 第７号穴付近　東より

5. 第48号穴付近
6. 第８号穴土層セクション

7. 第７号住居跡内溝セクション
8. 第45号穴
9. 第29号穴

10. 第27号住居跡
12. 第14号穴

図版第14

No.7 遺跡

出土遺物

1.第2号住居跡
2.第7号溝
3.第13号住居跡
9・10・12. X10Y21

1

3

9

2

4

10

5

7

11

6

8

12

13. 第2号住居跡
14・16. X8 Y21
15. 第13号穴

13

14

15

16

17

18

図版第15

No. 7 遺跡
出土遺物

21・25. 第12号住居跡

23. 第5号住居跡
22・24. 第29号住居跡

27. 第13号住居跡
28・29. 第1号住居跡

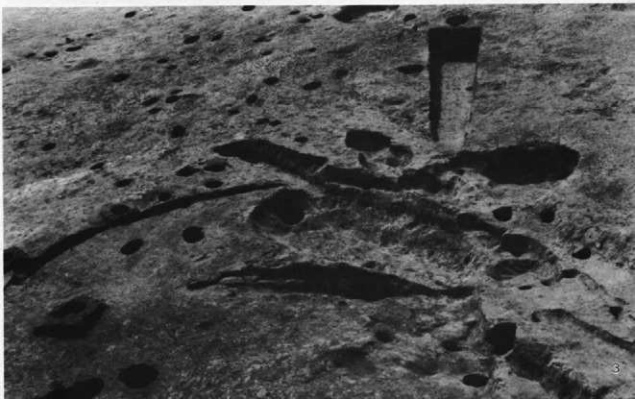
30・34・35. 第7号住居跡
31. 第6号住居跡
32. 第8号住居跡
33・36. 第26号住居跡
37. 第45号穴
38～40. 第59号穴

図版第16

No.18遺跡
C地区

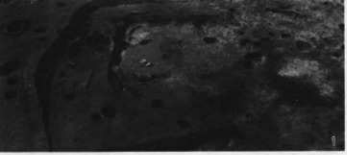
1.遠　景
南から

2.第2号住居跡
東から



3.第1号住居跡・第1号炭焼窯跡
東から

図版第17

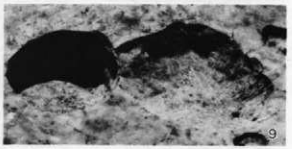


No.18遺跡
C地区

1. 第2号住居跡
2. 第1号住居跡

3. 第1号住居跡内出土
4. 第2号住居跡内出土

5. X 7 Y 15付近
6. 第12号溝南から



7. 第12・46・48号穴東から
8. 第9号穴・第13号溝北から
9. 第14・15号穴東から

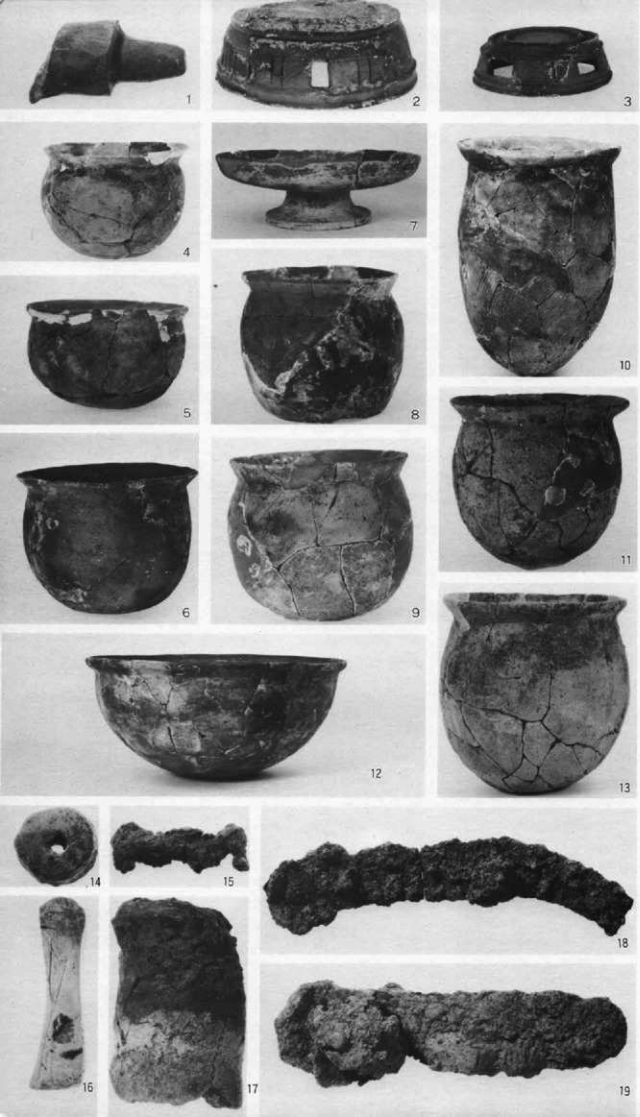
10～17. 出土遺物

図版第18

No.18遺跡
C地区
出土遺物

図版第19

No.18遺跡
C地区
出土遺物

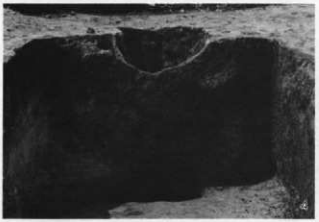


図版第20

No.32遺跡

1.全　景

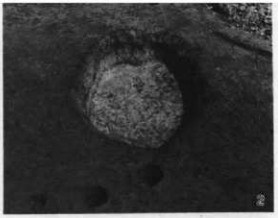
2.遠　景
　東から
3.土層の状況



4.2号炭焼窯
5.1号炭焼窯

6.2号炭焼窯
　排水溝
7.壁面の削痕

図版第21



No.32遺跡

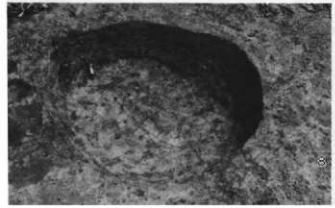
1.第1号穴
2.第2号穴

3·4.出土遺物

No.20遺跡B地区

5.遠　景
南から

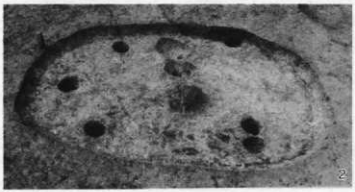
6.発掘区全景
7.第2号穴

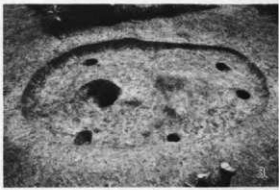


8.第1号穴
9.出土遺物

図版第22

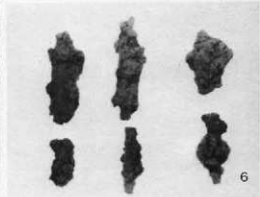
1.遠　景
　北から





2.第2号住居
　跡
　北東から
3.第3号住居
　跡
　北東から

4.第9号墳
　東から



5.主体部
　南東から
6.周溝出土鉄
　器

図版第23

No. 6 遺跡

1. 遠　景
東から

2. 遠　景
西から

3. 近　景
南から

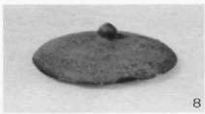
図版第24

No. 6 遺跡

1. 第1号住居跡 南から

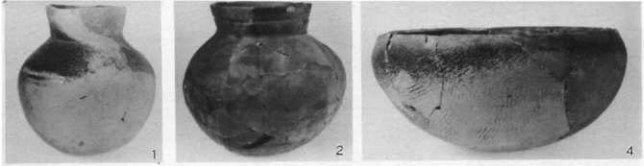
2. 第12・13号住居跡 南から

3. 第1号窯跡 東から

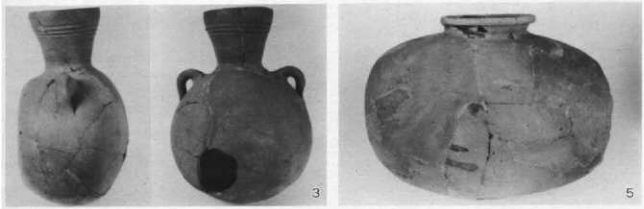


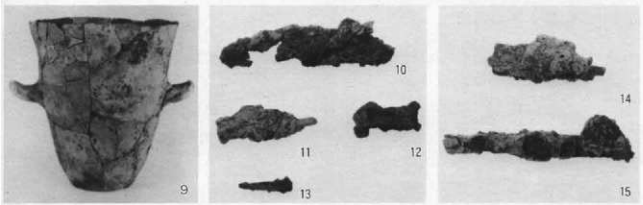
4～18. 出土遺物

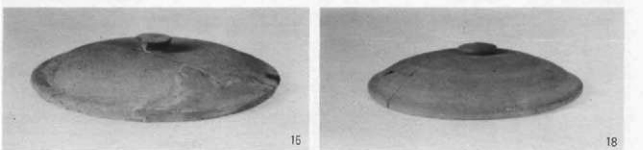
図版第25

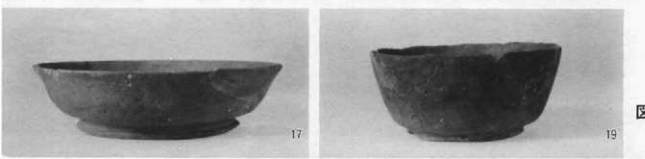


No. 6 遺跡
出土遺物





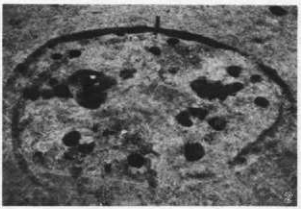




図版第26

No. 7 遺跡

1. 遠　景
東から



2. 第101号住居跡
北から

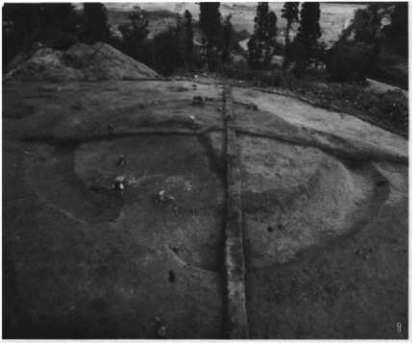
3. 第102号住居跡
北から

4. 第103号住居跡
南東から

5. 遺物出土状態
北西から

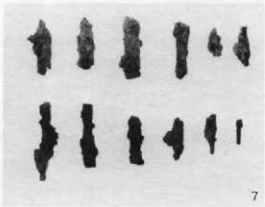
6. 第5・6号墳
東から

図版第27

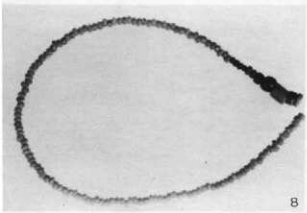


No. 7 遺跡

1. 第5号墳
北から
2. 第7号墳
西から
3. 第2号墓壙
南から



4・6 第6号墳
5・7 第5号墳



8 第7号墳
第1主体部

9～12台地上
出土遺物

図版第28

昭和55年度小杉流通業務団地内遺跡群発掘調査参加者一覧

堀宗清・市堰賢二・北山義春・赤井栄作・奥野善次・田中幸太郎・洞口尚義・徳中真・前川敏夫・丸山久一・京角実・土佐重雄・黒田三郎・吉田帝次郎・三井力・長谷修吉・佐藤長太郎・五十嵐信彦・山田良夫・西島義久・新谷政雄・石井明・村中尚武・永田嘉一・南周一・中山一長・黒田龍志・石井章雄・川端義三郎・佐野吉造・京谷久雄・田中秀二・冨田三郎・大亀豊・松本勝・毛利仁志・吉川直・松本靖彦・篠原加津也・中川和人・北角政信・金瀬敏行・高田徹・清水邦弘・山下敬介・滝田徹・田畑誠・吉岡進・阿部正一・広林吉治・中川幸成・江川二郎・江川満・中本善夫・久保隆二・荒谷栄一・長丸進・山崎利雄・牧野美信・吉島伸夫・藤原健児・浦上寛人・桜森幸治・我田利夫・稲垣きよ志・近藤美恵子・宮崎美代子・中川みどり・鎧塚李子・市堰文子・水田かの・篠原やよい・徳井唱・野美好・熊藤俊子・若崎百合子・山崎かの・松長雪子・新堰節子・鎧節子・岡崎厚子・数井礼子・山口玲子・浅野すみ子・森田よし子・高田もとえ・西本きみ・村田信子・宮崎ます・川端ゆきえ・才藤かずい・田畑ゆき・中村きみ・竹島澄子・熊藤すみ・篠原ちよ子・多田そのえ・坂田めよ・塚元則子・竹島静枝・丹保とし子・山下アヤ子・江尻幸子・篠原のぶえ・丁場富子・四辻幸子・京角外枝・北山澄子・宮林かおる・宿屋とき・山下ナミ・林峰子・宿屋はつえ・山屋多賀子・宮林佐代子・山屋たみ子・北山きく子・上谷アキ・上谷まさえ・寺口アキ子・小西イミ子・中町照子・宮内百合子・西脇美智子・中田さち子・尾山景子・川田すみ子・萩原ツヤ・高井敏江・樽井可江・飛口美重子・小松暁子・伏木公子・竹迫篤子・八箇恵美子・高藤信子・浅野悦子・島誠子・日南文子・岡寛子・菅原敬子・久野かのい・森田笑子・田村信子・村上百合子・横本フミ・小路元枝・京角美佐子・鈴木悦子・堰きよ・上田みさを・清水千代子・砂原ナツ子・新屋玉子・竹島美幸・林美智子・南幸子・京角とみ子・宮林都・山口春代・北野美代子・深川芙美子・大間知紀子・綿谷とし子・光地茂美・坂井みゆき・横田操・黒田愛子・折橋恭子・飯塚令子・山本富子・喜田朝子・山田洋子・谷岡朗子・原野久子・棚田咲子・菅野滝子・竹田美津子・高畑敦子・米谷弘子・浜野かつみ・福島玲子・小田原弘美・原野道子・明野サダ・岡本澄子・大崎嘉代子・山本ゆかり・東野イミ子・山田泉・吉岡秀子・松本たみ子・塚本菅子・石田文子・熊本愛子・上遠仁子・中町照子・鷹島和子・平野すえ・黒田信子・宮林智美・高田春子・山崎しさえ・南春枝・小竹富佐子・大垣喜代美・篠原みね子・水野優・瀬川芳子・堰下美子・金谷幸江・萩原昭子・安井恵子・岩本照代・小倉道子・佐伯とよ・藤沢則子・矢野せち・林かつえ・岡崎秋子

昭和56年度小杉流通業務団地内遺跡群発掘調査参加者一覧

山森伸正・有馬明吉・丸山久一・吉岡進・横堰卓吉・荒井和樹・田畑誠・吉岡浩・広林吉治・川辺弘之・樋爪富美男・荒隆・赤倉久・上田みさを・徳井唱・吉岡秀子・篠原みね子・砂原ナツ子・福田よし子・山下アヤ子・山口みな子・肥田花子・山崎みさ・鎧塚李子・塚本菅子・鎧節子・新堰節子・山崎久子・鈴木悦子・塚本則子・山本千代子・熊本愛子・鈴木トミ子・広永節子・堰下寛子・鈴木文子・松長利子・宮林かおる・北山きく子・上谷アキ・新屋玉子・宮林都・山屋たみ子・京角とみ子・宿屋はつえ・萩原昭子・宿屋とき・林峰子・北山澄子・岡田徳子・野村美春・宮林佐代子

富山県小杉町・大門町

小杉流通業務団地内遺跡群

第3・4次緊急発掘調査概要

発行日　昭和57年3月31日

編　集　富山県埋蔵文化財センター

発　行　富山県教育委員会

印　刷　株式会社チューエツ